

国際シンポジウム「帝国日本の専門教育

—高等商業学校と女子高等師範学校を中心に」記録

阿部安成（滋賀大学経済学部教授）

金泰雄（ソウル大学校師範大学歴史教育学科教授）*

今井綾乃（滋賀大学経済経営研究所客員研究員）*

金廣珪（韓国教育課程評価院副研究委員）*

（*は国際シンポジウム報告者）

国際シンポジウムの記録作成にあたって

（阿部安成）

本稿は、2025年12月20日に滋賀大学彦根キャンパス総合研究棟において、対面とオンラインを併用して開催した国際シンポジウム「帝国日本の専門教育—高等商業学校と女子高等師範学校を中心に」の記録である。滋賀大学経済経営研究所、朝鮮史研究会、科学研究費助成事業基盤研究（C）一般25K04418「産業化における同時代史としての高等商業教育をめぐる比較実証研究」（研究代表者阿部安成）、同基盤研究（C）一般24K04197「近代朝鮮における女性専門職に関する研究：教員・医師を中心に」（研究代表者崔誠姫）の共催として、この国際シンポジウムを開催した。開催にあたった関係者、とりわけ、原稿の翻訳者と会場での通訳者、滋賀大学経済経営研究所スタッフの尽力に感謝するしだいである。

国際シンポジウム終了後に、上記報告者3名から報告内容を滋賀大学経済学部の Working Paper Series として発信することへの同意を得て、かつ、開催当日に会場で配布した報告原稿をそのまま載せることについては（ただし、ページノブルはあらたにつけ、ハンブル表記稿は稿末にまとめて載せてページノブルは配布資料のままとした）、上記科学研究費助成事業前者の研究代表者と研究分担者で合意して本稿を作成したしだいである。したがって、本稿の責任は、上記科学研究費助成事業前者の研究代表者と研究分担者にある。

なお、国際シンポジウムに登壇した報告者の報告は、当日の配布資料のまま2言語とし、この「国際シンポジウムの記録作成にあたって」は1言語とした。

わたしたちの科学研究費助成事業は、研究課題「産業化における同時代史としての高等商業教育をめぐる比較実証研究」のもとで、3つの研究視角を設けている⁽¹⁾。

第1に、欧州と北米大陸における高等商業教育と、東アジアにおけるそれとを、前者が先進、後者を後発とみるよりも、数十年でいどの差をふくんだ同時代の事象とみて、それを産業化の一つの推進力ととらえる点である。

第2に、東アジアにおける高等商業教育を〈帝国-植民地〉という場、関係、統治におい

(1) その一端を、阿部安成「高商歴史—その史料と研究」（『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』第56号、2023年）で示した。

てとらえる点である。19世紀から20世紀中葉にかけての官立高等商業学校は、東アジアの列島だけでなく、台湾、朝鮮半島、中国大陸にも設置された。それら全体を視野にいれ、かつ〈帝国・植民地〉との観点を高等商業教育史研究に組み入れることを目的としている。

第3に、産業化の時代における高等商業教育を考えるさいに、それが展開した高等商業学校を単独でとりあげるのではなく、複数の学校の相互比較においてとらえる点である。

また、第4の研究視角としてかかげるには、まだわたしたちのあいだで議論が熟していない論点として、ジェンダーがある。東アジアにおける官立高等商業学校は、(そしてまた、公立と私立の高等商業学校もおなじく)、ほとんどの教官(多くの職員も)が男性であり、すべての生徒がまた男性であり、実業人男性を育成するための実学教育機関であった⁽²⁾。

国際シンポジウムでは、このジェンダーという論点を高等商業教育史研究にむけていっば研ぐために、女子高等師範学校史研究に学んだ。

国際シンポジウム開催にむけてその準備には短い時間しかあてられなかったものの、当日の3報告では、それぞれの学校で学んだ生徒たちが、卒業後に、なにになったのか/なれなかったのか、どういう職業に就けたのか/就けなかったのか、など教育を経た青年たちのその後焦点があわされた。そこではまた、戦争と敗戦、植民地統治と光復とが青年たちそれぞれの人生を左右していた。そうした卒業後のゆくすえを、個別にとりあげてそのいわば光と影とを論じたり、あるいは、おおまかな動向をつかんだりするところから教育なるものの効果や影響や作動(operate)を考えるための視野が開かれた。

末尾に記す非礼を自覚して、この国際シンポジウムでは、京都女子大学の石川裕之教授のコメントを得て、そこでの「aspiration」の語を鍵として今後の研究に活かすとの展望を示して⁽³⁾、感謝の意をあらわしたい。

本稿は、上記2025年度科学研究費助成事業基盤研究(C)(一般)2件と2025年度滋賀大学経済学会公募型特別事業「東アジアをフィールドとした産業化時代における高等商業教育のグローバル・ヒストリー—その比較実証研究」(事業実施代表者滋賀大学経済学系阿部安成)の成果の1つである。

(2) 正規の生徒ではないものの、長崎高等商業学校が開校した夜学講習では同校の教室で女性が学んでいた(阿部安成「夜に学ぶ—20世紀前期の長崎高等商業学校における1万2036人への実務者教育」Working Paper Series No.144、滋賀大学経済学部、2011年1月、同「講義録瀨祭—長崎大学経済学部東南アジア研究所所蔵「長崎高等商業学校講義録」等目録、同前No.178、同前、2012年11月、同「おんなたちの学舎、おとこたちの立身—「長崎高等商業学校の夜学講習」考補遺」同前No.194、同前、2013年6月、同「おんなたちが学ぶ夜の場—20世紀前期に開講した長崎高等商業学校の夜学講習と受講者」『女性史学』第23号、2013年7月、を参照)。

(3) この「aspiration」については、同シンポジウムの報告書でかんたんながら記した(冊子体では『彦根論叢』第447号、2026年3月、所収の「学内研究消息」を、Webでは<https://www.econ.shiga-u.ac.jp/ebrisk/2020/events/2025SymposiumReport.html>、を参照)。

日帝下京城高等商業學生の立場と卒業生の進路

金泰雄(ソウル大学)

1. 序言

第一次世界大戦が終わる頃、寺内内閣が米騒動の余波で総辞退した後、文民官僚である原敬内閣が成立し、直後に植民地朝鮮で三一運動が勃発し、全朝鮮に拡散した。原内閣は三一運動に対する收拾策として内地延長主義に基づいて植民地朝鮮に対する政策を変更したが、教育部門においても他と同様に「内鮮共学」の原則の下に朝鮮教育令を改正し、一九二二年に専門学校は日本の専門学校令に、大学教育および予備教育は日本の大学令に準ずるようにした。このような処置は植民地朝鮮の専門学校に朝鮮人と日本人がともに入学できる道を制度的に保障すると同時にこれらの学校の卒業生が本国日本と植民地朝鮮で同等な資格を認める契機となった。

しかし日帝のこのような処置は民族同数の方針の下に朝鮮人が多数を占めた既存の官立専門学校に日本人が多数入学できる条件をつくりだす契機となった。¹その反面、日本人学校といって過言ではなかった「東洋協會専門学校」(後に拓殖大學へ変更) 京城分校は「私立 京城高等商業学校」(1920)を経て「官立 京城高等商業学校」(以下京城高商と略称、1922)に転換し、朝鮮人も入学できるようになった。²このような変化は大韓帝国がなくなったことにより日本人たちが主要な高位官職を占めるなかで、官職への進出機会を多数喪失した朝鮮人にとって、もう一つの階層上昇の機会として捉えられたのと同時に、高い報酬やよい処遇が保障される職場に就職できる通路として映った。近代学歴主義と学閥が提供する特惠であったわけだ。多数のエリート朝鮮人学生が京城高商に入学するために尽力したのはこれゆえであった。

しかし朝鮮人たちの期待とは異なり、入学開放の機会は極めて制限されていた。『東亜日報』は一九三六年二月七日の紙面で各専門学校を紹介して京城高商に触れており、そこで記者は「入学の難しさにおいても朝鮮人の不平等待遇においても最も俎上に挙げなければならない学校も京城高等商業学校であり、朝鮮人と最も縁の薄い学校も京城高商であることは、この記事で実証されるだろう」という文句を冒頭に書いた。京城高商が朝鮮人に入学機会を提供しているにもかかわらず他の官立専門学校に比べて入学制限が最もひどかったことを示す言説であるといえる。さ

¹ 金泰雄・張世胤『日帝の高等教育政策』東北亞歴史財團、二〇二二、七九～八〇頁。

² 京城高等商業学校の起源は一九〇〇年に東京に設立された台湾協會学校にはじまる。台湾協會は日本が一八九五年に日清戦争に勝利し台湾を植民地として統治することになり、台湾の事情を研究するためにつくった団体である。協会はその後台湾に進出し、植民事業に従事する人材を養成するために台湾協會学校を設立した。この学校は一九〇四年に専門学校に昇格し、一九〇七年に東洋協會専門学校に改称した。台湾のみならず朝鮮と満洲での植民事業を包括するためであり、改称と同時に東洋協會専門学校京城分校をソウルの筆洞に設置した。一九一八年には行政科と高等商業化を設置し、修学年限を三年としたが、一九一九年には行政科を廃止した。

らに『朝鮮日報』は現在の朝鮮の各方面の職場が日本人に占領されたと主張し、日本人が簡単に就職していると強調した。³果たして京城高商は『東亜日報』の報道通りに民族的偏見を持って朝鮮人学生を差別して入学を制限したのか。また『朝鮮日報』の主張通りに日本人は朝鮮人よりも報酬と待遇の良い職場に簡単に就けたのか。あるいは朝鮮総督府の当局者の言う通り朝鮮人の学力不足なのか。

これまで韓国では教育史研究の対象が近代転換期の新教育の出発といえる初等教育に対する研究を超え、日帝下の中等教育と高等教育へ移ってきている。なによりもこれらの教育機関に在学していた朝鮮人学生たちが初等教育機関に比べて極めて少ないにもかかわらず、この学生たちが解放後の韓国の経済成長と学術発展に寄与したエリートだという点で、この学生たちの成長過程と屈曲を歴史的に追跡する必要があるためである。⁴とりわけ当時の民族差別が最もひどかったと評価される京城高商の場合、朝鮮人と日本人学生たちはどのような基準で選抜され、このような基準が卒業後の進路にどのような影響を及ぼしたのかを実証的に分析する必要がある。そしてこのような検討過程において成績ではない諸要因がどのように作用したのかを把握する必要がある。しかしこのような学生選抜の基準、そして学校の成績と就職の相関関係を直接確認できる資料や指標を発掘するのは極めて難しい。それは学生の職場選好度、求人機関の職員採用基準が非常に多様であるだけでなく、このような資料が原状態のまま残っていないためだ。それにもかかわらず、現在残っている学籍簿や同窓会の名簿、学校一覧などは入学と卒業、そして就職の傾向を追跡できる端緒を提供している。入学生数の期数別の民族構成、出身学校の現況、就業職群などを時期別に区分し、統計上の処理をした後、かれらの様相と特徴を追跡していきたい。教育課程よりは経済状況と戦時体制を念頭に置き、時期を大きく三つに区分した。第一期は京城高商の最初の卒業生が輩出される一九二一年から一九二九年一〇月の大恐慌直前まで、第二期は一九二九年の大恐慌から一九三七年の日中戦争直前まで、第三期は日中戦争以降同窓会名簿の最後の該当年度である一九四三年までである。

このような作業が当初の目標どおり遂行されれば日帝の官立専門学校政策が学校現場に及ぼす影響を具体的に把握できるのみならず、このような傾向が学生たちの立場および活動と結びついて卒業後の進路とどのような相関関係を結んでいるのか解明できるであろうと判断される。

二、卒業生の民族構成と地域分布

³ 「各学校生卒業に臨み職業問題の傾倒如何」『朝鮮日報』一九二六年三月三日付。

⁴ 宋興麗「京城高等商業學校が韓國經濟近代化に果たした役割——1945年度以前入學者及び卒業生の社會進出狀況を中心に」『拓殖大學百年史研究』4, 拓殖大學日本文化研究所附屬近現代研究センター、2000；金泰雄「日帝下官立専門學校の運営基調と位相の變化——第一次・第二次朝鮮教育令時、「ソウル大学の前身学校」を中心に」『延禧専門學校の学問と東アジアの大学』（金度亨編）ヘアン、二〇一六 丑）；キム・ジャジュン『韓国大学の根』韓国放送通信大学校出版文化院、二〇二二；趙愨珍「植民地朝鮮の官立専門學校と「内鮮共学」——京城法學専門學校・京城高等商業學校を中心に」ソウル大学博士論文、二〇二五。

1) 第一期（一九二一～一九二九）

まず京城高商に入学した学生たちの民族別構成と居住地別現況を把握する必要がある。〈表一〉は現在残っている学籍簿を中心にエクセルで構築したものであり、京城高商一覧表の数値と多少の違いが生じるが、おおよその様相は類似している。

〈表一〉一九二一年～一九二九年、京城高等商業学校卒業者の民族・居住地別現況（単位：人）

民族 卒業 年度	朝鮮人		日本人			その他 (未詳を 含む)	計
	在朝	在日	在朝	在日	在中		
1回 (1921)	0	0	10	22	0	0	32
2回 (1922)	0	0	10	12	0	0	22
3回 (1923)	0	0	18	35	0	0	53
4回 (1924)	0	0	24	27	2	0	53
5回 (1925)	5	0	32	29	4	0	70
6回 (1926)	7	0	29	15	8	1	60
7回 (1927)	13	0	36	24	4	0	77
8回 (1928)	8	0	27	25	3	2	65
9回 (1929)	8	0	29	24	5	0	66
計 (%)	41 (8.2)	0 (0.0)	215 (43.2)	213 (42.8)	26 (5.2)	3 (0.6)	498 (100)

出典：京城高等商業学校同窓會 編，『京城高等商業学校 学籍簿』（1921～1929）

京城高等商業学校同窓會 編，『會員名簿』，1944

備考：在日日本人と在朝日本人は京城高商入学以前の出身学校所在地によって区分した。

〈表一〉によると、学校開校設立初期に日本人たちが大勢入学した。日帝は日本人学生が多数入学できるように東京に試験会場を設けたほどであった。⁵それはなによりも日本本国の高等教育機関が学齢人口に比べて不足していたからだ。とりわけ在朝日本人はもちろん本国の日本人を引

⁵ 「高等商業試験場撤廃問題」『東亜日報』一九二三年一月二九日付。

き寄せ、朝鮮内の日本人の経済的立場を強化し、植民統治の根幹として活用しようとしたからだ。しかし朝鮮人と在朝日本人は日帝のこのような政策に反発した。両者は同床異夢であったが、自分たちの入学に不利だと判断したからだ。これに対し朝鮮総督府は在朝日本人の子女の入学比率を高めるために東京試験場を廃止した。⁶それは朝鮮総督府が意図的に朝鮮人を排除した側面もあったが、朝鮮人中等学校の絶対的な不足によって朝鮮人たちの入学志願者が少ないと判断したからだ。⁷もちろん在朝日本人たちは朝鮮人高等普通学校出身者たちの京城高商入学もまた問題とした。朝鮮人学生の入学が京城高商に対する評判を落とすと主張し、退学も辞さないというほどであった。

したがって一九二二年に入学した朝鮮人学生が一九二五年二卒業はじめたが、その数は極めて少なかった。その後も少しずつ増加したが第一期の朝鮮人卒業生は全体卒業生の一〇%に満たなかった。当時の新聞も一九二一年から一九二六年までの卒業生は九六八人であり、そのなかで朝鮮人は一一〇人であるために全体の一一%に過ぎないと報道した。⁸その他に京城高商の前職職員と現職職員をあわせて八八人であるが、朝鮮語講師の一人だけが朝鮮人であった。

朝鮮人学生のこのような少ない入学はなによりも朝鮮人たちの経済的困窮による学資金難によるものであった。⁹また日本人志願者は日本語と日本史に強く、朝鮮人の競争力は日本人に比べて弱くならざるをえなかった。また朝鮮総督府の朝鮮人に対する思想取り締まりが伴っていた。さらには朝鮮人の言論の主張によれば、入学比率に内規があり朝鮮人に不利だというものもある。例えば専門学校の校長らのあいだで一定の不文律の内規があり、日本の中等学校を卒業してやってきた学生に優先権を与え、募集人員の総数の五割はかれらのために提供し、残りの五割で朝鮮出身の日本人学生と朝鮮人学生を収容したという噂が立っていた。¹⁰日帝は世論を意識して定員の五割は朝鮮地域で卒業した学生（朝鮮人と日本人の関係なく）を選抜し、残りの五割は自由競争に任せ、日本からであれ中国からであれ関係なしに学力優秀者を選抜すると表明した。しかしこのような方針は五割を朝鮮外から選抜するという方針に他ならなかった。とりわけ在中日本人学生の入学も少なくなかった。日本人学生たちは職業上満洲や中国などで活動している父について中国所在の学校を卒業した後に京城高商に入学した学生であった。

したがって朝鮮人学生たちはこのような不利な条件を考慮し、日本人学生に比べて志願者が少なかった。第一期の入学競争率の推移を示す統計を直接探することが困難であり、一九二七年の官立専門学校の入学競争率を示す現況を提示すれば、〈表二〉のとおりである。

〈表二〉一九二七年四月官立専門学校の民族別志願と入学現況

	京城高工	京城高商	京城法専	京城醫専
--	------	------	------	------

⁶ 趙愷珍、前掲論文、一一七～一一八頁。

⁷ 「朝鮮人と教育問題」『朝鮮日報』一九二七年一月五日付。

⁸ 「入学難の各官専を訪ねて（四）」『東亜日報』一九三六年二月七日付。

⁹ 「だれのための専門大学」『朝鮮日報』一九三二年三月一八日付。

¹⁰ 「日本から来た学生に優先権、総数の五割を提供」『東亜日報』一九二八年七月二五日付。

出身学校 志願/入学	朝鮮人		日本人		朝鮮人		日本人	
	朝鮮人	日本人	朝鮮人	日本人	朝鮮人	日本人	朝鮮人	日本人
志願者(a)	104	255	80	304	160	50	165	413
入学者(b)	15	40	15	87	45	31	16	80
入学者 比率(%)	27.3	72.7	14.7	85.3	59.2	40.8	16.7	83.3
b/a(%)	14.4	15.7	18.8	28.6	28.1	62.0	9.7	19.4

出典：「朝鮮学生は暁天の星辰」『朝鮮日報』一九二七年四月一四日付。

京城高商の場合、朝鮮人合格者が全体合格者定員に占める比率が相対的に低かったために、不合格になるのではないかという心配があり、京城法専と異なって朝鮮人学生の志願者が少なく、入学競争率が低かった。当時の京城高商の就職率が極めて高かったにもかかわらず朝鮮人志願者が増えなかったのは「朝鮮人はあまり入れてくれない」という朝鮮社会の通念が下敷きになっていたのだ。

このような通念は京城高商に入学した学生たちの出身学校からも明らかに現れる。〈表三〉は京城高商に入学した学生たちを輩出した中等学校の順位である。

〈表三〉一九二一～一九二九年京城高商入学者の学校順と学生数

中等学校	京城中	善隣商	龍山中	仁川南 公立商業 学校	平壤中	全体入学者
学生数(%)	63(12.7)	38(7.6)	23(4.6)	19(3.8)	17(3.4)	498 (100)

資料：京城高等商業学校同窓會 編、『京城高等商業学校学籍簿』

〈表三〉によると、京城中学校出身が京城高商合格者のうち一二・七%を占めている。このような比率は在日日本人学生たちを含めた数を考慮すると極めて高い数値である。善隣商業学校もまた低くない比率である。つづいて龍山中と仁川南公立商業学校、平壤中となっている。ところでこれらの学校のうち日本人だけが通う中学校が一〇〇人あまりとなる。全体四九八人のなかで五分の一を占める比率だ。さらに善隣商業学校と仁川南公立商業学校もまた日本人中心の商業学校である。要するに特定の中学校の学生と商業学校の学生が京城高商在学生の定員を独占しているのである。このように朝鮮人中等学校出身学生が入学する可能性が低かったことを語っている。

他方で学生たちの経済事情を推測できる記録が学籍簿からは見てとれない。ただ一九二八年に発行された『京城高等商業学校一覧』（一九二八）によると、一九二七年現在一年、二年、三年の父の職業を通して推測できる。〈表四〉がそれである。

〈表四〉一九二七年現在、京城高等商業学校在学生の父兄の職業

	1年生	2年生	3年生	計(%)
農業	12	8	12	32(13.9)
工業	-	3	7	10(4.3)
商業	24	18	14	56(24.3)
官吏	25	15	8	48(20.9)
教員	4	3	2	9(3.9)
会社員	8	11	11	30(13.0)
その他	17	12	16	45(19.6)
計	90	70	70	230(100)

出典：京城高等商業學校 編、『京城高等商業學校一覽』(1928)

〈表四〉によれば、父兄の職業のなかで商業が最多の割合を占めている。しかし当時の職業構成に照らしてみると、官吏の比重が最大であるといえる。その反面、当時最大の比率を占めていた農業の場合、会社員の比率と同じくらいであるという点で、農業を主業とする地主すら子どもを京城高商に入れることは大きな負担であったと推測できる。

それにもかかわらず一部の豊かな朝鮮人家庭では京城高商に子どもを入れようとした。代表的な例として一九二八年（第八回）に卒業した都定浩（後に都宥浩と改名）を挙げることができる。彼は一九〇五年に咸鏡南道の咸興で生まれ、生家は代々咸興で比較的豊かな家であった。¹¹学籍簿（徽文高等學校所蔵）では、彼の本名は「都定浩」と表記されている。咸興永新学校と咸興永生学校四年を修了して一九二二年ソウルの徽文高等普通學校の五年に編入し、一九二三年に卒業した。徽文高等普通學校を卒業した都定浩は一九二四年四月に京城高商に進学したが三年に進級するころ、病によって一年間休学し、金剛山で休養し、一九二八年三月に卒業した。京城高商を卒業した年に日本に渡り、神戸商業大学の入試に合格した。しかし商業大学に行く意志はなく登録をしなかった。彼はドイツを経てオーストリアのウィーン大学で「Probleme der koreanischen Geschichte in kulturellem Zusammenhang」（文化的文脈から見た朝鮮史の問題）という論文で哲学博士学位を取得した。後には北朝鮮に残り、考古学の土台を磨いた。

2) 第二期（一九三〇～一九三七）

一九二九年の経済大恐慌は、卒業生はもちろん入学志願者にも影響を及ぼした。なによりも一九二〇年代後半の経済沈滞と経済大恐慌によって学生たちの官立専門学校志願に少なくない影響があったと考えられる。とりわけ本国の日本人学生の志願者が激減し、これによる合格者数も減少した。その反面、在朝日本人と朝鮮人の志願者数が増加し合格者も増加した。〈表五〉はこの

¹¹ 韓昌均『ハダム都宥浩：韓国考古学の第一世代』へアン、二〇一七；全京秀「植民地知識人に対する帝国日本の監視と搾取」『近代書誌』一七、二〇一八。

ような趨勢を示している。

〈表五〉一九三〇～一九三七年京城高等商業学校卒業者の民族・居住地別現況（単位：人）

民族 卒業 年度	朝鮮人		日本人			その他 (未詳を 含む)	計
	在朝	在日	在朝	在日	在中		
10回 (1930)	13	0	42	14	3	0	72
11回 (1931)	12	0	44	17	1	2	76
12回 (1932)	16	1	41	21	2	0	81
13回 (1933)	12	0	51	17	0	0	80
14回 (1934)	16	0	44	20	0	0	80
15回 (1935)	15	0	48	18	2	0	83
16回 (1936)	17	0	58	17	2	0	94
17回 (1937)	15	2	58	10	3	0	88
計 (%)	116 (17.8)	3 (0.5)	386 (59.0)	134 (20.5)	13 (2.0)	2 (0.3)	654 (100)

出典：京城高等商業学校同窓會 編、『京城高等商業学校 学籍簿』(1930~1937)
京城高等商業学校同窓會 編、『會員名簿』, 1944

〈表五〉によると、第一期に比べ朝鮮人学生の増加がはっきりしている。第一期の八・二%から一七・八%に増加した。それはなにによりも在日日本人の志願者が減少した点に原因を求めることができる。¹²第二期の在日日本人卒業生比率が第一期に比べてなんと半分に減少した。

また朝鮮人志願者のこのような入学率増加は朝鮮人学生の入学競争率増加として現れた。

¹² 在日日本人志願者の減少原因に関しては日本国内の入試状況、進路問題と留学による学費負担などを把握する必要がある。ただ、発表者がこれに関する資料を確保できておらず、この問題は今後の課題とする。

〈表六〉一九三〇年代前半官立専門学校の民族別入学競争率現況

年度/民族 学校	1931		1934	
	朝鮮人	日本人	朝鮮人	日本人
京城法専	4.5	2.5	7.1	2.9
京城醫専	14.3	7.7	7.7	9.1
京城高工	3.3	4.2	5.0	5.9
京城高農	3.3	4.0	7.7	6.3
京城高商	5.3	4.7	9.1	4.5
計	5.5	5.0	7.1	6.3

出典：「六二四人志願、一一四人合格」『東亜日報』一九三一年四月七日付；「官立高専合格者状況比較」『東亜日報』一九三四年三月二九日付。

〈表六〉によると、一九三一年と一九三四年を基準に朝鮮人学生の京城高商入学競争率はその他の官立専門学校に比べて非常に高い反面、日本人学生の入学競争率が多少低下したことが確認できる。

もちろん在日日本人の志願者減少が特定の学校に集中する傾向を緩和させることはできなかった。〈表七〉はこのような様相をよく示している。

〈表七〉一九三〇～一九三七年京城高商入学者学校順位と学生数

中等学校	京城中	龍山中	善隣商	京城商業学校	平壤中	全体入学者
学生数 (%)	102 (15.6)	80 (12.2)	61 (9.3)	37 (5.7)	26 (4.0)	654 (100)

出典：京城高等商業学校同窓會編『京城高等商業学校学籍簿』

〈表七〉によれば日本人中学校が一位、二位、五位を占めているにもかかわらず、全体比率は第一期に比べて多少低くなり、商業学校比率が高まった。とりわけ五位までに入りはしなかったが朝鮮人学校である京城第一高普出身が一七人に達するほどであった。そして第二期に高普出身の比率が第一時期の六・四%からはるかに上昇し一%に達する反面、中学校出身は六六・一%から五八・三%へ多少減少した。¹³もちろん日本人学生が占める比率が朝鮮人学生に比べて圧倒的だという点は否定できない。しかし日本人中心の京城高商に多少なりとも亀裂が入っていることにも注目する必要がある。

¹³ 『京城高等商業学校学籍簿』（一九二一～一九三七）から学校別に分析し抽出した数値である。

3) 第三期 (一九三八～一九四三)

第三期は日中戦争の勃発によって戦争に必要な兵士をはじめとし多くの人力が必要な時期だ。したがって入営と戦死による在日日本人学生の減少がみられる反面、朝鮮人学生の増加が予測できる。〈表八〉は一九三八～一九四三年の京城高商の卒業生の推移と民族・居住地別現況である。

〈表八〉一九三八～一九四三年京城高等商業学校卒業生の民族・居住地別現況 (単位: 人)

民族 卒業 年度	朝鮮人		日本人			その他 (未詳も 含む)	計
	在朝	在日	在朝	在日	在中		
18回 (1938)	30	0	67	14	3	0	114
19回 (1939)	20	1	57	12	0	0	90
20回 (1940)	19	0	57	8	0	0	84
21回 (1941)	23	0	68	5	0	0	96
22回 (1941)	32	0	56	10	1	0	99
23回 (1942)	32	0	62	7	0	0	101
24回 (1943)	37	0	56	13	2	0	108
計 (%)	193 (27.9)	1 (0.1)	423 (61.1)	69 (10.0)	6 (0.9)	0 (0)	692 (100)

出典: 『京城高等商業学校 学籍簿』(1930~1937)

京城高等商業学校同窓会 編, 『會員名簿』, 1944

備考: 二二回 (一九四一年一二月) 卒業——学期短縮

二三回 (一九四二年九月二五日) 卒業

二四回 (一九四三年九月二二日) 卒業

〈表八〉によればなにによりも在日日本人在学生の減少が顕著である。なにによりも戦時体制期に突入し、在日日本人の植民地朝鮮への留学が急激に減少した反面、このような空白を朝鮮人学生が占めた。¹⁴第二期に一七・八%に過ぎなかった朝鮮人学生の比率が第三期に入ると二七・九%に

¹⁴ 朝鮮人による空白の補填は職場の場合でも同じである。銀行の場合、日本人行員の入隊で発

至った。在朝日本人学生の比率は五九・〇%から六一・一%へわずかに増加した。とりわけ一九四一年卒業生（一九三八年入学生）の場合、極めて少ない。それは一九三七年の日中戦争の勃発と兵力増加による入営者の増加によると考えられる。

〈表九〉一九三七～一九三九年京城高等商業学校入学志願現況

民族別 入学年度	朝鮮人			日本人		
	入学志願者	入学生	入学競争率	入学志願者	入学生	入学競争率
1937	144	16	9.0	328	83	3.4
1938	194	27	7.2	308	73	4.2
1939	152	40	3.8	292	64	4.6

出典：京城高等商業学校同窓會 編，『京城高等商業学校一覽』（1938～1940）

〈表九〉によると、朝鮮人学生の入学者が日本人学生の場合とは異なって増加したにもかかわらず入学競争率が急激に落ちたのは、なによりも戦時体制に入り学資金不足による結果と見られる。¹⁵当時、朝鮮人たちの購買力現象が日本人たちの場合よりも急激に顕在化した傾向と比例していた。¹⁶とりわけ一九三九年の大旱害による凶作は朝鮮人経済に大打撃を与え、戦時農業統制による地主経済の悪化が際立った。

他方で朝鮮人学生の増加にもかかわらず入学生の出身学校の偏りはなかなか改善されなかった。〈表一〇〉は京城高商入学者が日本人中心の中学校に偏重していたことを示している。

〈表一〇〉一九三八～一九四三年京城高商入学者学校順位と学生数

出身学校 学生数	京城中	龍山中	京城商業	善隣商	京畿中	計(人)
	101(14.6)	97(14.0)	57(8.2)	55(7.9)	29(4.2)	692

備考：京畿第一高普は一九三八年四月に京畿公立中學校（京畿中）へ校名変更。

生した人力空白を埋めるために朝鮮人を採用した。これについては鄭炳旭「朝鮮殖産銀行と韓国産業銀行の職員採用——連続と差異」『韓国史学報』五一、二〇一三、二三三頁参照。

¹⁵ 専門学校以前の段階と言うことのできる高等普通学校の場合、専門学校や大学まで学資金を支援してもらえる程度の経済力がなくてはならなかったが、戦時体制に入り家庭経済が困難になり専門学校課程を放棄する学生が続出した。高等普通学校の学資金と中途辞退に関してはアン・ホンソン、前掲書、二九一～三〇一頁参照。

¹⁶ 戦時体制の生活経済に関しては、李松順「日帝下一九三〇・四〇年代農家経済の推移と農民生活」『歴史問題研究』八、二〇〇二、一一〇～一一一頁；李松順「日帝末戦時体制下「国民生活」の強制とその実態」『韓国史学報』四四、二〇一一、三一三～三二六頁参照。

〈表一〇〉によれば京城高普に卒業生を入学させた中等学校で日本人中心の中学校が一位と二位を占めている。ただ以前の時期と異なって、朝鮮人中心の京畿中学校が五位圏に入ったという点で当時朝鮮人入学生の増加と極めて密接であったことが確認できる。しかし朝鮮人入学生の増加が卒業後の進路選択に肯定的に影響を及ぼしたかどうかはさらに分析する必要がある。第三章ではこのような諸要因を集中的に分析する。

3. 卒業生の進路と民族的層位

1) 第一期（一九二一～一九二九）

京城高等商業学校出身者たちは社会的評価どおりに学力エリートとして他の専門学校に比べて就職率が非常に高かった。〈表一一〉は京城高商卒業生会員名簿のなかから、一九四三年の職場を明かした卒業生の就職現況を抽出したものだ。¹⁷

〈表一一〉 一九二一～一九二九年京城高等商業学校卒業生の就職現況（単位：人）

職群 民族	朝鮮 銀行	殖産 銀行	専賣 局	鐵道 國	滿鐵	一般 銀行	金融 組合	官公 署	教員	民間 企業
朝鮮人	0	3	0	1	0	10	1	1	5	6
日本人	17	21	9	23	12	31	23	28	33	137

出典：京城高等商業学校同窓会編『会員名簿』一九四四。

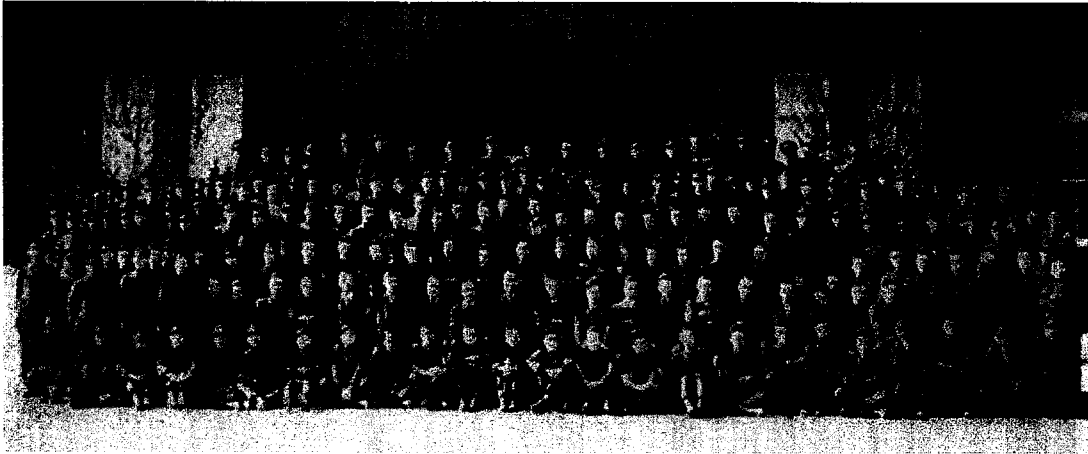
備考：朝鮮人四一人、日本人四五七人のなかで無職と未詳は除外。

〈表一一〉によれば朝鮮人卒業生が非常に少ないとはいえ、最も好まれる職場と言える朝鮮銀行、殖産銀行、専売局、鉄道局、満鉄などに就職した数が極めて少ない。¹⁸これらの職場のほとんどが日本人卒業生が占めたからだ。朝鮮人たちは一般銀行の職員と学校教師に就職した数値が非常に高い。民間企業（商店を含む）もまた日本人卒業生に比べ絶対的に少ない。それはなによりも朝鮮銀行をはじめとした日本系銀行と官公署が朝鮮人たちを意図的に排除したからだ。殖産銀行の場合、採用計画を立てるときから朝鮮人と日本人の採用比率を二対八に定めた後、該当学校に推薦を依頼した。¹⁹京城高等商業学校の場合、第二期と第三期まで念頭に置いて合算したとしても、その比率は二対八である。また成績が優秀でも縁故がない場合や朝鮮人は不利であった。

¹⁷ 学籍簿の一部には卒業後の最初の職場が記入されている。しかしこのような場合は極めて稀であり、ほとんどの職場は一九四四年に発行した『会員名簿』に依拠した。したがって転職状況は追跡できなかった。

¹⁸ 当時、朝鮮銀行をはじめ、満鉄、一般銀行は初任給が良かった（前田一『サラリーマン物語』東洋経済出版部、一九八二、七〇～九九頁；鄭炳旭、前掲論文、二四四頁から再引用）。

¹⁹ 鄭炳旭、前掲論文、二三二～二三七頁。



〈写真一〉一九二五年三月、京城高等商業学校第五期生卒業写真

出典：<http://www.sdmagazine.kr/gr4d5/8>

卒業生のうち、朝鮮人の高乙會、鄭秉昊、裴基烈、李定宰、李世基は一九四四年現在、それぞれ朝鮮土木株式會社、朝興銀行、咸從金融組合、永保合名會社、原州林山株式會社で勤務している。朝鮮人最初の卒業生すら有数の銀行と官公署に就職できず金融組合と一般企業に就職するにとどまった。

2) 第二期（一九三〇～一九三七）

朝鮮人たちの就職傾向は第二期に入っても大きく変化しなかった。〈表一二〉は一九三〇～一九三七年の京城高商卒業者の就職傾向を示すものだ。

〈表一二〉一九三〇～一九三七京城高等商業学校卒業者の就職現況（単位：人）

職群 民族	朝鮮 銀行	殖産 銀行	專賣 局	鐵道 國	滿鐵	一般 銀行	金融 組合	官公 署	教員	民間 企業
朝鮮人	1	6	0	1	0	19	11	13	7	35
日本人	8	12	8	23	4	50	23	67	22	206

出典：京城高等商業學校同窓會 編、『會員名簿』，1944

備考：朝鮮人一一九人、日本人五三五人のうち、無職と未詳は除外

〈表一二〉を〈表一一〉と比較すれば、第一二回（一九三二）卒業生の金裕澤が朝鮮人としてはじめて朝鮮銀行に就職したことが確認できる。彼は一九一一年に黄海道戴寧で出生し、海州公立高等普通学校を卒業した後、京城高商を経て朝鮮銀行に入社したのだ。²¹とりわけ朝鮮人卒業

²⁰ 同上、二四〇頁。

²¹ 金裕澤は京城高商を経て九州帝国大学法文学部を卒業し、一九三八年に朝鮮銀行に入社し

生六人がこの期間に殖産銀行に就職しており、金慶鎮（第一三回、一九三三、開城高普出身）、宋甲一（第一四回、一九三四、京城公立中出身）、宋相仁（第一五回、一九三五、善隣商業学校出身）、白錦洛（第一六回、一九三六、新義州商業学校出身）、鄭遇昌（第一七回、全州高等普通学校出身）、南周鎬（第一七回、一九三七、元山商業学校出身）がそれである。この六人のなかで宋甲一を除いては学年成績上位一〇%に入り、とりわけ白錦洛は学年全体で一位であった。この五人は優秀な成績で民族差別を障壁を突破したのだ。しかし当時の日本人職員のなかで入営者が多かったことを考慮すれば日本人の空白を埋める目的で採用したものと見ることができる。

その他に一二回（一九三二）卒業生に朴斗乗（三木邦彦、創氏改名）を挙げることができる。彼は朴承禔商店の社長朴承禔の息子であり京城公立中学校を経て京城高商を卒業した後、父の商店で勤務し、こんにちの斗山グループの土台を構築した。

3) 第三期（一九三八～一九四三）

一九三七年の日中戦争後、戦争が激化するなかで日本人の入営者が急増し、京城高商卒業者の進路にも影響を及ぼした。〈表一三〉はこのような変化をよく示している。

〈表一三〉一九三八～一九四三京城高等商業学校卒業者の就職現況（単位：人）

職群 民族	朝鮮 銀行	殖産 銀行	専賣 局	鐵道 國	滿鐵	一般 銀行	金融 組合	官公 署	教員	民間 企業
朝鮮 人	5	21	1	0	0	33	9	6	12	58
日本 人	23	21	0	24	2	28	2	8	6	252

出典：京城高等商業學校同窓會 編，『會員名簿』，1944

備考：朝鮮人一五七人、日本人五三五人のうち無職と未詳は除外

〈表一三〉を〈表一二〉と比較すれば朝鮮人卒業生が朝鮮銀行に多数就職したことが確認できる。朴完善（第二〇回、一九四〇、平安北道龍川、仁川公立産業学校、密木義雄）、韓興洙（第二三回、一九四二、京城府、京畿公立商業学校、清原興洙）、陳景得（第二四回、一九四三、京城府、久保景得）、徳川栄一（第二四回、一九四二、新義州商業学校）、徳川清一（第二四回、一九四三、忠清南道牙山、京畿公立商業学校）の五人がそれである。ところでこのなかの徳川清一だけ成績上位二%に入っているが、残りの学生たちは上位一〇%にも入っていない。当時日本人職員たちの入営と戦死による空白を急いで埋める過程で人脈が作用したものと思われる。

この期間の学籍簿から、第二一回（一九四一）に卒業した崔仁圭（崔原仁圭）に注目する必要がある。彼は一九一九年に京畿道広州で生まれ、普成高等普通学校を経て京城高商を卒業した後、一九四四年当時朝鮮生命保険株式会社で勤務し、解放後に延禧専門学校商科を経て、一九四七年ニューヨーク大学商学部編入学し、一九四九年に卒業・帰国した。一九四九年に大韓公益公社

た。その後一九五五年に韓国銀行総裁に就任した。

業務部長に就き、一九五〇年、大韓民国政府の東南アジア貿易視察団の代表として派遣され、理事長にまで昇進した。その後、一九五四年に大韓民国第三代総選挙で自由党の公認を受け、京畿道広州で立候補したが申翼熙に敗れて落選し、しかし一九五五年に李起鵬の斡旋で国際連合韓国復興委員会（UNKRA）ニューヨーク駐在韓国代表に任命され、同年ジュネーブ会談に韓国オブザーバーとして参加し、一九五六年に外資庁長になった。一九五八年、大韓民国第四代総選挙にふたたび広州郡から自由党公認で立候補し当選、九月に交通部長官に起用された。一九五九年三月には李起鵬の推薦で内務部長官に任命され、一九六〇年三・一五不正選挙を総指揮し、流血事態を引き起こした。一九六〇年の四・一九革命で自由党政権が崩壊すると、三・一五不正選挙を総指揮した原因として名指され、同年五月三日に拘束された後、一二月二日にソウル刑務所で絞首された。

4. 最後に

日帝下の植民地朝鮮の高等教育は京城帝国大学を頂点とし、その下位に官立専門学校を配置し、そして私立専門学校を配置するという構造であった。このような構造は形式上では近代学歴主義と序列主義を根幹にしているが内容的にはこのような構造には民族差別の原理が作動していた。京城高商の場合もほかの官立専門学校と同様であった。とりわけ京城高商は設立当初から日本人学校として出発したという点で入学から卒業以降の進路に至るまで民族差別の原理が貫徹された。入学者と卒業者の民族別現況、日本人中心の中学校と商業学校出身者から多数合格者が輩出されたこと、卒業者の職種の現況などはこのような特徴を端的に見せてくれる。

しかしこのような構造に立脚し表出される民族別就職様相は時期ごとに少しずつ異なっていた。一九二〇年代には民族差別中心のこのような学歴主義が強固であったが、植民地朝鮮の資本主義化とともに戦時体制による商工業人力に対する需要増のなかで入営と戦死による日本人卒業者の空白によって新しい局面を迎えた。極めて一部ではあるが一九三〇年代の末から京城高商の朝鮮人卒業生たちが日本人卒業生と同様に就職先として好まれていた朝鮮銀行と殖産銀行などに就職しはじめた。日帝が望まない方向であったが戦争の悪化による不可避の結果であった。朝鮮人はこのような機会を活用し、近代エリートとして成長できる基盤を構築できた。しかしかれらが日帝下で学習し経験し体得した思考方法とノウハウが現代韓国の政治と経済にいかなる影響を及ぼしたのかはさらに研究する必要がある。朴斗乗は後日韓国の代表的な企業である斗山グループの土台を構築することに貢献したが、崔仁圭は韓国民主主義の圧殺の先頭に立った。

最後に今回の発表は分量制限によって京城高商在学生の成績を分析する点にまで及べなかったため、在生たちの成績と卒業後に採用された職場の相関関係を解明するところに至れなかった。後に別の原稿を通して検討するつもりである。

翻訳：影本剛

20世紀前期官立高等商業学校の支那科・東亜科について—その学科課程と進路動向

今井綾乃

滋賀大学経済経営研究所の客員研究員の今井綾乃です。よろしくお願いします。

はじめに

旧制官立高等商業学校、略して高商は、19世紀後期から20世紀前期にかけ設置された「植民地帝国日本の、かつそれを支えた教育機関」¹⁾です。高商を考えるとときの視点のひとつとして、阿部安成教授は個々の学校の東アジアに対する志向性を捉える必要があると指摘しています。

その志向性を検討するための前提として、この報告では高商が展開した修業年限3年の支那科や東亜科についてとりあげます。1942年11月に文部省専門教育局が編集発行した『専門学校一覧』をみると、支那科や東亜科を設けた高商は山口、彦根、大分、高岡、台北高商の5校とわかります。山口と彦根は1939年に支那科を新設し、彦根のみが1941年にそれを東亜科に改称しました。大分と高岡は1940年に東亜科を、同じ年に台北は支那科を新設しました。5校はいずれも第二次世界大戦下の同時期に、創立時から展開していた本科を第一部とし、第二部として支那科や東亜科を設けています。

高商の支那科や東亜科は、これまでに主たる研究対象とされてきませんでした。そこでわたしは阿部教授とともに、文部省所管の山口、彦根、大分、高岡高商における支那科や東亜科の概要を、4校やそれらの後継教育研究機関が編集発行した学校史からたどりましました。各学校史には、それぞれの設置経緯と開設時における教育制度が記載されています。一方で、学科課程の変遷や生徒の進路は、それらに記載されていません。台北高商に目を向けると、同校は支那科を開設する前の1929年に学校史を編集発行していました。高商やそれらの後継教育研究機関が編集発行した学校史では、支那科や東亜科の特色が学科課程の変遷や各校との比較から検討されていないのです。

¹⁾ 阿部安成・今井綾乃「研究ノート 旧制官立高等商業学校と東アジアについての素描：学科課程としての支那科と東亜科」『彦根論叢』第444号、2025年7月、2頁。

かねてより阿部教授は、高商に関する資料の残り具合が学校によって異なるため、個々の高商資料群を詳細に検討し、それらを比較し、高商の全体を考える必要があると指摘してきました。その方法をもとに、本報告では初めに、学校史に記載された教育制度をたどりながら学科課程の変遷やそれぞれを比較し、5校の支那科や東亜科が時代とともに志向した地域を検討します。学科課程は、各高商がおおよそ年に1度発行していた『学校一覽』の各年度を国立国会図書館デジタルコレクションから参照しました。学科課程だけでなく、支那科や東亜科を主導した教官や、設置された調査研究機関についてもとりあげます。台北高商をめぐっては、文部省直轄の4校の高商における支那科や東亜科と比較します。最後に、彦根高商を対象に全卒業生の進路を約50年にわたって追跡し、彼らの動向を提示します。これらの作業をとおり、5校の支那科や東亜科の教育制度を設置順に詳細にたどり、それぞれが東アジアに向けた志向性を検討したいとおもいます。なお、報告内容の詳細はディスカッションペーパーをご参照ください。

山口高商

それでは、山口高商の支那科についてみていきます。

山口高商が1940年に発行した『山口高等商業学校沿革史』、略して『沿革史』によると、同校が支那科の設置を申請してから認可されるまでに約7年かかりました。その理由は、申請をした1932年は「満洲事変」による緊縮政策下であり、文部省が新設を許可しなかったからです。「支那事変」が勃発し「現地に活躍すべき多数の商業戦士」の養成が急務になると、文部省は支那科の設置を認めました。そのため、『沿革史』からは山口高商の支那科における申請と実態の両方の教育制度を捉えることができ、他校よりも支那科の様相を詳細に検討することができます。

山口高商が支那科の設置を申請した背景のひとつに、学校の「使命」である「東亜の経営」の達成があったと考えられます。『沿革史』によると、山口高商は本科の学科課程に第二外国語として支那語を設けたり、大陸研究会を結成したりしていました。1916年には支那貿易講習科を開設し、東亜経済研究会も設置しました。山口高商は創立以来「使命」に基づき

東アジアについて学ぶ環境を整備していくなかで、支那科の設置も目指したのです。

その環境を作った教官のひとりに木村増太郎が挙げられます。『沿革史』によると、木村は京都帝国大学大学院を出たのちに台湾総督府に嘱託として勤め、山口高商が支那貿易講習科を新設するに伴い招聘されました。木村は山口高商を一時離れるものの、再び嘱託として勤め、東亜経済研究会や支那経済研究会を主導しました。木村は支那科が設置される前に山口高商から再び退きますが、その申請をひと押しする環境づくりに寄与したひとりであるといえます。

『沿革史』を読むかぎり、山口高商は申請と実態とで若干意味合いの異なる教育方針を掲げたことがわかります。申請時に掲げた教育方針は、満洲事変と「本校の使命」を鑑み、「対支商業上必要な教育を施し、支那及満蒙に活躍せんとする人材」を養成することです。その教育方針に整合した学科課程を作成しています。他方で、支那科の開設後に山口高商が掲げた教育方針は、現地に赴かずとも「支那満蒙」に関わる業務を遂行する人材養成でした。

『沿革史』に記載された開講学科目をみると、「東洋」を冠した学科目が目立ちます²⁾。山口高商は申請時に見据えた「支那満蒙」よりも広い範囲の地域について、生徒に学ばせようとしたといえます。ただし、山口高商が東アジアに目を向けながらも、なぜ学科名を支那科としたのか、また東亜科に改称しなかったのかは不明です。

山口高商の『学校一覧』をみると、1942年度に学科課程の改定が確認できます。坂野鉄也教授によると、各高商が1942年度に一斉に学科課程を改定しました³⁾。それは、高等商業学校教授要綱調査委員会が戦時体制下の教育方針として策定した「高等商業学校標準教

2) 以下、「東洋」「大東亜共栄圏」「南洋」の範囲は次の資料を参考とした。『東洋史研究文献類目』昭和17-18年度、東洋学文献センター(京都大学人文科学研究所附属)、南洋団体連合会編『大南洋年鑑』昭和17年版、南洋団体連合会、1949年、広瀬浄慧『大東亜経国誌』日本出版社、1943年、いずれも国立国会図書館デジタルコレクション参照、2025年10月24日最終閲覧。

3) 坂野鉄也「官立高等商業学校学科課程の変遷:大分高等商業学校を事例に」『滋賀大学経済学部 Working Paper Series』No.306、2021年8月、34-39頁。

授要綱編成要旨」、略して「要旨」に準拠するためです。委員会は支那科や東亜科に対し「要旨」に基づいた改定を要望しました。

山口高商は「東洋」ではなく「東亜」を冠した学科目を学科課程に設け、「要旨」に即した改定を行いました。「東亜」を冠した学科目は、山口高商が支那科や東亜科で唯一、改定により導入した「分科制」の「特殊学科目」にもみられます。この「分科制」とは、各高商が事情に応じ適当な「特殊学科目」を定める制度です。同じく「分科制」を導入した本科とは異なり、支那科は「東亜」を冠する「特殊学科目」を配しました。山口高商の支那科は、「要旨」を踏まえ「大東亜共栄圏」地域を意識するようになったといえます。

改定により外国語学科目にも「要旨」に即した変化がみられました。山口高商は前課程で支那語と英語を必修学科目として開講しましたが、改定後には第一外国語として支那語を、第二外国語として英語、さらにスペイン語及馬來語から選択できるように改めました。スペイン語は「支那事変」以後に一層高まりつつあった中南米市場への社会の関心を受け⁴⁾、馬來語は「大東亜共栄圏」地域への意識から用意されたと考えられます。

なかでも、スペイン語を外国語学科目として用意した支那科と東亜科は、山口高商のみでした。その背景には、山口高商が本科においてすでにスペイン語を開講し、担当教官が在職していたことが挙げられます。支那科は学校の教育資源と社会の需要に応じ、新たな語学を用意したとおもわれます。

ここまで、山口高商における支那科の教育制度について、『沿革史』に記載された申請と実態との比較、開設前の調査研究にかかわった教官や学科課程の変遷から検討しました。山口高商の支那科が、自らの教育資源を踏まえつつ、社会の需要に応じて重視する地域を変化させることで、「東亜の経営」という使命の達成を強化するための教育をおこなおうとしたことが明らかとなりました。

彦根高商

⁴⁾ 同上「旧制高等商業学校におけるスペイン語教育：山口高等商業学校の事例」『滋賀大学経済学部 Working Paper Series』No.148、2011年3月。

彦根高商の学科課程には、教育方針が徹底されていない一面がありました。その内容について示す前に、学校史の記述をみていきます。

彦根高商は自らの歴史を編みませんでした。そこで、後継の滋賀大学経済学部が編纂した『陵水三十五年』を読むと、支那科の教育方針や学科課程が、のちに改称される東亜科のものとして記載されていることに気づきます。他方で、その次に編まれた『陵水六十年史』、略して『六十年史』には支那科そのものの教育制度が記載されました。

『六十年史』によると、支那科の教育方針は「東亜を正確に認識し、その地に発見さるべき東洋人の新しい発展方向について、誤り無い判断力を養う」ことでした。彦根高商の支那科は、生徒の認識力と判断力の向上も重視したのです。山口高商と彦根高商は同じ支那科を設けながらも、独自の方針を掲げていたとわかります。

彦根高商において支那科の開設を推し進めた教官のひとりに、2代目校長の矢野貫城が挙げられます。矢野は1927年8月に校長として彦根高商に着任しました。支那科の開設時に校長を務めていた矢野は、「東亜の経営」という使命をもつ山口高商で生徒として学びました。1908年3月に卒業すると、彼は母校で商業地理や殖民政策を教え初めます。同僚にはさきの木村増太郎がいます。山口高商で学び、教えた矢野が校長に就いていたからこそ、彦根高商は支那科を開設した可能性があります。

『六十年史』には、支那科が開講した学科目名として「支那」「東亜」「滿蒙」のほか「ソビエト」や「南洋」を冠した複数の分野のものが列挙されています。彦根高商は東アジアのほか「ソビエト」、さらには「南洋」までもを視野に入れ、それらの地域における多分野の知識を身につけさせ、認識力と判断力を高めようとしたと考えられます。

『学校一覧』で学科課程をみると、『六十年史』で紹介された学科目に選択学科目が含まれることがわかります。さきに提示した「ソビエト」や「南洋」が付された学科目は、選択学科目でした。生徒は第3学年次の第2学期に、週4時間分の授業を選択することができました。選択科目制度を導入した支那科や東亜科は、彦根高商のみです。学科課程にみられた広域性は、支那科や東亜科で唯一彦根高商のみに導入された選択学科目制によって補完されていたといえます。

その広域性には、商業地理を専門とする教官の田中秀作の存在が影響を与えた可能性があります。田中は京都帝国大学文学部史学科を卒業し、南満洲鉄道株式会社に入社しました⁵⁾。その後、1923年に彦根高商に着任すると商業地理、商業政策、海外経済事情などを教授しました。講義のほか生徒や卒業生で組織された海外事情研究会をも指導しました。田中は、その会誌の『海外事情研究』に東アジアのほか「南洋」、東アフリカ、トルコ、ブラジルに関する研究発表をしています。また、支那科の生徒全員が入会を求められた東亜事情研究会も指導しました⁶⁾。多様な地域について研究している田中が在職していたことで、彦根高商は東アジアを中心に複数の地域を配す学科課程を策定できた可能性があります。

しかしながら、彦根高商は支那科の第1回生が第3学年となる1941年度に、東亜科への改称に伴い学科課程を改定し、選択学科目制度も廃止しました。彦根高商は選択学科目制度を実施することはなかったのです。

その新課程では、前課程に比べ「東亜」と冠する学科目が多くを占めました。彦根高商は他校と同様に翌1942年度にも学科課程を改定しますが、前年度とほぼ同様の学科目を設けています。彦根高商が他校に先行して「要旨」を踏まえ、主に「東亜」を全面に出す学科課程を実施していたとわかりました。また、「要旨」には選択学科目制度の廃止が明記されています。彦根高商が1941年度に選択学科目制度を廃止した背景のひとつに、「要旨」に即した改定があったとおもわれます。

1941年度の新課程において注目すべき点は、南洋経済事情が学科目として設けられていないにもかかわらず、第3学年の必修学科目として、その開講が計画されたことです。講義計画が記された『教授要目』1941年度版をみると、田中による南洋経済事情が学科目として掲載されていました。

その講義計画は、田中が1941年度から東亜科の第2学年第2学期に教授する東亜地理と

⁵⁾ 田中秀作教授古稀祝賀会編『地理学論文集：田中秀作教授古稀記念』柳原書店、1956年、3-4頁、柴田陽一「『満洲国』における地理学者とその活動の特徴」石川禎浩編『中国社会主義文化の研究』京都大学人文学研究所、2010年5月、299-301頁。

⁶⁾ 『彦根高等商業学校調査課要覧』彦根高等商業学校調査課、1940年3月、16頁、滋賀大学経済経営研究所デジタルアーカイブ参照、2025年8月8日最終閲覧。

同一でした。支那科や東亜科の生徒全員が、田中による南洋経済事情についての講義を受ける仕組みが整えられたのです。

『六十年史』の記述と学科課程を照合し、その変遷を他校と比較すると、彦根高商の支那科は、当初掲げた教育方針を学科課程に反映しながらも、東亜科への改称に伴う「要旨」に即した改定により、その実施に至っては不徹底な一面があったといえます。その1941年度の新課程において、彦根高商は他校に先行し「東亜」を冠する学科目を主に用意しました。

『教授要目』や『海外事情研究』をみわたすことで、商業地理を専門とし東アジアでの勤務経験をもつ田中が生徒全員に、新課程にはない南洋経済事情について教授したとわかりました。彦根高商の支那科は、生徒の意識を「大東亜共栄圏」地域のなかでも「南洋」に向けさせようとしていたことが明らかとなりました。

大分高商

次にみる大分高商の東亜科は、他の4校とは異なる特徴をもつ学科課程を展開しました。

大分高商が1942年に編集発行した『大分高等商業学校二十年史』、略して『二十年史』によると、東亜科の教育方針は「主として東亜に於て活動する人士」の養成であり、本科と同様に「商業上須要の教育を施す」ことでもありました。『二十年史』には、大分高商の東亜科が本科と同じ学科目と、「東亜」「支那」「満洲」を意識した学科目とを展開したことが強調されています。

『学校一覽』をみると、『二十年史』には指摘されていない学科課程の特徴に気づきます。それは、東アジア事情を意識した学科目と一対となる国際事情を意識した学科目が複数用意されたことです。例えば、東亜近世史と世界近世史、東亜経済事情と世界経済事情、東亜法制と国際法が挙げられます。他校の支那科や東亜科でも、それらのいずれかの学科目が開講されていますが、一対を意識した学校は大分高商に限られます。さきに示したとおり、大分高商の東亜科は「商業上須要の教育を施す」ことも教育方針として掲げていました。同じ分野における東アジア事情と国際事情の両方の知の学びを重視したといえます。これが大分高商の東亜科の特徴です。

東アジアのみを志向しない様子は、東亜科の開設後に設けられた経済研究室の業務にもみられます。研究室は既存の各調査研究業務を継承しましたが、新たに東アジアを対象とする部門をおいたり、重視したりすることはありませんでした。

1942年度の改定では「要旨」に即し、「東亜」と付く学科目が前課程より整理統合されながらも設けられました。その新課程の特徴として、第二外国語の種類が多さが挙げられます。前課程では第一外国語が支那語、第二外国語が英語でしたが、改定後には「要旨」に挙げられた外国語学科目のうち英語、仏蘭西語、露西亜語、蒙古語、和蘭語及馬來語から1つを第二外国語として選択できるようになりました。

大分高商の同窓会が1943年に発行した『開校二十周年東亜科完成記念誌（同窓会誌第36号（特輯号）』では、森文三郎校長が「北シベリヤ」や「南洋」を意識した教育の必要性を説いています。担当教官が未定の言語はありますが、大分高商の東亜科は第二外国語を用意することで、それらの地域に注目するよう生徒に示したといえます。

大分高商の同窓会が1942年に発行した『大分高等商業学校本科第二部（東亜科）開設誌』によると、森が大分高商への東亜科開設を企図し、学科課程を策定した人物でした。森は東京帝国大学法科大学経済学科を卒業し、「清・韓方面に活動すべき人材」⁷⁾の養成を目的とした長崎高商において、商業地理や経済学を担当しました。1922年に大分高商へ着任して以降は、転じることなく東亜科の新設を迎えました。同書では、大分高商が地理的にみても中国大陸に近いことから、東亜科の設置を目指したと記されています。長崎高商を経て大分高商で長く在職し、学校の特徴を知る森が、東亜科を作り発展させていったといえます。

学科課程を検討すると、大分高商の東亜科が同じ分野における東アジア事情と国際事情の両方を当初重視していたという特徴がわかりました。それは、高商である以上商業に関わる人材を養成するためであったと推察できます。同窓会の刊行物と学科課程の変遷をあわせてみると、大分高商の東亜科は「要旨」に即して「東亜」に関する学科目を主に展開すると同時に第二外国語に複数言語を設置することで、生徒の意識を東アジアとともに「北シベ

⁷⁾ 長崎高等商業学校編『長崎高等商業学校三十年史』長崎高等商業学校、1935年、国立国会図書館デジタルコレクション参照、2025年10月31日最終閲覧。

リア」や「南洋」にも向けさせようとしたと考えられます。

高岡高商

次にみる高岡高商の東亜科は、一貫した教育を展開したという特徴があります。

高岡高商は自らの歴史を編まなかったため、後継の富山大学経済学部による『富山大学経済学部五十年史』、略して『五十年史』から東亜科の教育制度をみます。

『五十年史』によると、高岡高商は学校の地理的特殊性と露西亜語を指導できる環境にあったことから、「満洲」や中国はもちろん対岸ロシヤも含めて研究対象」とし、「国家ならびに地域社会に貢献」することを教育方針に掲げました。高岡高商は創立以来、日本海沿岸に位置する高商として、本科において第二外国語のひとつに露西亜語を開講していました。『五十年史』を読むかぎり、同校は東亜科に対しても東アジアだけでなく「ロシヤ」も念頭においた教育方針を策定したのです。

その方針を東亜科が教育制度にどう反映したのかは、『五十年史』から読み取ることができません。そこで、『学校一覧』から学科課程をみると、他の支那科や東亜科とは異なる特徴に気がつきます。それは、必修学科目として満洲事情とソビエト連邦事情を、支那科や東亜科で唯一用意している点です。高岡高商の東亜科は、教育方針どおりの学科課程を策定したといえます。

満洲事情とソビエト連邦事情のうち、後者の担当教官が明らかとなっています。それは、東亜科の開設と学科課程作成に携わった高田源清です。『五十年史』によると、高田は1930年3月に高岡高商を卒業し、九州帝国大学法文学部法科へ進学後、法学者として同大助手を経て母校の高岡高商に1935年に着任しました。高田が発表した研究論文の題目をみると、1938年から「満洲」や「支那」という地域名が入っていることに気づきます⁸⁾。ソビエト連邦に関する研究論文は発表していないものの、高岡高商を卒業し、母校の教官となった高田が自身の関心を東アジアに広げながら東亜科の開設を推し進め、ソビエト連邦

⁸⁾ 「高田源清教授還暦祝賀論文集」『法政研究』第36巻第2号、九州大学法政学会、1970年12月、1-15頁を参照。

事情も担当しました。

本科と同様に、第二外国語として露西亜語を開講した点も、高岡高商の東亜科における特徴です。第二外国語に露西亜語を設定した大分高商は、その担当教官が資料から確認できません。しかし、高岡高商は『学校一覧』にその担当教官が掲載されており、露西亜語を開講したと判断できます。

1942年度の改定を経ても、高岡高商はそれまでの東亜科の教育体制を維持したと考えられます。同校は「要旨」に即し、学科目を整理しつつ満洲事情の開設を継続し、第一外国語として支那語とともに、露西亜語を設けました。また、「要旨」には開講学科目として記されていないソビエト連邦事情を、東亜経済地理又ソビエト連邦事情として残しています。高岡高商の東亜科は「要旨」に従いながら、自らが設定できる余白のなかで、それまでと同様の特徴を学科課程に維持したのです⁹⁾。

高岡高商は東アジアだけでなく、「ロシア」や「満洲」をも意識した教育を一貫して東亜科において展開しました。その教育体制を作り、維持してきた教官のひとりが、高岡高商を卒業したのちに母校に着任した高田であったとおもわれます。他校の支那科や東亜科の学科課程と比較すると、同校は1942年度の改定を経ても「要旨」から外れない範囲で教育体制を維持しました。高岡高商の東亜科は、「ロシア」や「満洲」をも含めた地域を視野に入れた教育を継続したといえます。

台北高商

次に台北高商の支那科について示すにあたり、本科に関する研究に掲載されていた支那科の学科課程を、文部省直轄の4校と比較し検討します。

台北高商は1919年に台湾総督府高等商業学校という名称で設立されました。1926年に台

⁹⁾ 小樽高商は支那科や東亜科を新設していないものの、ウラジオストクを念頭においた教育を目指し、一貫して選択外国語に露西亜語を開講したり、調査研究をおこなったりした。一方で、高岡高商の東亜科が用意したソビエト連邦事情は、学科課程をみる限りでは小樽高商の本科において学科目として設けられることはなかった。

南市に台南高商が新設されると、台北高商に改称されます。台湾島内と「南支南洋」で活躍する人材養成を目的とするなかで、「支那ニ於テ商業ニ従事セムトスル男子ニ須要ナル高等ノ教育ヲ施ス」¹⁰⁾ため、台北高商は「支那」に焦点をあわせた支那科も新設しました。1941年には東亜経済専修科も開設し、1942年には南洋科の設置も計画しています¹¹⁾。

横井香織准教授の著書によると、支那科では中国大陸の諸事情に関して重点的に教育したといえます。その著書に掲載された1940年度の本科と支那科の学科課程を比べると、指摘どおり「南方地域への進出を前提」とした本科よりも、支那科には「支那」と付く学科目が多いことがわかります。

他方で、「支那」のほかにも「南洋」「東亜」「東洋」を冠した学科目も設置されていることに気づきます。台北高商の支那科が東アジアに対し広い視野をもっていたといえます。なかでも、必修学科目として「南洋」を付した学科目を開設した支那科や東亜科は、台北高商のみです。

横井准教授によると、台北高商は自らの目的を踏まえ創立時から南進教育を展開しました。支那科は「支那ニ於テ商業ニ従事」するための教育を掲げつつも、自らの目的を達成するために必修学科目として生徒全員が「南洋」について学んだといえます。

台北高商の支那科において、地域名を冠する学科目の開講数は、文部省直轄の4校の支那科や東亜科とほぼ同数です。また、台北高商の本科は、文部省直轄の4校の学科課程とは異なると横井准教授によっていわれていますが、学科目名をみる限り支那科に関しては類似しています。学科課程の比較をとおし、台北高商の支那科が「南洋」を重視しつつも東アジアに対し広い視野をもち、文部省直轄の支那科や東亜科と同様の教育をおこなっていたとわかりました。

¹⁰⁾ 官報 1940年2月28日、国立国会図書館デジタルコレクション参照、2025年11月26日最終閲覧。

¹¹⁾ 横井香織『帝国日本のアジア認識：統治下台湾における調査と人材育成』岩田書院、2018年、129-131頁。以下、台北高商については同書を参照。

おわりにかえて：彦根高商東亜科生の進路追跡

報告の最後に進路動向について示します。支那科や東亜科の生徒の進路動向は、学校史にほとんど記載されていません。そこで彦根高商の東亜科を卒業した全生徒の約50年間にわたる動向から、おおまかな傾向を本科生と比較しながら述べたいとおもいます。この進路の追跡調査がとても時間のかかる大変な作業であり、現時点では彦根高商のみを対象としています。

彦根高商の東亜科の卒業生は第1回生から第5回生までの262人です¹²⁾。おおむね1学年50人から55人が卒業しました。

活用した資料は、彦根高商の同窓会である陵水会が1926年から1942年までは年に1度以上、また1946年からは不定期で発行している『陵水会員名簿』と、陵水会が彦根高商時に発行した会報の『陵水』です。それらから、生徒が卒業してから約50年を経た1993年までの発行時における勤務先企業名とその住所、現住所、職位の情報を収集しました。また、資料に掲載されていない、企業の業種も調査しました。ただし、資料の都合から第3回生から第5回生までの卒業後すぐの進路と、彼らの1944年から45年までの動向を捉えることができていません。

まずは、卒業後すぐの進路がわかる第1、2回生の情報をみます。彼らが就職した企業の業種は製造業が多く、次いで卸売・小売業でした。同時期に卒業した本科生の就職企業も同様の傾向にあり、ともに戦時の影響を受けていたといえます。彼らの多くが学校への採用申込みがあった企業へ就職しました。東亜科生は、教育課程の区別なく高商を卒業する者として彦根高商を介し、戦時体制下において必要とされた産業に組みこまれていったといえます。

¹²⁾ 卒業人数とその年月は、第1回生が1941年12月、第2回生が1942年9月、第3回生が1943年9月、第4回生が1944年9月、第5回生が1945年9月である。後述のとおり、1944年3月28日勅令165号（官報同月29日、4月1日施行）と1944年4月5日文部省令第18号（官報同日、同月1日適用）により高商は廃され、それらは経済専門学校として設置された。彦根高商も廃され、彦根経済専門学校として本科、東亜科を開設した。第4、5回生は彦根経済専門学校下での卒業であるが、報告では対象とする。

生徒のうち、東アジアと密接に関わる企業へ就職した者が一定数いました。企業名に東アジアの地域名が入る企業へ就職した者は第1回生が10人、第2回生が15人です。同時期に卒業した本科生よりも多い人数です。卒業後すぐの現住所が新京や奉天である者も5人いました。東亜科は本科に比べ、東アジアに関する業務を担う人材を養成していたといえます。

彼らが就職した企業には国策会社が含まれています。同時期に卒業した本科生よりも多い人数です。官立の実業専門学校にできた東亜科のひとつとして、彦根高商は東アジアを専門に学んだ生徒の一部を、国の意向のもとで植民地における開発を遂行する企業に送り出していました。

第1、2回生が年を経てどのように移動していくかをみると、東アジアと密接に関わる企業へ就職した者は、1946年以降に日本へと戻り二職、三職と転じる傾向にあったとわかります。一方で、初職で日本国内の企業に就職した者は、同一企業にとどまります。

次に、第3回生から第5回生までの進路動向をみていきます。彼らの動向は1946年以降の情報しかわかりません。1946年の勤務先をみると、東アジアと密接に関わる企業はないとおもわれ、それぞれが多様な業種の企業に勤めていると気づきます。それは、第1、2回生の卒業後すぐの様子とは明らかに異なります。年を経ても、転職を繰り返す者はほとんどいませんでした。社会に名の知れた、幅広い業種の企業に勤続していく様相は、本科生全体の傾向と類似しています。

東亜生全体をみると、年を経てから外国と交渉する部署へ移動する者やアメリカ、カナダ等で勤務につく者がいます。日本社会の国際化に伴い、貿易業務を東亜科の卒業生の多くが遂行するようになったとおもわれます。また、高等商業学校を卒業した者として、企業や組織をまとめる職位に就く者もいました。

彦根高商の東亜科生は、東アジアを中心とした「東亜」について学び、卒業時には戦時体制下の社会が必要とする場所に組み込まれていきました。彼らの一部には、植民地で国策を遂行する企業やそれらの地域と密接に関わる業務に従事した者もいます。しかしながら、東亜科の生徒が彦根高商を卒業した直後には戦時体制が終わり、おのずと職を変えなければ

ならない者がいました。

それぞれが一定の場所で勤務するようになると、高商を卒業した者として海外へ赴任したり貿易業務を担ったりし、また組織や企業を率いたりする卒業生がいました。彦根高商の東亜科の動向が、他の卒業生に共通するかを検討するには、各校がもつ教育資源や地理的条件をもとに志向した地域が異なるため、それぞれに卒業生の追跡が必要となります。

すべての高商は1944年に4月に廃され、経済専門学校が設置されました。5校の支那科と東亜科は、経済専門学校の東亜科に統一されました。文部省直轄の経済専門学校は、専門学校規程に基づき運営されたことが確認できます。東亜科の学科課程はすべて同一となり、高商時にあったそれぞれの特色は消失しました。

1946年4月には彦根、大分経済専門学校の東亜科が廃止され、高岡は経済専門学校それ自体がなくなりました。山口経済専門学校のみが東亜科を東洋経済科に改め、支那科や東亜科の系譜を継続させます。

阿部教授が示しているとおおり、その後身の山口大学経済学部では、「東亜」を冠した東亜経済研究所や山口大学東亜経済学会が現在も機能し、『東亜経済研究』や『東亜経済研究叢書』を発行しています。また、滋賀大学経済学部をみると『彦根高等商業学校図書課支那関係図書目録』といった支那科や東亜科に関する資料が残されています。それぞれに「東亜」の名称を引き継いだり、資料が残されていたりするものの、学校史では高商の支那科や東亜科が十分に記されず、評価されていません。

支那科や東亜科が規程上から消えても、それらの教育を受けた生徒は、それぞれに就職先を決め、高等商業学校を出た者として経歴を積んでいきます。高商を考えるうえで、各後継教育研究機関に今どのような資料が残されているかを調査し、それらをもとに可能な限りの期間について、個々の学校を詳細にたどり比較し、高商全体として捉えることが求められます。

【 附 記 】 本稿は、すでに発表した、今井綾乃「旧制官立高等商業学校の支那科・東亜科が目指した地域—学科課程の変遷比較と彦根高等商業学校生の進路追跡から」Discussion Paper Series J-11、滋賀大学経済経営研究所、2025年12月、に論旨をかえないまま、いくつかの変更をくわえた版である。

植民地朝鮮人女性エリートの解放以降

——女子高等師範学校留学生を中心に——

金廣珪(韓国教育課程評價院)

I. 序言

女子高等師範学校(以下「女高師」)とは近代日本政府が女性中等教員を養成する目的で設立・運営した官立高等教育機関であり、東京女子高等師範学校(以下、東京女高師)、奈良女子高等師範学校(以下、奈良女高師)の二校があった。東京女高師の歴史は一八八六年に文部省が東京師範学校を東京高等師範学校へ変更するとき、女子部を「高等師範学校女子部」と変更することからはじまる。「高等師範学校女子部」は一八九〇年「女子高等師範学校」として独立した。一九〇八年、奈良女高師が開校し、これによって既設の女高師は東京女高師へと校名を改称した。その後、東京と奈良の二つの女高師は戦後の新学制によって大学に改編され、現在にいたっている。周知のように現在日本のお茶の水女子大学、奈良女子大学がそれぞれ東京女高師、奈良女高師の後身である。

近代日本の学制上には女子大学がなかったために女高師は専門学校に該当したが、女性にとっては事実上の最高学府であり、官立としては唯一の女子高等教育機関であった。近代日本には女高師の他にも中等教員資格を取得できる私立学校が多数存在したが、当時の朝鮮人にとっては官立女高師こそ「日本で第一という学校」¹、「東洋で最もよい学校」²と認識された。また教育機会と同じくらい就業機会も、選択可能な職業も極めて制限されていた植民地朝鮮における中等教員は、高等教育を受けた者にとって最も良い職業の一つであり、女性にとってはさらにそうであった。中等以上の学校の教員を教諭と称したが、朝鮮における教諭は高等教育機関である専門学校にも任用されることがあり、「外国の次官、知事の水準」³というほど社会的地位も相当たるものであった。つまり女高師の留学生たちは植民地朝鮮の教育ピラミッドにおいて頂点に該当する学閥を持ち、女学校・女子専門学校の教諭として、⁴女性運動界、女性教育界の中枢として活動できる存在であった。

本発表文の題名は彼女たちが八・一五解放以降に韓国社会でどのような位置を占め、どのような活動を展開したのかを明らかにしようとするものだ。しかし解放以降の生を理解す

¹ 趙圻烘『芝蘭の野で——又棠趙圻烘自叙傳』誠信女子師範大學出版部、一九七九、七四頁。

² 朴宣美『女性、帝国を経て朝鮮へ回遊する』創批、二〇〇七、七三頁。

³ 「朝鮮女性がつさまざまな職業 2——教諭」『朝鮮日報』一九二六年五月一〇日付。

⁴ 以下、本文中で女学校は女子高等普通学校(以下「女高普」)、高等女学校(以下「高女」)、中等水準の未認可女子学校など、女子中等学校を通称する用語として、男学校は男子中等学校を通称する用語として使用した。

るためには、彼女たちがどのような社会・家族的背景のなかで高等教育の機会を獲得し、日本留学の過程でどのような制度的・文化的経験を蓄積し、帰国後に朝鮮でどのようにエリートとしての地位を掴んだのかを連続的に検討する必要がある。したがって本発表では植民地期に東京・奈良の二つの女高師留学生の生の軌跡を女高師入学、留学を終えて帰国した後、八・一五解放後の順で検討したい。

II. 女子高等師範学校の朝鮮人女学生たち

1. 女子高等師範学校の留学生政策

文部省は一九〇一年に帝国大学などに外国人留学生を受け入れるための「文部省直轄学校外国人特別入学規程」（一九〇一年一月一日、文部省令第一五号）を制定した。規程の主な内容は文部省直轄学校で修学しようとする外国人は外務省の在外公館や日本駐在外国公館で紹介書を受けとり入学を希望する学校に提出しなければならないこと、そのなかでも相当の学力があると認定される者に限って当該学校の長が入学を許可することができること、各学校では文部大臣の認可を受け外国人特別入学に必要な細則を置くことができること、などである。一九一一年以降から日本の植民地である朝鮮と台湾出身の留学生にもこの規程が準用されることになり、⁵それによって文部省直轄の各学校は「外国人特別入学規則細則」を制定し、留学生を受け入れはじめた。東京女高師は一九〇九年、奈良女高師は一年後の一九一〇年にそれぞれ「外国人特別入学規程細則」を制定した。以下は東京女高師の「外国人特別入学規程細則」（一九〇九年四月一五日）である。

第一条 外国人として「文部省直轄学校外国人特別入学規程」によって入学を志望する者がいるときは設備上の支障がない場合には本校各科および付属高等女学校専攻科聴講生としてこれを許可すること。

第二条 第一条によって入学を許可する人員は毎年三月末に定める。

第三条 入学志望者については試験によって相当の学力を認定した者とする。

第四条 入学志願者は入学検定料として三円を納付すること。ただ既納検定料はいかなる事由によってもこれを還付しない。

第五条 聴講生は授業料として本校の各科、付属高等女学校専攻科各部すべて一学年四〇円を毎学年四月一五日（休日であれば翌日）に納付すること。

第六条 中途退学またはその他のいかなる事情があっても既納授業料は返還しない。ただ全学年間休学を命じた場合にはこれを徴集しない。

第七条 聴講生在学中には特別に定めた本校教官の指揮監督を受けなければならないこととする。

⁵ 一九一一年四月四日。文部省令第六号。

第八条 聴講生として定められた教育課程を修了し成績加良と認定される者には修了証書を授与すること。

第九条 本校諸規則として本則に抵触しないものは聴講生に適用する。⁶

このように東京女高師の「外国人特別入学規程細則」は外国人留学生を聴講生として受容するとはいえ、学力試験を行うということ、入学検定料、授業料、在学中に学校規則と教官の指揮監督にしたがうことなどを規定している。この細則は以降三度の部分改定がなされるが、入学検定料と授業料に変動があるのみで一九四五年までそのまま維持された。

奈良女高師の「外国人特別入学規程細則」の内容は東京女高師のそれとおおよそ似ているが、外国人を聴講生として許可すると書いているのみで選抜過程に対する具体的な規定はなかった。奈良女高師の朝鮮人・台湾人留学生の選抜はおおよそ出身学校から送られた書類と総督府の紹介状に基づいて審査するやり方で行われた。⁷奈良女高師は東京女高師と異なって日本人入学生の選抜においても学科試験を行わず地方官推薦による選抜方法を一九二六年まで維持し、留学生の選抜も同様であったのだ。奈良女高師の朝鮮人留学生の入学には大阪の事業家である柳原吉兵衛という個人の推薦・斡旋が大きな影響を及ぼしているが、このような選抜ゆえに可能なことであった。

奈良女高師は一九二九年に「朝鮮人及台湾人ノ聴講生入学ニ関スル取扱方」（一九二九年一月三〇日）を制定し、「入学願書、履歴書、戸籍謄本、出身学校長が作成した学業成績および人物考正書、学校医が作成した身体検査書、総督府紹介書などの書類を調査してまず選抜し、該当選抜者にふたたび国語、英語、数学の三教科に対して簡単な試問および身体検査を行った後に入学を許可する」と、入学者選抜方法を具体的に規定した。一九三〇年にはふたたびこれを改定し、朝鮮人、台湾人聴講生選抜のための学科試験を本科生の入学者選抜試験と同時に行い、学科試験についても「国語（解釈、作文）、英語（解釈、簡易な国文英訳）、数学（算術、代数、幾何）」へと、より詳細に提示した。そして学科試験は入学志願者の便宜のために朝鮮と台湾でもそれぞれ行うよう規定した。⁸これによって一九三一年度入学生から学科試験を行うことになった。

2. 女子高等師範学校留学生の面々

女高師入学が確認される朝鮮人留学生は次の表のように東京女高師範四八人（表一）、奈

⁶ 『東京女子高等師範学校一覽:自大正14年至大正15年』東京:東京女子高等師範学校、一九二五、九二頁。

⁷ 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター編『奈良女子大学百年史』奈良女子大学、二〇一〇、一一三頁。

⁸ 同上。

良女高師五五人（表二）である。⁹

表一 東京女高師朝鮮人留学生名簿（東京女高師入学年度順、同一年度内カナタ順）

連番	名前	出身学校	専攻	入学	卒業
1	김덕성(金徳性)	進明女高普 明治女学院	家事科	1914.4.	1918.3.
2	성의경(成義敬)	淑明女高普	文科→理科	1916.4.	1920.3.
3	김종기(金宗禎)	京城女高普 師範科	理科	1918.4.	病死
4	김순영(金順英)	進明女高普 京城女高普 師範科	文科	1921.4.	1925.3.
5	박성환(朴聖瓊)	京城女高普 師範科	図画専修科	1921.4.	1924.3.
6	손정규(孫貞圭)	京城女高普 東京女高師付属第六臨時教員 養成所	家事科	1921.4.	1922.3.
7	송금선(宋今璇)	淑明女高普 柏崎高等女学校	家事科	1921.4.	1925.3.
8	임숙재(任淑宰)	淑明女高普 東京女子師範学校	家事科	1921.4.	1924.3.
9	조경희(趙慶喜)	淑明女高普 柏崎高等女学校	文科 (歴史)	1921.4.	1925.3.
10	최태선(崔泰嬋)	平壤女高普 師範科	家事科	1921.4.	1925.3.
11	박정진(朴貞珍)	京城女高普 京城高等女学校	文科	1922.4.	1926.3.
12	방순경(方順卿)	京城女高普 師範科	家事科	1923.4.	1927.3.
13	최의순(崔義順)	淑明女高普 ウ井ルミナ女学校	理科	1923.4.	1927.3.
14	이진옥(李眞玉)	平壤女高普	理科	1924.4.	1929.3.
15	김준희(金俊熙)	淑明女高普	家事科	1925.4.	中退
16	손희순(孫喜順)	進明女高普	文科	1925.4.	中退
17	윤성상(尹聖相)	淑明女高普	文科	1925.4.	中退
18	조기흥(趙圻煥)	京城女高普 京城第一高等女学校	家事科	1925.4.	1929.3.

⁹ ただ、一九四一～一九四五の東京女高師留学生は表1に提示したカンソソヒの他にも別の人物がいる可能性が高いが、資料の限界で把握できなかった。

19	김분옥(金粉玉)	京城女高普	家事科	1926.4.	1930.3.
20	윤경훈(尹京勳)	京城女高普	文科	1926.4.	1930.3.
21	윤여백(尹如柏)	京城女高普	文科	1926.4.	1931.3.
22	최기증(崔己曾)	京城女高普	文科	1926.4.	1930.3.
23	최복동(崔福同)	京城女高普	理科	1926.4.	1930.3.
24	최은경(崔恩卿)	京城第一高等女学校	家事科	1926.4.	1931.3.
25	현증순(玄曾順)	淑明女高普	保育実習科	1926.4.	1927.3.
26	김남죽(金南茁)	京城第一高等女学校	文科	1927.4.	
27	김증순(金鍾順)	同徳女高普 京城第一高等女学校	家事科	1927.4.	1931.3.
28	윤완경(尹完敬)	淑明女高普 京城第一高等女学校	家事科	1927.4.	1931.3.
29	김삼순(金三純)	京城女高普	理科	1928.4.	1933.3.
30	백정진(白貞鎭)	京城女高普	保育実習科	1928.4.	1929.3.
31	장애희(張愛希)	城右高等女学校	家事科	1928.4.	1933.3.
32	장화순(張和順)	培花女高普 淑明女高普 師範修習科	文科	1928.4.	1932.3.
33	고정애(高貞愛)	日出高等女学校	文科	1929.4.	
34	김동주(金東珠)	平壤女高普	家事科	1929.4.	1934.3.
35	이보미(李寶妣)	淑明女高普	理科	1931.4.	1936.3.
36	김지한(金志閑)	平壤女高普	理科	1933.4.	1937.3.
37	현병진(玄丙辰)	京城女高普	家事科	1933.4.	1937.3.
38	장명옥(張明郁)	平壤女高普	家事科	1934.4.	1938.3.
39	송은선(宋銀璇)	京城第一高等女学校	文科	1935.4.	1939.3.
40	옥인선(玉仁善)	平壤女高普	家事科	1935.4.	1939.3.
41	김영옥(金英玉)	京城女高普	家事科	1937.4.	
42	신춘자(辛春子)	京城女高普	理科	1937.4.	
43	윤서석(尹瑞石)	京城女高普	家事科	1939.4.	1942.9.
44	이순이(李順伊)		保育実習科	1939.4.	1940.3.
45	최혜숙(崔惠淑)	淑明女高普	文科	1940.4.	1943.9.
46	송인봉(宋仁鳳)	京城女高普	理科	1940.4.	1943.9.

47	이순길(李順吉)		保育実習科	1940.4.	
48	강성희(姜誠熙)		文科	1941.4.	1944

出所：連番1～42番、44番は「朝鮮総督府官報」と『東京女子高等師範学校一覽』、43番は太田孝子『海峡を越えて』春風社、二〇〇八、45～46番は崔惠淑『歴史の波をかきわけて』チョンジソンジ社、一九九九¹⁰、47番は日本『官報』（一九四〇年五月四日）、48番は朴宣美、前掲書、二四二頁。

備考：空欄は確認できていない箇所。

〈表二〉奈良女高師の朝鮮人留学生名簿（奈良女高師入学年度順、同一年度内カナダ順）

連番	名前	出身学校	専攻	入学	卒業
1	김무희(金武熙)	進明女高普	家事科(聴講生)	1922.4	1926.3
2	김영희(金英熙)	進明女高普	家事科	1922.4	*1924.2
3	김숙배(金淑培)	淑明女高普	家事科	1923.4	1927.3
4	김영수(金永洙)	平壤女高普	文科	1923.4	*1923.9
5	박소제(朴小娣)	淑明女高普	理科	1923.4	1927.3
6	문남식(文南植)	淑明女高普	理科	1924.4	1928.3
7	이예행(李礼行)	淑明女高普	文科	1923.4	1927.3
8	김복희(金福熙)	京城女高普	文科	1925.4	*1928.9
9	문남아(文南雅)	淑明女高普	文科	1925.4	*1926.9
10	윤덕희(尹德喜)	淑明女高普	文科	1925.4	*1928.3
11	표경조(表景祚)	京城女高普	家事科	1925.4	1929.3
12	김동옥(金東玉)	京城女高普	家事科	1926.4	1930.3
13	박정숙(朴貞淑)	平壤女高普	文科	1926.4	1930.3
14	손정순(孫貞順)	淑明女高普	文科→理科	1926.4	1930.3
15	최경진(崔景珍)	平壤女高普	文科	1926.4	1930.3
16	김성철(金聖哲)	平壤女高普	家事科→文科	1927.4	1931.3
17	김인수(金仁洙)	淑明女高普	文科	1927.4	1931.3

¹⁰ 崔惠淑の本は日本でも刊行された。崔惠淑『恨の彼方に——歴史の荒波を超えて』右文書院、一九九九。

18	송옥선(宋玉璇)	淑明女高普	家事科	1927.4	1931.3
19	김낙신(金樂信)	進明女高普	家事科 (選科)	1928.4	1932.3
20	정관숙(鄭寬淑)	進明女高普	家事科 (選科)	1928.4	1932.3
21	한순길(韓順吉)	京城女高普	文科	1928.4	1932.3
22	허하백(許可伯)	淑明女高普	理科	1928.4	1933.3
23	김 선(金 善)	正義女高普	理科	1929.4	1933.3
24	박봉호(朴奉浩)	平壤崇義女學校高等科 広島女學校高等科	文科	1929.4	1933.3
25	오정아(吳正雅)	淑明女高普	文科	1929.4	1933.3
26	최귀란(崔貴蘭)	大邱女高普	家事科	1929.4	1933.3
27	김염숙(金廉淑)	平壤女高普	家事科	1930.4	1934.3
28	변 주(卞 珠)	東京 堀越高等女學校	家事科	1930.4	1934.3
29	서경남(徐敬男)	淑明女高普	文科	1930.4	1934.3
30	주월경(朱月瓊)	大邱女高普	家事科	1930.4	1934.3
31	김복분(金福分)	大邱女高普	理科	1931.4	1936.3
32	박용경(朴容卿)	進明女高普	家事科	1931.4	1935.3
33	유기주(柳奇珠)	進明女高普	文科	1931.4	1935.3
34	임옥인(林玉仁)	永生女高普	文科	1931.4	1935.3
35	임영길(林英吉)	淑明女高普	文科	1932.4	1936.3
36	최문희(崔文姬)	好壽敦女高普	家事科	1932.4	1936.3
37	김혜영(金惠英)	日新女高普	文科	1933.4	1937.3
38	마귀선(馬貴善)	好壽敦女高普	家事科	1933.4	1937.3
39	최경주(崔景珠)	大邱女高普	家事科	1933.4	1937.3
40	김복녀(金福女)	平壤女高普	家事科	1934.4	1938.3
41	김영주(金榮主)	大邱女高普	理科	1934.4	1939.3
42	김주원(金周媛)	淑明女高普	文科	1935.4	1939.3
43	최성률(崔成律)	龍谷高等女學校	文科	1935.4	1939.3
44	김정순(金貞順)	淑明女高普	家事科	1936.4	1940.3
45	최선경(崔仙卿)	大邱女高普	家事科	1936.4	1940.3
46	홍임식(洪任植)	京城女高普	理科	1936.4	1940.3

47	홍경희(洪慶姬)	大邱女高普	文科	1937.4	1941.3
48	정재인(鄭在仁)	京城女高普	文科	1938.4	1941.12
49	최신덕(崔信德)	平壤 崇義女高普 梨花女高普	家事科	1938.4	*1938.10
50	강신주(姜信珠)	大邱女高普	家事科	1939.4	1942.9
51	박영자(朴英子)	西門高等女学校 (旧 平壤女高普)	文科	1939.4	1942.9
52	윤혜원(尹惠媛)	京畿高等女学校 (旧 京城女高普)	文科	1941.4	1944.9
53	동효미(東曉美)	淑明女高普	文科	1942.4	*1945.3
54	진본절자(津本節子)	淑明女高普	家事科	1942.4	*1946.3
55	김연옥(金蓮玉)	京城高女	文科	1943.4	*1946.3

出所: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター編 前掲書, p.179 <表15>を再構成。

備考: 卒業年月の*表示は中途退学の年月。

まず留学生の出身学校を見ると、東京女高師の場合、公立女高普である京城・平壤女高普出身が最も多く、奈良女高師も入学試験制度を実施する前である一九三〇年までの入学生三〇人のうち二八人が公立女高普と私立の淑明・進明女高普出身であった。つまり朝鮮人が日本の官立学校である女高師に入学するのは公立女高普の卒業生か、私立学校は旧皇室関連の淑明・進明女高普出身でなければ難しかったと考えられる。一例として一九三八年に奈良高女師入学生の崔信徳は私立学校である培花女高普の四年生の夏休み、学校から「開校以来受験者がいなかった培花学校の名誉のために奈良高女師の受験を準備するのはどうか」と勧められて試験を準備し、日本語、英語、数学科目の担当教諭たちが特別指導を行い、合格すると「開校以来初めてだと学校がわきたった」¹¹と言う。

林玉仁は「どの学校の卒業生であれ最優等生でなければ受験さえできず、日本各地のいわゆる秀才少女たちを集める学校と称されていたほど合格は「天の星を掴む」ことほど難しかった」¹²と回顧しており、これは誇張ではなかった。〈表二〉奈良高女師の留学生五五人のうち、一八人が女高普を優等で卒業した。¹³先の事例の主人公である崔信徳は崇義女学校に通っていた三年の二学期に培花女高普に編入し、最初の学期から「一〇〇点満点の科目が数えきれない」ほど成績がよく、「先生や学生のあいだで「秀才」「八方美人」などと呼ばれまで」¹⁴した優等生であった。一九二一年の東京女高師入学生である趙慶喜は淑明女高普の頃、「ク

¹¹ 崔信徳『その恩寵のなかのわが人生』考える百姓、二〇〇九、六二頁。

¹² 林玉仁『わたしの履歴書』正宇社、一九八五、五四頁。

¹³ 五五人の女高普卒業式を報道した新聞記事を通して確認した数値である。

¹⁴ 崔信徳、前掲書、五八～五九頁。

ラスでいつも一、二等になる秀才]、「とても鋭利な頭脳を持つ恐ろしい才能]、「天才、神童と呼ばれる」ほど名が知られていた。¹⁵極めて定員が限られているため学校のあいだの競争意識もあったようだ。京城女高普出身である玄丙辰は、東京女高師と東京女子医学専門学校の両方に合格し、後者のほうに心が傾いたが、「三年間、京畿から一人も進学できなかったのもので、せっかく合格した君が放棄して医学専門に行けば母校としては高等師範に行く代が途切れてしまうじゃないかという先生の懇切な説論と叱咤が並大抵ではなく……ぐっと涙をこらえて母校の名誉のためだと」¹⁶東京女高師に進学した。淑明女高普出身の崔惠淑の場合、当時の淑明女高普の校長が「東京女高師に進学した卒業生が入学してから一年後に結婚問題で退学することになり、現在淑明女高のイメージが悪くなったので名誉回復のために今年文科に一人送りたいと言っている、わたしがぴったりの候補者」¹⁷だと父を説得したという。

女高師留学生はおおよそ豊かな家の出身であった。実例として、〈表一〉の東京女高師留学生のなかの金徳性の父は自身の弟と金徳性をともに東京留学に送り出し、金徳性の下の六人のきょうだいたちも幼稚園、在朝鮮日本人小学校と中学校に送るなど、十分な教育を受けさせていた。¹⁸金順英の父は釜山の巨富として三南の王と呼ばれるほどの船舶会社の社長であった。金順英は東京女高師卒業後、ソウルで女高普の教諭生活をしていた一九二九年ごろ、東京女高師入学同期の宋今璇と米国留学に行くことを約束し、費用を準備するために、本家に家を借りたいから二〇〇〇円を送ってくれと嘘をついた。そうすると本家からは「未婚の女子が他人から借家だとだとしても借りるとするのは羞恥であるからいっそのこと家を一軒買いなさい」と四〇〇〇円を送ってもらったという。¹⁹当時の教諭の月給が七〇円程度であったことから見ると、その財力を想像できるだろう。孫貞圭は「相当な家で育った」²⁰といい、宋今璇も「必要なときに経済的な不足を感じたことはなく、いつも相当な貯蓄のある」²¹豊かな家で育った。趙慶喜は「京城楽園洞の名家」²²出身であり、朴貞珍は中枢院参議の朴齋獻の娘であった。趙圻烘の父は大韓帝国期に官職にあり、植民地化後に落郷した

¹⁵ 『東亜日報』一九八一年一月一七日付；「一時の話題だった女性たちの後日談」『女性』一九三七年七月。

¹⁶ 玄丙辰『乾いた丘に花畑を』培英社、一九八一、二〇頁。引用文の「京畿」は京城女高普を指す。

¹⁷ 崔惠淑、前掲書、三五頁。〈表一〉で一九四〇年に崔惠淑が入学する以前、淑明女高普出身は一九三一年の三五番崔寶妣の入学が最後である。

¹⁸ 『毎日申報』一九一六年七月一六日付。

¹⁹ 金順英『一つの光にしたがって：金順英自叙伝』益文社、一九七六、六三頁。

²⁰ 「京城各女学校の評判のよい女先生たち」『別館坤』二、一九二六年一二月。

²¹ 南海宋今璇博士回顧録編纂委員会『去華就實：南海宋今璇博士回顧録』徳成女子大学出版部、一九七八、一九七頁。

²² 『京城日報』一九二五年三月一五日付。

が、ソウルにも家を置いて本妻（趙圻烘の母）と三人の息子、趙圻烘もソウルで勉強させた。家を二つ維持できる十分な経済力があったのだ。玄曾順は京城女高普教諭、朝鮮総督府視学官を経て高等官である参与官を歴任し中樞院参議に任命された玄樞の娘であった。金三純の父は「数千石の富農」であり、²³金東珠の父は平安南道江西郡城巖面で「面内有数の大地主」であり、²⁴尹端石は銀行員の父の一人娘であり、崔惠淑の父は地主であるとともに工場を経営する事業家であった。²⁵〈表二〉の奈良女高師留学生のうち金英熙と金武熙は姉妹であり、中樞院参議金濟明の娘であった。李礼行と朴容卿は父が私立学校を運営した。朴玉仁の父は重なる事業失敗によって豊かな経済力はなかったが、朴玉仁の学校での勉強を支持し、学費を調達するために苦勞してくれた。朴玉仁が進学を前に専攻を相談すると、兄は家政科を勧めたが父は「女は一生家事に埋もれて暮らすことになるのだから、なぜ今からそれに苦しめられるのか」と文科に行けと勧めたという。²⁶崔信徳の父は平安北道厚昌で大成功した事業家であった。

植民地朝鮮において女性が中等学校を卒業し女高師に入学するまでの過程には、その費用を負担できる実家の経済力が前提とされていた。もちろんこれは男性にも同じく適用されるものだ。初等教育すら無償・義務教育ではなかった朝鮮において中等学校は男性にとっても狭き門であった。しかし男性中心的な性差別主義が厳然たる社会において限定された教育機会は家の息子に優先的に与えることがほとんどであったため、相対的に女性にとってはより狭き門になるしかなかった。したがって女学校の卒業生たちは娘も息子と同じ水準で勉強させることのできる、相当たる財力を持った中上流層出身であると見なすことができる。もちろん全ての富裕な家が娘たちを中等以上の教育を受けさせたり日本留学をさせたりしたわけではなかった。次は一九三九年に東京女高師に入学した尹端石の言葉である。

（「京畿を出て女高師に入ったということは、先生は top 学生だったんですね」という質問に対する回答）いや、わたしは一五〇人のなかの一等ではありませんでした。クラスで二等くらいだったと思いますが……一等を取ったことはありません。ほとんど二等。（「一等だからのはどの学校に入られたんですか？」という質問に対する回答）どこにも入りませんでした。貞淑な家庭婦人になりました。そのときは勉強がよくできるからといって留学に行くわけではありませんでした。勉強ができなければもちろん留学できませんが、勉強がよくできるからといって留学に行かなければならないわけでも

²³ 「元老との対談——わが国の女性農業博士一号金三純博士」『科学と技術』二六 - 五、一九九三、八〇頁。

²⁴ 「わたしの履歴書——元老科学技術者が歩んできた一生「金東一博士」一、『科学と技術』二九 - 五、一九九六、二八頁。金東一は金東珠の兄である。

²⁵ 崔惠淑、前掲書、三五頁。

²⁶ 朴玉仁、前掲書、一九～二〇頁。

ありませんでした。ほとんどは女学校を卒業すれば一年以内に結婚したんですよ。²⁷

当時、朝鮮人女性の結婚年齢はおおよそ一五～一九歳、その次が二〇～二四歳であり、²⁸ おおよそ女高普を卒業すれば一七～一八歳前後のいわゆる結婚適齢期を「過ぎた女性」となる。つまり女高普卒業後、高等教育機関に進学しようとするればまず結婚という壁を越えなければならなかった。「勉強がよくできるからといって留学に行くわけでは」なかった時代、家の財力の他になにが彼女たちの日本留学を可能にしたのか？ 一つ特徴的なのは女高師留学生のほとんどは娘をとて愛し、息子と娘を差別しない「開明」した父がいたという事実だ。父の存在を強調するのは、母は家の経済権と意思決定権を同時に掌握した家父長になることが難しかったからだ。ここで父の「意志」は娘が望むことはなんであれ聞いてやろうという単純な「父情」でもありうるし、もともとの男性中心的な性別分業意識から不十分であれ抜け出た、女性の教育と社会活動を認める「開明」した信念でもありうる。要するに女高師の朝鮮人留学生はほとんどが「豊かで開明した家父長から大切にされた愛娘」であった。

Ⅲ 女子高等師範学校留学生の帰国後の生——「結婚または職業」あるいは「結婚と職業」

ほとんどの女高師留学生は規定の教育期間を終えて卒業した。〈表一〉、〈表二〉の女高師留学生の卒業率は八〇%以上である。中途退学の事由としては疾病、憂患、経済的困難、結婚や妊娠などを考えてみることができるが、ほとんどが豊かな家の出身であるうえに奨学金を受けとる場合²⁹もあったために経済的理由で中途退学する可能性は低いと見てもよい。既婚者は入学が禁止されていたために在学中に結婚したり疾病で勉学ができなくなれば自主退学をしたり退学処分が下されたりした。

留学生たちが手にした卒業証書と中等教員資格証は難しい学業と日本の衣食住の生活文化に適応しなければならぬ苦しみを耐え抜き、自由恋愛や家からの強要の結婚を先送りした結果物であった。留学生たちはその結果物を持ってなにをしたのであろうか。東京女高師範の留学生は〈表一〉の卒業生四八人のうち二七人（〈表三〉）に、奈良女高師留学生は卒

²⁷ 太田孝子、前掲書、一一七～一一八頁。

²⁸ 「昭和6年の結婚、離婚及配偶数」『朝鮮總督府調査月報』1932-7；『東亞日報』1935.9.10；『朝鮮總督府統計年報』一九三八年度版。

²⁹ 一九一〇年代の公立女高普の卒業生は朝鮮總督府の官費留学生になることができた。一九二二年四月一日「在内地給費生規程」（朝鮮總督府令第四四号）の公布・施行により官費生を官公立学校卒業生に制限する規定が廃止された。〈表一〉で一九二二年四月に入学した朴貞珍が「朝鮮總督府留学生規程」による最後の官費留学生であった。淑明、崇義、永生女高普など私立学校では将来の教員を養成するという趣旨で卒業生のなかで奨学生を選抜し日本留学をさせ、卒業後に母校で教鞭を執らせる制度を運営した。奈良女高師留学生のうち朴容卿は柳原吉兵衛が設立した李王家御慶事記念会奨学金を受けとった。

業生四六人のうち三八人（〈表四〉）に、卒業後から解放以前までの社会活動経歴が確認できる。

〈表三〉東京女高師朝鮮人留学生の卒業後から八・一五解放までの社会活動経歴（〈表一〉の連番順）

名前	卒業後から八・一五までの主要社会活動経歴
金徳性	京城女高普 教諭(1919~1920)
成義敬	淑明女高普 教諭(1920~1928), 朝鮮女子青年会発起人(1921), 淑明女子専門 創立委員(1937)
金順英	貞信女学校 教諭(1925~1926), 同徳女高普 教諭(1926~1929), 好壽女高普 教諭(1929~1933)
朴聖煥	同徳女高普 教諭(1924~1935)
孫貞圭	京城女高普 教諭(1922~1941) *親日反民族行為者・親日人名辞典 登載者
宋今璇	淑明女高普 教諭(1925~1926), 晋州 一新女高普 教諭(1926~1929), 同徳女高普 教諭(1930~1933), 梨花女子専門 教授(1934~1940), 徳成女子実業学校 校長(1940~) *親日反民族行為者・親日人名辞典 登載者
任淑宰	淑明女高普 教諭(1923~1926), 大邱女高普 教諭(1926~1937), 淑明女子専門 教授(1939~) *親日反民族行為者・親日人名辞典 登載者
趙慶喜	淑明女高普 教諭(1925~1927) 東京女高師 研究科入学(1928), 東京文科大学(1929~1932) 日本 実践女学校 教諭(1933)
崔泰暉	平壤女高普 教諭(1925~1930), 光州女高普 教諭(1933~1935)
方順卿	釜山女高普 教諭(1928~1944), 進明女高普 教諭(1944~)
崔義順	東亞日報 記者(1928~1933)
尹聖相	朝鮮日報 記者(1928~), 中央日報 記者(1933)
趙圻烘	光州女高普 教諭(1929), 進明女学校 教諭(1930~1940), 誠信家庭女学校 教諭(1940~) *親日反民族行為者・親日人名辞典 登載者
金粉玉	京城師範・京城女子師範 教諭(1935~1939), 淑明女高普 教諭(1941~1945)
崔恩卿	海州女高普 教諭(1932~1939)
玄曾順	淑明女高普 普通科 教員
金鍾順	元山 樓氏女高普 教諭, 同徳女高普 教諭
金三純	進明女高普 教諭, 京城女高普 教諭(1935~1938), 北海道帝国大学(1941~1943)
白貞鎮	京城保育学校 教諭(1929~1934)
張和順	海州女高普 教諭(1933~1934), 京城師範 教諭(1936~1940)
金東珠	梨花女専 教諭(1937~1940)
金志閑	平壤 西門高等女学校 (旧平壤女高普) 教諭(1938)

玄丙辰	大田女高普, 京城女高普, 進明女高普 教諭
張明郁	女高普 教諭(1938~1940)
尹瑞石	京畿高等女学校 (旧京城女高普) 教諭(1942~1944)
崔惠淑	淑明女高普 教諭(1943~)
姜誠姬	放送人

備考: 女高普は一九三八年高等女学校 (以下高女) に改称され、公立女高普の場合、京城女高普は京畿高女に、平壤女高普は西門高女になるなど、校名も変更された。

「親日反民族行為者」は親日反民族行為真相究明委員会『親日反民族行為真相究明報告書』二〇〇一に収録された者を指す。³⁰

親日人名辞典登載者は、民族問題研究所『親日人名辞典』二〇〇九に搭載された者を指す。³¹

〈表四〉奈良女高師朝鮮人留学生の卒業後職場生活経歴 (〈表二〉連番順)

名前	卒業後から八・一五解放までの主要な社会活動経歴
金淑培	淑明女高普 教諭(1927~1928), 貞信女学校 教諭
文南植	光州女高普 教諭(1928~1929), 一新女学校 教諭(1931~1935), 進明女高普 教諭(1935~)
李礼行	好壽教女高普 教諭(1927~1928), 貞信女学校 教諭(1931), 沙里院高等女学校 教諭(1932~1933), 朝陽農事學院 教員(1933~1935)
表景祚	大邱女高普 教諭(1929~1930), 梨花女高普 教諭(1931~)
金東玉	貞信女学校 教諭(1930~1932), 權花女学校 教諭(1933~)
朴貞淑	京城實踐女学校 教諭(1930), 日新女学校 教諭(1932)
孫貞順	淑明女高普 教諭(1930~1931), 同徳女高普 教諭(1932~)
崔貞珍	培花女高普 教諭(1931~1932)
金聖哲	培花女高普 教諭(1932~1933), 光州 須皮亞女学校 教諭
金仁洙	京城女子事業学校 教諭(1931), 淑明女高普 教諭(1931~1933)
宋玉璇	京城女子事業学校 教諭, 梨花女高普 教諭

³⁰ 二〇〇五年五月三十一日「日帝強占下親日反民族行為真相究明に関する特別法」(二〇〇四年三月二二日公布) および同施行令 (二〇〇四年一〇月二九日公布、大統領令第一八五七一号) に依拠し親日反民族行為真相究明委員会が設立された。委員会は「親日反民族行為」を日本帝国主義の国権侵奪がはじまった日露戦争開始時から一九四五年八月一五日までに行われた二〇種類の範疇の行為として規定し、親日反民族行為対象者を選定・調査する一方で関連資料を収集した。二〇〇九年一月『親日反民族行為真相究明報告書』を刊行し、一〇〇六人の親日反民族行為者を公表した後に解体された。

³¹ 『親日人名辞典』には親日反民族行為と附日協力行為をした人物のうち親日人名辞典編纂委員会で選定した四三八九人が収録されている。

金樂信	日本 育英高等女学校 教諭(1932), 貞信女学校 教諭(1933), 春川高等女学校 教諭(1934), 咸南高女 (旧咸興女高普) 教諭(1938~)
鄭寛淑	日新女学校 教諭(1932~1933)
韓順吉	正義女学校 教諭(1932)
許河伯	培花女高普 教諭(1935~1940), 淑明女高普 教諭(1941~1945)
金善	正進女学校 教諭, 龍谷高女 教諭(1937)
朴奉浩	崇義女学校 教諭
吳正雅	好壽教女高普 教諭(1933~1935)
崔貴蘭	大邱女高普 教諭(1933~1935)
金廉淑	永生女高普 教諭(1935), 咸興女高普 教諭(1936~1937), 平壤女高普 教諭(1938~)
卞珠	日新女学校 教諭(1935)
徐敬男	樓氏女高普 教諭(1935~1936), 淑明女高普 教諭(1937~)
朱月瓊	大邱女高普 教諭(194~1937), 京畿高女 教諭(1938~)
金福分	大邱 曉星国民学校(1941)
朴容卿	春川高等女学校 教諭(1935), 進明女高普 教諭(1936~)
林玉仁	永生女高普 教諭(1935~1942), 樓氏女高普 教諭(1942~)
林英吉	樓氏女高普 教諭, 淑明女高普 教諭(1936~)
崔文姬	好壽教女高普 教諭(1936~)
金惠英	京城師範学校 訓導(1938~1939)
馬貴善	羅南女高普 教諭(1937~1938)
崔景珠	大邱女高普 教諭(1938~1940)
金福女	東羅南高女 (旧羅南女高普) 教諭(1938)
金周媛	誠信家政女学校(1941)
崔成律	平壤西門高女 (旧平壤女高普) 教諭(1940)
金貞順	淑明女高普 教諭(1941)
崔仙卿	全北高女 (旧全州女高普) 教諭(1940)
洪妊植	京城帝大 理学部 助手
洪慶姬	慶北高女 (旧大邱女高普) 教諭

出処 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター編、前掲書、p51 <表 5 朝鮮留學生の戦前赴任先>を基本とし、『奈良女子高等師範学校一覽』、新聞と雑誌記事、出身学校で発行した学校史、個人回顧録などによって補強した。

備考 年度表記がないものは時期を特定できない場合である。

〈表三〉、〈表四〉から分かるように、女高師留學生のほとんどは女学校教諭として就職した。〈表三〉、〈表四〉で中等教員ではない職業は新聞記者（崔義順、尹聖相）、京城帝大助手

(洪妊植)のみだ。女高師がもともと女性中等教員を養成する目的型学校でもあり、官費や校費留学生は服務義務があった。また当時女学校の教諭は専攻が医薬系列ではない限り、高等教育を受けた女性が選択できる最も良い職業であった。一九三一年、東京女高師家事科を卒業し、同徳女高普の教諭として勤続した金鍾順は朝鮮女性たちが「専門だというのが、卒業すればさらに向上しようという考えもなくただ教鞭生活だけを要求する。それは教職を最も高尚で適切なものだと考えるからであり、第二は女性の活動機関が少ないからである。それゆえ常に教師の席だけが満席となり、結局は遊ぶんだ、やってやれないと言って自称高等ルンペンだと叫んで歩いている」³²と批判したが、金鍾順みずからも認めているように教職以外には高学歴女性がまともに就職できる場所もなかった。教職も、男子校は女性教諭を任用せず、女学校は数自体が少なかつたのみならず、日本人女性とも枠を競争しなければならなかつたために、選択肢は制限されていた。

勤続期間が短い場合はおおよそ結婚や妊娠、出産を契機に辞職した場合である可能性が高い。彼女たちはほとんど自分と似た学歴と社会経済的地位を持つ男性と結婚した。専門学校以上の高等教育を受けた、近代的職業をもった男性と結婚するなかで学校を辞め、家庭婦人になる傾向は二校の女高師の留学生に共通して現れる姿である。性別分業意識が確固たる社会において既婚女性が職場生活を持続することは大変なことである。配偶者が職場で仕事を続けることに同意することは家事分担を意味することでは全くなく、いわば良妻賢母の役割も職業を持たない家庭婦人と同じように要求されたからだ。

他方で、一部の留学生は女性を家庭に限定する性別分業を積極的に受け入れた。次の引用は一九三一年に奈良女高師を卒業し、母校である淑明女高普で教諭をし、二年後に結婚を契機に辞職した金仁洙の「家庭生活の分業」という題名の寄稿である。

ここでもまた注意すべきことがあるのだが、いつでも男女は別だということを認識し、わたしはそのなかでも女だということを正当に自認しなければならない。これは決して男は優れていて女は劣っているということではなく、それぞれの存在が異なり、天性や天職が異なるのであるから、徹底してそれぞれの個性を発揮させるためであり、女でなくしては到底不可能だという美点を完全に発揮するならば、そのときはそれまでのような男の拘束や、酷い場合の虐待のようなものは自然に消滅し、円満に解決し、助け合い尊敬し合う美しい楽園が成立するであろう。……夫の職業や性格や好みなどをよく理解し、また夫がいつも自分になにを要求しているのかを心理的に納得し、無言のうちその全ての点を十分にやってやる時、かれは思いのかぎり力のかぎり社会事業に数人分の能力を発揮することができるであろうし、そのときには必ず男女合同の美しい事業と生産があるであろう。どうしてよりによってわたし自身が路上に出て叫び社会を云々しなければならぬ必要があるのだろうか。これがいわゆる隠れて芽生える女の美術とでも言えようか、内助の功と言えようか、たとえ言葉は時代によって異

32 『東亜日報』一九三五年七月二七日付。

なるとはいえどもこのような見地に立つといえ、いつも同じ満足と立派な結果を結び、みずからが社会貢献になるだろうことを信じるのである。³³

「男女は別」と女性の「夫への内助」を強調し、このような役割を「ためらわずにうまくやろうとすれば」女性も教育を受けなければならず、教養をしっかりと積まなければならないという主張だ。経済力を持った専門職男性を配偶者にした高学力の家庭婦人が持つであろう性別分業意識の典型であると言えるだろう。

結婚と出産後も職場での仕事を続けたのが確認できる事例は東京女高師留学生のなかには七人、奈良女高師留学生のなかには八人だけであった。次の引用はその一人である表景祚の教諭生活三年目、まだ未婚であった時期に「結婚と女の職業」という関係を問う記者の質問に対する答えである。³⁴

わたしは職業と結婚がそれほど密接に関係するとは思いません。……結婚を生活問題の解決として考える人がいるならば、それは大きな誤解です。……いくら相手側に莫大な財産があるといえども女性自身の経済的保障がなければならず、また自分の職業は必ずしも経済問題だけではなく社会的になにかの役に立つだとか、その職業で自分が向上する道があるだとかであれば、結婚によってこれを中止するならば、問題はさらに大きくなるでしょう。……じっさい朝鮮女性たちは未婚時代にはさまざまな抱負も大きく、成功をしようと努力しますが、家庭に入れば全て埋葬してしまうのがとても遺憾です。聞いたところによると先進国の女たちは未婚時代の活動はそれほど刮目すべきところはありませんが結婚した後になって彼女たちの社会的活動も本舞台に入るといいます。もちろん彼女たちの過程組織だとか生活様式だとかが簡便で時間の余裕があり、周囲の理解があることも事実ですが、わたしたちはその女性たちの根本思想に学ぶべき点があるのではないかと思います。³⁵

表景祚の回答はいわゆる「勉強した女性」——高学歴エリート女性が持っている公的責任感と私的欲望、この二つをとともに見せてくれる。前者が結婚の有無と関係なく女性も家の外で公的役割ができるということ、女性も職場に通えるということを見せなければならないという、学んだ女性としての社会的責任感と言えるならば、後者は職場に通うことを通して経済力を持ち自己発展を試みようとする個人的な成功欲と、経済問題つまり生活問題の解決という私情を含む。両者は本来前後関係や因果関係にあるのではないために結婚生活と

³³ 『東亜日報』一九三五年七月一九日付。

³⁴ この回答から二年後、表景祚は当時としては遅い年齢である二七歳で京城帝大出身の弁護士裴廷鉉と結婚し教諭生活を続けながら五人の子どもを育てた。裴廷鉉は八・一五解放後、最高裁判事、大韓弁護士協会会長を歴任した。

³⁵ 『毎日申報』一九三一年九月二九日。

職業生活を並行する理由が両者のうちどちらなのかがはっきりさせることは難しい。より重要なのは彼女たちの生が持つ社会的・歴史的意味であろう。このような点で「結婚または職業」ではなく「結婚と職業」生活を続けていった彼女たちの生が、性別分業意識に亀裂を生じさせることに寄与できたと評価しても過言ではないであろう。

IV 女子高等師範学校留学生の八・一五解放以降——八・一五解放が切り開いた機会と限界

八・一五解放は、現職教諭として解放を迎えた者たち、一九四〇年代に女高師に入学または卒業し、まだ社会的経歴を積む時間がなかった者たち、結婚・出産後に家庭婦人として生きていった者たち全てにとって生の転機となった。女高師留学生のうち解放後の韓国で社会活動経歴が確認できる者は東京女高師留学生は一六人（〈表五〉）、奈良女高師留学生は二人（〈表六〉）である。

〈表五〉東京女高師朝鮮人留学生の解放後の社会活動経歴（〈表一〉の連番順）

名前	解放後の主要な社会活動経歴
成義敬	淑明学院 理事長(1960~1962)
金順英	大韓女學士協會 幹部, 大韓赤十字社 婦女諮問委員會 委員長(1960~1972)
孫貞圭	京城女子師範学校 校長, 朝鮮教育審議會 委員(1945~1946) ソウル師範大 家政科 教授(1947~) 朝鮮戦争中 拉北
宋今璇	徳成女中 校長(1945) 徳成女大 設立(1950), 徳成学院 理事長, 徳成女高 校長, 徳成女子大学長など歴任 世界女性団体協議会に韓国代表として参加(1971) 立派な母賞, 大韓民国国民勲章 冬柏章(1974)
任淑宰	淑明女大 初代 総長(1946~1958)
方順卿	中等学校長(首都女中高, ソウル女中高, 舞鶴女中高など) 大韓体育会役員 歴任
趙圻烘	中等学校長(誠信女中, 昌徳女中, 京畿女中高) 誠信学院 理事長(1961), 誠信女子師範大学学長, 誠信女子大総長など歴任 「女子問題研究会」発起人 大韓家庭学会会長 大韓民国 国民勲章 冬柏章(1972)
金粉玉	ソウル大 家政学科 教授
金鍾順	同徳女中高等学校長(1961~1964)
金三純	ソウル師範大 教授(1946~1948), ソウル女子大 教授(1966~1978) 韓国菌学会 設立(1972)
張和順	「女性問題研究会」発起人
玄丙辰	文教部 奨学

	中等学校長(ソウル女中高, 昌徳女中高, 京畿女高など) 歴任
張明郁	ソウル大 家政学科 教授
玉仁善	ソウル教大 教授
尹瑞石	中央大 家政学科 教授 ソウル市 教育委員(1978~1982), 大韓家政学会長
崔惠淑	淑明女高 教師(1953~1960) 檀國大, 弘益大 教授(1960~1978), 弘益大 付属 初等学校長(1978~1982)

〈表六〉奈良女高師朝鮮人留学生の解放後の社会活動経歴 (〈表二〉連番順)

名前	解放後の社会活動経歴
金淑培	淑明女子専門 教授, 朝鮮大 教授
文南植	淑明女中高 校長(1947~1961) 中央教育委員会 委員(1954)
李礼行	社会部 婦女局 保護課長(1948.12~1949.4.) 大韓婦人会 総本部 副会長(1949.2~1952) ソウル市 教育委員(1956~1958) 全国女性団体総協議会 副会長(1957) 女性問題研究院 総務(1958) 徳成女大 講師(1956~1960) 淑明女子中高等学校 専任講師(1958~1960) 保険社会部 婦女局長(1960.5~1961.9.) 淑明女子高等学校校長(1961.10~1974)
表景祚	ソウル大 講師, 淑明女大 講師 大韓家政学会 会長(1953-1958) 文教部 教科用図書 編纂委員(1953~) 淑明女大 教授(1960.5~), 淑明女大 家政学部 初代学部長, アジア女性問題研究所長 歴任 中高等学校 家政教科書 多数執筆
孫貞順	文教部 教授要目制定審議会 議員 奨学官, 中等学校長(ソウル師範大付属中, 昌徳女中, 京畿女高, 同徳女中高など) ソウル市 女校長会 会長(1971)
宋玉璇	徳成女大 教授
金樂信	文教部 編集官, 永登浦女高 校長 大韓家政学会長(13代)
許河伯	明星女子中学校長 (1946~), 国学大学 教授 建国婦女同盟 執行委員, 朝鮮婦女総同盟 副委員長
朴奉浩	再建 崇義女学校(崇義女中) 初代校長(1950)
卞珠	東亜大 教授(1977)
徐敬男	淑明女中高 教師(1947)

朱月瓊	京畿女高 教師(1947) 淑明女大 教授, ソウル大師範学部 講師, 暁星女大 教授, 梨花女大 講師など(1946~1956) 文教部 編集官(1956~1960) 中等学校長(永登浦女高, 京畿女高, 修道女高) (1961~1974) 文教部 教育政策委員会 委員(1972) 1982年 3月 米国 Union 大学 教育哲学および教育行政名誉博士学位 1982年 9月 私設 家政科教育研究所 設立 所長就任 中等学校 家政教科書 多数執筆
金福分	シャルトル聖パウロ修女会 大邱修女院 修女
朴容卿	進明女中高 教師, 教監(1961), 校長(1961~1982) 文教部 教授要目制定審議会 議員 大韓家政学会 副会長(1950) 大韓女性教育同志會長(1972)
林玉仁	小説家 昌徳女高 教師(1946) 『婦人新報』編集次長, 米国広報院 翻訳官, 月刊『婦人京郷』編集長など(1948~1950) 建国大 教授(1966~定年退任) 韓国女流文学人会 会長(1972), ソウル YWCA 会長(1975), 大韓民国芸術院会員(1978~)
林英吉	博文女中 校長
金惠英	東萊女中 教師, 晋州女中 教監
崔景珠	嶺南大 教授(1982)
洪妊植	日本 東京大 留学, 数学博士学位取得, 日本大医学 教授(1964~定年退任)
洪慶姫	奨學士 慶北大 地理教育家 教授(1984 定年退任)
鄭在仁	舞鶴女高, 京畿女高 教師 梨花女大, 成均館貿易大学院 講師 韓国外大 日文科 教授
崔信徳	婦女局 主事, 事務官(1951~1953) 中央女高 教師(1955) 米国留学, 社会学修士学位取得(1956~1958) 檀国大 教授(1961~1963), 梨花女大 社会学科教授(1963~定年退任) 韓国社会学会 会長(1980~1981)
姜信珠	慶北大 家政教育科 教授(定年退任)
尹惠姫	ソウル大 史学科卒業 淑明女大 教授
金蓮玉	淑明女中高 教師 ソウル大 卒業(地理専攻), ソウル大師範学部付属高等学校 教授(1952) 梨花女大 社会教育科 教授

〈表五〉、〈表六〉に登場する職業はほとんど中高等学校³⁶教師・校長、大学教授などの教職だ。解放が女性にも中等学校長、大学教授、学務官僚、公務員になれる機会を開いたのだ。日本人が就いていた教諭・校長の席が空席となり、学制改編にしたがい中高等学校と四年制大学が増設された。政府樹立後には女性部門の政策を担当する部署も新設された。中等・高等教育機関の教育者になれるだけの学力を持った者が極めて不足している状況において、学歴と教職経験、それによる学縁と人脈をもった女高師留学生たちはその恩恵を受けることができた。

〈表五〉、〈表六〉の中等学校教師・校長経歴者は早くに転職した場合の他には全て教監・校長を歴任した。女学校には女性の校長を任命するということが米軍政の方針でもあった。³⁷公立学校の校長を歴任した事例は、方順卿、玄丙辰、孫貞順、金樂信、朱月瓊らである。孫貞順は米軍政の下で女性最初の文教部奨学官に就いた。ほかの三人も全て文教部奨学官・編集官を歴任した。私立女学校でも母校出身女性校長が誕生した。淑明女中は解放直後から校長に就いていた崔三植側と母校出身校長任命を要求する同窓会のあいだに深刻な紛糾³⁸があり、最終的に淑明女高普の一五回卒業生であり奈良女高師留学生である文南植が一九四七年四月に校長に就任し、一九六一年まで在職した。その後続く校長は文南植と同期である李礼行であった。朴奉浩と朴容卿は解放前から母校に在籍しており、解放後に母校の校長になった。

解放後、高等教育機関の改編によって各専門学校が大学へ昇格・認可を受けはじめ、³⁹公立・私立大学が増設され、女性大学教授も登場することになった。中等学校教諭であった彼女たちが大学教授になったのには大学教育を担当する資格者、つまり博士学位者はおろか専門学校卒業生も不足していた時代の恵沢があった。教授に就いた者として趙圻烘、張明郁、尹瑞石、表景祚、宋玉璇、卞珠、崔景珠、姜信珠らの女高師家事科出身が家政学科や家政教育科の教授になることがほとんどであった点が特徴だ。彼女らは一九四七年五月に大韓家政学会創立および活動に参加し、多数の中高等学校の家政教科書と専攻書籍を執筆するなど解放後の韓国家政学の発展の一翼を担った。中等学校校長として定年退職した朱月瓊、朴容卿もここから除外することはできない。朱月瓊は大韓家政学会の七～九代会長であり、朴

³⁶ 一九四五年一二月一四日、高普・女高普が中学校（初級・高級それぞれ三年）に改編された。中学校は一九四九年制定の教育法（一九四九年一二月三十一日、法律第八六号）にしたがい中学校と高等学校に分かれることになる。

³⁷ 『自由新聞』一九四五年一〇月七日付。一九四五年一〇月に改開校した京畿高等女学校と舞鶴高等女学校校長に、それぞれ高鳳京と車士伯が任命された。

³⁸ 『京郷新聞』一九四六年一二月七日付；『京郷新聞』一九四七年二月一日付；『京郷新聞』一九四七年二月六日付；『東亜日報』一九四七年二月一日付；『東亜日報』一九四七年五月三〇日付；淑明七〇年史編纂委員会、前掲書、二〇五頁。

³⁹ たとえば淑明女子専門は一九四八年に淑明女大に、徳成高等女学校は一九五〇年に徳成女子初級大学へ、一九五二年にふたたび四年制の徳成女大へ改編された。

容卿は大韓家政学会創立当時に副会長であった。⁴⁰

家事科出身以外に、解放後に大学で研究と教育活動をつづけた事例としては金三純、崔惠淑（以上東京女高師）、林玉仁、洪姪植、洪慶姫、鄭在仁、尹惠嫻、金蓮玉（以上奈良女高師）らを挙げることができる。金三純は東京女高師在学時、同校出身であり日本最初の女性農学博士の加藤セチが母校を訪問し全校生の前で行った論文発表を聞いて深い感銘を受け、自分も博士になるという決心をしたという。女高師卒業後、母校である京城女高普教諭になり、実家から結婚せよという圧迫を受け続けたが、勉強をし続けて博士になるという決意を曲げることはなかった。二年の義務勤務期間だけを終えて留学に出発しようとしていたが、母校である京城女高普が手放してくれなかったり、健康問題などで延期したりしたが、東京女高師研究科を経て、とうとう一九四三年九月に北海道帝国大学を卒業し、植物学の理学士となった。つづいて同大学院農学部に入学したが、戦争によって学業を続けることが難しくなった。一九四三年一〇月に関釜連絡船の崑崙丸が沈没した事件当時、⁴¹金三純もその船を予約していたが、急な用事で東京に行かなくてはならなくなって船に乗れなかったおかげで命拾いをした。金三純は帰国後に結婚したが早くに夫と死別し、解放後は大学で教鞭をとり、ふたたび日本留学をし、一九六六年一二月に九州大学で生物物理学専攻で農学博士学位を取得した。韓国女性農学博士一号となり、東京女高師で日本人女性農学博士一号を見て育んできた夢を三〇年以上かけてなしとげたのだ。⁴²その後、金三純は生涯にわたって尊敬される科学者として生き、二〇〇一年に享年九二歳で亡くなった。

洪姪植は一九四〇年三月に奈良高女師を卒業し、広島文理大学数学科に進学した。洪姪植は一九四四年に卒業して帰国、京城帝大理工学部教授である宇野利雄の助手として働き解放を迎えた。解放後の洪姪植はしばらく母校である京畿高女で学生を教え、ふたたび日本留学に出発した。このときはまだ韓国と日本が国交を結ぶ前であり、留学のために密航したのだ。洪姪植は一九五九年に東京大学で数学博士学位を取得し、韓国人女性として最初の数学博士になった。その後洪姪植は一生を教育と研究に没頭し、二〇〇九年に享年九三歳で日本で亡くなった。⁴³

朴玉仁は解放前にすでに「鳳仙花」、「孤影」、「後妻記」などの小説を発表し、注目されていた作家であった。解放後に越南した朴玉仁は〈表六〉で分かるようにさまざまな職場を移りながら作品活動を続け、一九六六年に建国大教授となった。解放前まで慶北高女（旧大邱女高普）で教鞭を執っていた洪慶姫は米軍政期にしばらく慶尚北道学務局奨学士として在

⁴⁰ 大韓家政学会編『大韓家政学会五〇年史』一九九七、二五～八〇頁参照。

⁴¹ 〈表一〉で四六番の宋仁鳳は卒業後の帰国路に崑崙丸に乗船し命を落とした。宋仁鳳は金三純の京城女高普の弟子であった。

⁴² 「元老との対談——わが国女性農学博士一号金三純博士」『科学と技術』二六・五、一九九三、八〇～八二頁。

⁴³ イ・サング「韓国最初の女性数学博士洪姪植」『韓国近代数学の開拓者たち』人の模様、二〇一三、一三五～一三七頁。

職した。当時、ある女性新聞は洪慶姫について「道庁職員のなかで最も有識階級であると誇る学務課の数多くの男性官吏たちに交じりながらも少しも遜色ないのみならず、男女共学の教授法に対する権威者」であり「慶尚北道女性教育界の誇り」⁴⁴であると紹介している。洪慶姫は一九四八年に大邱師範大学教授となり、一九八四年に慶北大学地理教育科教授として定年退職するまで教育と研究に邁進し、「韓国の都市地理学は彼女から始まったといっても過言ではない」⁴⁵という賛辞を受けた。奈良女高師で日本文学を専攻した鄭在仁は韓国外国語大学日本語科教授になり、尹惠姫と金蓮玉は解放後にソウル大学で学業を続け、それぞれ西洋史、地理を専攻し、尹惠姫は淑明女大史学科、金蓮玉は梨花女大社会生活学科（地理専攻）教授を歴任した。

崔信徳は奈良女高師を一学期だけで中退した。専攻である家事科の勉強が適性に合わず、自分を「植民地学生として制度的に別個に扱う」⁴⁶ことに対する苦しみが理由であった。崔信徳は裁縫の授業について「これまで見たこともなかった日本の服を朝までひと針ひと針苦勞して完成させては……どれだけ苦勞したとしてもわたしにとってはなんら使い道がないと感じていつもわたしを苦しめていた」⁴⁷と回顧した。最初の夏休みに帰国し、ふたたび奈良女高師に戻らず、その後は梨花女子専門の英文科に入学した。奨学金で留学したわけではなかったために必ず卒業しなければならないという負担もなく、朝鮮であっても日本であっても他の教育期間に進学できるよう家からも十分な支援を受けることができたために可能であった。一九四一年九月に梨花女子専門を卒業してすぐに咸興出身の、熊本医科大学に在学中であった留学生と結婚し、夫の家に入って家庭婦人として暮らしていたが一九四七

⁴⁴ 『婦女日報』一九四七年六月七日付。

⁴⁵ 成俊鏞「短報：洪慶姫の都市地理学」『韓国都市地理学会誌』五巻二号、二〇〇二年一月。

⁴⁶ 崔信徳、前掲書、六八～六九頁。奈良女高師では科目ごとに教室を移動して授業を受けるが、日本人学生たちは座りたいどの席にも座れるが、自分と中国からの学生の二人だけは全ての授業で最前列に座らせられたという。崔信徳は「このような制度的な座席の差別」が大きな傷となりしょっちゅう泣いたと回顧する。

⁴⁷ 崔信徳、前掲書、六六～六七頁。崔信徳の回顧のように朝鮮人留学生にとって和服の裁縫は民族感情を刺激する素材であった。和服の裁縫を学習しなければ本科生に編入できないという学校側の説得にもかかわらず、和服の裁縫時間に朝鮮服の裁縫を自習した留学生もいた（奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター編、前掲書、三六九～三七〇頁）。〈表二〉の金樂信、鄭寛淑のことである。実際にこの二人は『一覧』の卒業生名簿に本科ではない選科修了と記録されている。東京女高師家事科留学生の宋今璇も「裁断と裁縫といえば日本服、着物をつくることが主」であったが、相当な費用がかかったために朝鮮人学生たちはすることも難しかっただけでなく「日本の服をつくることを勉強してどうするんだという反感があった」と回顧している（南海宋今璇博士回顧録編纂委員会、前掲書、一五九頁）。

年に越南した。解放後の崔信徳の夫はソウル大医学部細菌学教室で研究し、善隣商業学校夜間部で生物学を講義したというが、朝鮮戦争勃発直後に拉北された。四人の子どもとともに一人残された崔信徳は生計のために働かなければならなかった。戦争中にはじめて持った職業が婦女局公務員であり、その後 YMCA 総務職に移り、中央女高の英語教師になった。梨花女子専門英文科卒業という学力があったために可能なことであった。その後の崔信徳の履歴は〈表六〉の通りである。

教職以外の他の仕事にも従事した人物は李礼行と許河伯である。〈表四〉、〈表六〉から分かるように、李礼行はとても多様な経歴を持っている。解放を迎えた李礼行は「子どもたちを放り出して、夜でも昼でも、時と場所を選ばずになんでもやらなければならないという意欲」に燃え、「男性たちよりも女性たちが先頭に立って仕事をすれば国がよくなるという考えで一生懸命駆けまわった。」⁴⁸ちょうど朴順天、黄信徳と極めて近い家門の人がおり、その人に付いてまわってお使いをしながら自然に女性指導者たちと接触するようになったという。⁴⁹つまり李礼行は解放を契機に教育ではない新しい領域の社会活動に飛びこむことができた。一九四七年に越南した⁵⁰李礼行は、朴順天、朴承浩らの推薦で大韓民国政府の婦女局公務員になった。最初は婦女局課長であり、初代婦女局長の朴承浩が朝鮮戦争中に拉北されるや婦女局長になり、一九五〇年代の婦女行政の責任者であった。李礼行は右翼女性団体の熱心な活動家でもあった。大韓愛国婦人会⁵¹が発足すると、女性団体が官弁団体だという非難ものともせず、婦女局の公務員として動員可能な資源と政府各界の人事とのつながりを十分に活用して組織の拡大のために飛びまわり、⁵²女性問題研究院⁵³創立時にも発起人として参加した。五・一六クーデターが勃発するや婦女局長を辞職し淑明女高の校長に就任し、一九七四年まで在職したのだから、解放後約三〇年間にわたり高位公務員として、女性団体役員として、教育者として多方面にわたり旺盛な社会活動を展開した。

許河伯は淑明女高普在学中に「日本人先生排斥ストライキを一度やり」、奈良女高師留学中には「京都帝大共産党事件に関係して読書会をして全員逮捕されたが、証拠物を隠滅させ

48 韓国婦人会『韓国女性運動略史——一九四五～一九六三年までの人物を中心に』一九八六、一六四頁。

49 同上。

50 李礼行は黄海道鳳山出身だ。〈表四〉で李礼行が一九三三～一九三五年に在籍した朝陽農事学院は故郷で李礼行の父親が設立・運営した学校であった。

51 解放後に組織された右翼女性団体のうち韓国愛国婦人会と独立促成中央婦人団が一九四六年四月に「独立促成愛国婦人会」として統合し、一九四八年に「大韓愛国婦人会」に改称した。

52 韓国婦人会、前掲書、一六五～一六六頁。

53 女性問題研究院は一九五二年一月に黄信徳を院長として、表景祚、李礼行、李姫鎬、李兌榮らが発起人として参加し出帆した。一九五九年一月一六日に女性問題研究会に改称した。

るために新聞紙三枚を全部破いて食べてしまおうととても大変な目にあったこと」⁵⁴もあったという。また許河伯の配偶者である金復鎮は朝鮮プロレタリア芸術同盟（KAPF）に参加しており、高麗共産青年会の幹部として活動して五年半のあいだ監獄生活までした人物であった。しかし許河伯は一九四〇年代前後から各種の動員組織の幹部に就き、女性の戦争協力を勧める講演と寄稿活動を積極的に行なった。解放後の彼女は私立明星女学校の校長に就くと同時に、植民地の残滓を痛烈に非難する左翼女性運動家へとふたたび変貌した。許河伯が左翼女性団体である朝鮮婦女総同盟の幹部として行った言説を日帝時代末期のそれと比較してみれば同名異人ではないかと思うほどである。許河伯は朝鮮戦争中に死亡したが、短いながらも女性団体の幹部として活動できたのも解放が与えた贈り物だと見ることもできるだろう。

このように解放は女性にとってそれまで徹底して男性の席であった校長、教授、官僚、諸団体の幹部になることのできる機会を開いた。しかし彼女たちの活動範囲は「女性専用」分野から抜け出すのは難しかった。在職していた学校はほとんど全てが女学校であり、大学教授に就いたものは家政学専攻が多かった。またそのなかでの牽制と無視も避けられなかった。孫貞順は朝鮮戦争中に大邱で「ソウル避難連合中学校」の運営を担当しており、当時の文教部長官がこの学校のために教室一〇個分の建築資材を割り当てるように慶尚北道学務課に指示したが、当局は孫貞順に長官の指示辞退を知らせもせず、該当資材を大邱師範学校の教室建築に割り当ててしまったという。孫貞順はこのことについて「女校長だからといって見下して行ったことではないかと一人で考え直してみても悲しかった」⁵⁵と回顧した。李礼行は婦女局長に就いている間に政府の組織改編があるときごとに婦女局の存続が議題となり一夜にして婦女局が無くなったり息を吹き返したりする紆余曲折を経験し、婦女局は最も弱い局であるからつねに他部署に比べて予算も最も少ないのみならず、辛うじて確保した予算を他の局が持っていくなど常に無視されたと回顧した。⁵⁶女性部門の政策を担当する部署が新設され高位職女性公務員が誕生したが存在感の微弱な非主流であった。

このような限界にもかかわらず〈表五〉、〈表六〉の人物たちは解放がもたらした機会を逃さず自分が持つ学力と人脈、教職経験などの資産を十分に活用し、社会活動の範囲を拡張し、地位を向上させていったということができる。〈表五〉、〈表六〉に名前のない留学生たちのなかの一部は解放後に法曹界、言論界、芸術界、医療界、学会など、それぞれの専門分野で活躍した男性の配偶者として名前を残した。

V 結語

女高師の留学生たちの経験と成し遂げたことは、植民地朝鮮では男性にとっても難しい

⁵⁴ 『独立新報』一九四六年十一月一七日付。

⁵⁵ 『朝鮮日報』一九七五年六月一五日付。

⁵⁶ 韓国婦人会、前掲書、一七三頁。

ことであった。卒業まではできなかった場合でも、女高師に入学願書を出せる資格を持つことだけでも極めて少数の女性にのみ可能なことであった。彼女たちが成し遂げたことには、個人の学力や意志よりも前に、生まれもった家庭環境が作用したということは否定できない。娘も息子と同じように教育させることができる経済力、女高普を卒業した娘を嫁ぎ先ではなく留学に送るという家父長の意志が下支えにならない限り、女高師留学はほとんど不可能なことであった。したがって彼女たちの経験と成し遂げたことは、極めて特権的なものであったといえる。

女高師の留学生たちは中産層の男性すらも簡単には持ちえなかった機会を享受した、極めて少数の恵まれた女性であった。彼女たちは自分とほぼ同じ社会経済的背景を持つ女学生たちが集まっている女学校に就職し、自分と同様に高等教育を受けて専門職を持った配偶者と結婚し、近代的な家庭を営むことで階層内の移動と維持に成功した。多数が卒業後すぐに結婚したり、職場生活をしたとしても結婚・出産を契機に辞職して家庭に入ったという事実を見ると、彼女たちの家庭生活と職場生活に性別分業的なジェンダー規範が影響を及ぼしたのは明らかだ。これは朝鮮において極めて少数である高学力の女性校友だとしても女性にとって不利な性別分業的な認識と負担から自由になれなかったということを見せている。それにもかかわらず本人と実家、配偶者の社会経済的地位を考慮するとき、彼女たちのほとんどは経済的困難や植民地支配の暴力と抑圧を直接経験することがほとんどない人生をきたたであろう可能性が高い。女高師の留学生たちが帰国後に学校ではない空間で教育運動やさまざまな社会団体活動をしたり、民族運動に参加したりした事実が確認されないのは、このような階級的特性とも関連があるだろうと理解できる。「富裕で開明した父に愛されて大切にされた娘」という背景は彼女たちにとって女高師卒業という学閥と相当な社会経済的地位を持たせたが、同時に彼女たちの人生を一定の類型に限定する要因でもあった。韓国で親日反民族行為者と規定された四人の人生は同時代の大多数の朝鮮人女性とかけはなれた人生を生きてきた、自分の内部からも外部からも自ら生まれかわることのできる覚醒の機会を持ちえなかった、脱民族的で自己中心的な高学力女性固有の素顔を代表するといえる。

参考文献

- 『京城日報』、『東亞日報』、『朝鮮日報』、『毎日申報』、『京郷新聞』、『自由新聞』、『婦女日報』、『獨立新報』
『別乾坤』、『女性』、『과학과 기술』
『官報』、『朝鮮總督府調査月報』、『朝鮮總督府統計年報』
『東京女子高等師範學校一覽』

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター編『奈良女子大学百年史』奈良女子大学, 2010.

太田孝子『海峡を越えて』春風社, 2008.

金順英『한 빛을 따라: 김순영자서전』益文社, 1976.

南海宋今璇博士回顧錄編纂委員會『去華就實: 南海宋今璇博士回顧錄』徳成女子大学出版部, 1978.

대한가정학회 편『대한가정학회 50 년사』1997.

朴宣美『여성, 제국을 거쳐 조선으로 회유하다』창비, 2007.

이상구『한국 근대수학의 개척자들』사람의 무늬, 2013.

林玉仁『나의 이력서』正宇社, 1985.

趙圻烘『芝蘭의 뜰에서: 又棠 趙圻烘 自叙傳』誠信女子師範大學出版部, 1979.

崔信德『그 은총 속의 나의 인생』생각하는 백성, 2009.

崔惠淑『역사의 파도를 헤치고』천지성지사, 1999.

한국부인회『한국여성운동약사-1945~1963년까지 인물 중심』1986.

玄丙辰『메마른 언덕에 꽃밭을』培英社, 1981.

成俊鏞, 「단보: 흥경희와 도시지리학」, 『한국도시지리학회지』 5 권 2 호, 2002.12.

翻譯: 影本剛

金泰雄(서울대)

1. 序言

제1차 세계대전이 끝나갈 무렵 일본 寺内 내각이 쌀소동의 餘波로 총사퇴하자 문민 관료인 原敬 내각이 들어섰고 곧이어 식민지 조선에서 3·1운동이 발발하여 전 조선으로 확산되었다. 하라 내각은 3·1운동에 대한 수습책으로 內地延長主義에 입각하여 식민지 조선에 대한 정책을 변경하였는데 교육 부문에서도 여타 부문과 마찬가지로 ‘內鮮共學’의 원칙 아래 朝鮮敎育令을 개정하였고 1922년 전문학교는 일본의 專門學校令에, 대학 교육 및 예비교육은 일본의 大學令에 준하도록 하였다. 이러한 조치는 식민지 조선의 전문학교에 조선인과 일본인이 함께 입학할 수 있는 길을 제도적으로 보장하는 동시에 이들 학교의 졸업생이 본국 일본과 식민지 조선에서 동등한 자격을 인정받는 계기가 되었다.

그러나 일제의 이러한 조치는 民族同數의 방침 아래 조선인이 다수를 차지한 기존의 관립전문학교에 일본인 다수가 입학할 수 있는 여건을 조성하는 계기가 되었다.¹ 반면에 일본인 학교나 다름없던 ‘東洋協會專門學校’(훗날 拓殖大學으로 변경) 京城分校는 ‘私立 京城高等商業學校’(1920)를 거쳐 ‘官立 京城高等商業學校’(이하 경성고상으로 줄임, 1922)로 전환하면서 조선인도 입학할 수 있게 되었다.² 이러한 변화는 대한제국의 廢亡으로 일본인들이 주요 고위 중요 관직을 차지하면서 관직 진출의 기회를 다수 상실한 조선인들에게 또다른 계층 상승의 기회로 다가온 동시에 높은 보수와 나은 처우를 보장받는 직장을 취직할 수 있는 통로로 비쳤다. 近代 學歷主義와 學閥主義가 제공

¹ 金泰雄·張世胤, 『일제의 고등교육정책』, 東北亞歷史財團, 2022, pp.79~80.

² 경성고등상업학교의 기원은 1900년 일본 東京에 설립된 臺灣協會學校에서 비롯되었다. 臺灣協會는 일본이 1895년 청일전쟁에서 승리하여 臺灣을 식민지로 통치하게 되자 臺灣의 사정을 연구하기 위해 만든 단체였다. 협회는 그 후 臺灣에 진출하여 殖民事業에 종사할 인재를 양성하기 위해 臺灣協會學校를 설립했다. 이 학교는 1904년에 전문학교로 승격했고, 1907년에 東洋協會專門學校로 개칭했다. 臺灣뿐 아니라 한국과 만주에서의 식민사업을 포괄하기 위해서였으며, 개칭과 동시에 동양협회전문학교 경성분교를 서울 筆洞에 설치했다. 1918년에는 행정과와 고등상업과를 설치하여 수업연한을 3년으로 하였으나, 1919년에는 행정과를 폐지하였다.

하는 특혜였던 셈이다. 다수의 엘리트 조선인 학생이 경성고상 입학에 진력했던 것이 이 때문이었다.

그러나 조선인들의 기대와 달리 입학 개방의 기회는 매우 제한되어 있었다. 『東亞日報』 기자는 1936년 2월 7일 지면을 통해 전문학교를 소개하는 가운데 경성고상을 다루었는데 여기에서 기자는 “입학난에 있어서나 또는 조선인의 불평등 대우에 있어서나 가장 組上에 올려져야 할 학교도 경성고등상업학교요 조선인과 가장 인연이 薄弱한 학교도 경성고상인 것이 앞으로 실증될 것이다.”라는 문장으로 시작하였다. 경성고상이 조선인들에게 입학 기회를 제공했음에도 여타 관립전문학교에 비해 입학 제한이 가장 극심했음을 보여주는 언설이라고 하겠다. 나아가 조선일보는 현조선이 각방면 직장이 일본인에게 점령당했다고 주장하면서 일본인이 쉽게 취직하고 있음을 강조하였다.³ 과연 경성고상은 동아일보 기자의 보도대로 民族的 偏見을 가지고 조선인 학생을 차별하여 입학을 제한했는가. 또한 조선일보 기자의 주장대로 일본인은 조선인에 비해 보수가 높고 대우가 좋은 직장을 손쉽게 구했는가. 아니면 조선총독부 당국자의 말대로 조선인의 學力 不足인가.

근래 한국에서는 교육사 연구 대상이 근대전환기 신교육의 출발이라 할 초등교육에 대한 연구를 넘어 일제하 중등교육과 고등교육으로 옮겨오고 있다. 무엇보다 이들 교육기관에 재학하였던 조선인 학생들이 초등교육기관에 비해 매우 적음에도 불구하고 이들 학생이 해방 후 한국의 경제성장과 학술 발전에 기여한 엘리트라는 점에서 이들 학생의 성장과정과 屈曲을 역사적으로 추적할 필요가 있기 때문이다.⁴ 특히 당시 민족 차별이 가장 심하다고 평가를 받았던 경성고상의 경우, 조선인과 일본인 학생들은 어떠한 기준으로 선발되었으며 이러한 기준이 졸업 이후 진로에 어떤 영향을 미쳤는가를 실증적으로 분석할 필요가 있다. 그리고 이러한 검토 과정에서 성적이 아닌 여타 요인들이 어떻게 작용하였는가를 파악할 필요가 있다. 그러나 이러한 학생 선발의 기준, 그리고

³ 「각학교생졸업에 임하여 직업문제의 顛倒여하」, 『조선일보』 1926년 3월 3일.

⁴ 宋興麗, 「京城高等商業學校が韓國經濟近代化に果たした役割-1945年度以前入學者及び卒業者の社會進出狀況を中心に-」, 『拓殖大學百年史研究』 4, 拓殖大學 日本文化研究所附屬近現代研究センター, 2000; 金泰雄, 「일제하 官立專門學校의 운영 기조와 위상 변화-제1차·제2차 조선교육령 시기 ‘서울대학교 前身學校’를 중심으로-」, 『연희전문학교의 학문과 동아시아 대학』 (金度亨 편), 혜안, 2016; 김자중, 『한국대학의 뿌리』, 한국방송통신대학교출판문화원, 2022; 趙愷珍, 「식민지 조선의 관립전문학교와 ‘內鮮共學’-경성법학전문학교·경성고등상업학교를 중심으로-」, 서울대학교 박사학위논문, 2025.

학교 성적과 취직의 상관관계를 직접적으로 확인할 수 있는 資料나 指標를 발굴하는 것은 매우 어렵다. 그것은 학생의 직장 선호도, 求人 機關의 직원 채용 기준이 매우 다양할뿐더러 이러한 자료가 고스란히 남아 있지 않기 때문이다. 그럼에도 현재 남아 있는 學籍簿와 동창회 명부, 학교일람 등은 입학과 졸업 그리고 취직의 경향성을 추적할 수 있는 단서를 제공하고 있다. 입학생의 期數別 민족 구성, 출신학교의 현황, 就業 職群 등을 시기별로 구분하여 통계상에서 처리한 뒤, 이들의 양상과 특징을 추출하고자 한다. 시기는 크게 교육과정과 구애없이 경제상황과 전시체제를 염두에 두고 세 시기로 구분하였다. 제1시기는 경성고상의 첫 졸업생이 배출되는 1921년부터 1929년 10월 대공황 직전까지 그리고 제2시기는 1929년 대공황 이후 1937년 7월 중일전쟁 직전까지, 제3시기는 중일전쟁 이후 동창회명부의 마지막 해당 연도인 1943년까지이다.

이러한 작업이 소기의 목표대로 수행된다면 일제의 관립전문학교 정책이 학교 현장에 미치는 영향을 구체적으로 파악할 수 있을뿐더러 이러한 영향이 학생들의 처지 및 활동과 맞물려 졸업 이후 진로와 어떠한 상관 관계를 맺는지를 해명할 수 있으리라 판단된다.

2. 졸업생의 민족 구성과 지역 분포

1) 제1시기(1921~1929)

우선 경성고상에 입학한 학생들의 민족별 구성과 거주지별 현황을 파악할 필요가 있다. <표 1>은 현재 남아 있는 학적부를 중심으로 엑셀로 구축하였기 때문에 경성고상일람표의 수치와 다소 차이가 발생하지만 대체적인 양상은 유사하다.

<표 1> 1921~1929년 경성고등상업학교 졸업자의 민족·거주지별 현황

단위 : 명

민족 졸업 연도	朝鮮人		日本人			其他 (미상 포함)	計
	在朝	在日	在朝	在日	在中		
1회 (1921)	0	0	10	22	0	0	32

2회 (1922)	0	0	10	12	0	0	22
3회 (1923)	0	0	18	35	0	0	53
4회 (1924)	0	0	24	27	2	0	53
5회 (1925)	5	0	32	29	4	0	70
6회 (1926)	7	0	29	15	8	1	60
7회 (1927)	13	0	36	24	4	0	77
8회 (1928)	8	0	27	25	3	2	65
9회 (1929)	8	0	29	24	5	0	66
계	41	0	215	213	26	3	498
(%)	(8.2)	(0.0)	(43.2)	(42.8)	(5.2)	(0.6)	(100)

출전 : 京城高等商業學校同窓會 編, 『京城高等商業學校 學籍簿』(1921~1929)

京城高等商業學校同窓會 編, 『會員名簿』, 1944

비고 : 재일 일본인과 재조 일본인은 경성고상 입학 이전 출신학교의 소재지에 따라 구분함

<표 1>에 따르면, 학교 개교 설립 초기에 일본인들이 대거 입학하였다. 일제는 일본인 학생의 다수 입학을 유도하기 위해 東京에 시험장을 설치할 정도였다.⁵ 그것은 무엇보다 일본 본국의 고등교육기관이 학령인구에 비해 고등교육기관이 부족하였기 때문이

⁵ 「고등상업의 시험장철폐문제」, 『동아일보』, 1923년 1월 29일.

다. 특히 在朝 일본인은 물론 본국 일본인을 유도하여 조선 내 일본인의 경제적 입지를 강화하고 식민통치의 근간으로 활용하고자 했기 때문이다. 그러나 조선인과 재조 일본인은 일제의 이러한 정책에 반발하였다. 양자가 同床異夢이었지만 자신들의 입학에 불리하다고 판단했기 때문이다. 이에 조선총독부는 재조일본인의 자녀의 입학 비율을 높이기 위해 도쿄시험장을 폐지하였다.⁶ 그것은 조선총독부가 의도적으로 조선인을 배제한 측면도 있으나 조선인 중등학교의 절대적인 부족에 따른 한국인들의 입학지원자가 적다고 판단했기 때문이다.⁷ 물론 재조 일본인들은 조선인 고등보통학교 출신자들의 경성고상 입학 역시 문제로 삼았다. 조선인 학생의 입학이 경성고상에 대한 평판을 떨어뜨린다고 주장하며 퇴학도 불사한다고 할 정도였다.

따라서 1922년에 입학한 조선인 학생이 1925년부터 졸업하기 시작하였지만 그 숫자는 매우 적었다. 이후에도 조금씩 증가하였지만 제1시기 조선인 졸업생은 전체 졸업생에서 10퍼센트에도 이르지 못했다. 당시 신문도 1921년 이래 1926년까지 졸업생은 968명인데 이 가운데 조선인이 110명이어서 전체의 11퍼센트에 지나지 않다고 보도하였다.⁸ 그 밖에 경성고상 前職 職員과 現職 職員 모두 88명이었는데 조선어 강사 1명만 조선인이었다.

조선인 학생의 이러한 소수 입학은 무엇보다 조선인들의 경제적 궁핍과 이에 따른 學資金難에서 비롯되었다.⁹ 또한 일본인 지원자는 일본어와 일본사에 강점을 보이고 있어 조선인의 경쟁력은 일본인에 비해 낮을 수 밖에 없었다. 아울러 조선총독부의 조선인에 대한 思想 團束이 수반되고 있었다. 나아가 조선인 언론계의 주장에 따르면, 입학비율에 內規가 있어 조선인에게 불리하다는 것이다. 예컨대 전문학교 교장들 사이에서 일정한 不文律의 내규가 있어 일본에서 중등학교를 졸업하고 건너오는 학생에게 우선권을 주어 모집인원 총수의 5할은 그들을 위하여 제공하고 그 나머지 5할을 가지고 조선출신의 일본인 학생과 조선인 학생을 수용하였다는 풍문이 돌았다.¹⁰ 일제는 여론을 의식하여 정원의 5할은 조선지역에서 졸업한 학생(조선인과 일본인 상관 없이)을 선발하고 나머지 5할은 자유경쟁에 맡기어 일본에서 오든지 중국에서 오든지 간에 학력이 우수

⁶ 趙慶珍, 앞의 논문, pp.117~118.

⁷ 「조선인과 교육문제」, 『조선일보』 1927년 11월 5일.

⁸ 「입학난의 各官專을 찾아서(4)」, 『동아일보』 1936년 2월 7일.

⁹ 「누구를 위한 전문대학」, 『조선일보』 1932년 3월 18일.

¹⁰ 「일본서 온 학생에 우선권 총수오할을 제공」, 『동아일보』 1928년 7월 25일.

한 자로 선발한다고 밝혔다. 그러나 이러한 방침은 5할을 조선 바깥에서 선발한다는 방침이나 다름없었다. 특히 在中 일본인 학생의 입학도 적지 않았다. 이들 일본인 학생은 직업상 만주와 중국 등지에서 활동하고 있는 아버지를 따라 중국 소재 학교를 졸업한 뒤 경성고상에 입학한 학생들이었다.

따라서 조선인 학생들은 이러한 불리한 여건을 감안하여 일본인 학생에 비해 적게 지원하였다. 제1시기 입학경쟁률의 추이를 보여주는 통계를 직접 구하기가 어려워 1927년 관립전문학교의 입학경쟁율을 보여주는 현황을 제시하면 <표 2>와 같다.

<표 2> 1927년 4개 관립전문학교 민족별 지원과 입학 현황

출신학교 지원/입학	京城高工		京城高商		京城法專		京城醫專	
	조선인	일본인	조선인	일본인	조선인	일본인	조선인	일본인
지원자(a)	104	255	80	304	160	50	165	413
입학자(b)	15	40	15	87	45	31	16	80
입학자 비율(%)	27.3	72.7	14.7	85.3	59.2	40.8	16.7	83.3
b/a(%)	14.4	15.7	18.8	28.6	28.1	62.0	9.7	19.4

출전 : 「조선학생은 曉天의 星辰」, 『조선일보』, 1927년 4월 14일.

경성고상의 경우, 조선인 합격자가 전체 합격자 정원에서 차지하는 비율이 상대적으로 낮기 때문에 불합격에 대한 우려로 인해 조선인 학생 지원자가 경성법전과 달리 입학경쟁률이 낮았다. 당시 경성고상의 취직률이 매우 높음에도 불구하고 조선인 지원자가 늘지 않는 것은 “조선인은 잘 받아주지 않는다”라는 조선 사회의 통념이 이를 뒷받침하였다.

이러한 통념은 경성고상에 입학한 학생들의 출신학교에서 명백하게 드러나고 있다. <표 3>은 경성고상에 입학한 학생들을 배출한 중등학교 순위 현황이다.

<표 3> 1921~1929년 경성고상 입학자 학교 순위와 학생수

중등학교	京城中	善隣商	龍山中	仁川南 公立商業 學校	平壤中	전체 입학자
학생수(%)	63(12.7)	38(7.6)	23(4.6)	19(3.8)	17(3.4)	498 (100)

출전 : 京城高等商業學校同窓會 編, 『京城高等商業學校學籍簿』

<표 3>에 따르면 경성중학교 출신이 경성고상 합격자 중에서 12.7퍼센트를 차지하고 있다. 이러한 비율은 제일 일본인 학생들을 포함한 수치를 감안한다면 매우 높은 수치이다. 선린상업학교 역시 결코 낮은 비율이 아니다. 이어서 용산중과 인천남공립상업학교, 평양중이 뒤따르고 있다. 그런데 이들 학교 중 일본인 자제만이 다니는 중학교가 100여 명이다. 전체 498명 가운데 1/5을 차지하는 비율이다. 더욱이 선린상업학교와 인천남공립상업학교 역시 일본인 위주의 상업학교이다. 요컨대 특정 중학교 학생과 상업학교 학생이 경성고상 재학생 정원을 독차지한 셈이다. 그만큼 조선인 중등학교 출신 학생이 입학할 가능성이 낮았음을 말해준다.

한편, 이들 학생의 경제 형편을 짐작할 수 있는 기록이 학적부에 잘 보이지 않는다. 다만 1928년에 발행한 『京城高等商業學校一覽』(1928)에 따르면 1927년 현재 1학년, 2학년 3학년 아버지의 직업을 통해 짐작할 수 있다. <표 4>가 그것이다.

<표 4> 1927년 현재 경성고등상업학교 재학생의 學父兄 직업

	1학년	2학년	3학년	계(%)
농업	12	8	12	32(13.9)
공업	-	3	7	10(4.3)
상업	24	18	14	56(24.3)
관리	25	15	8	48(20.9)
교원	4	3	2	9(3.9)
회사원	8	11	11	30(13.0)

기타	17	12	16	45(19.6)
계	90	70	70	230(100)

출전 : 京城高等商業學校 編, 『京城高等商業學校一覽』(1928)

<표 4>에 따르면 학부형 직업 가운데 상업이 가장 많은 비중을 차지하고 있다. 그러나 당시 직업 구성에 비추어 보았을 때 관리의 비중이 가장 높다고 할 수 있다. 반면에 당시 가장 많은 직업 비중을 차지하는 농업의 경우, 회사원의 비율과 비슷하다는 점에서 농업을 주업으로 하는 地主조차 자제들을 경성고상에 보내는 데 적지 않게 부담하고 있음을 짐작할 수 있다.

그럼에도 일부 부유한 조선인 가정에서는 경성고상에 보내고자 하였다. 대표적으로 1928년(제8회)에 졸업한 都定浩(훗날 都有浩로 개명)을 꼽을 수 있다. 그는 1905년 함경남도 함흥에서 태어났으며 그의 집안은 대대로 함흥에서 비교적 유복한 가정이었다.¹¹ 學籍簿(徽文高等學校 소장)에 그의 본명은 ‘都定浩’로 표기되어 있다. 威興永新學校와 威興永生學校 4년을 마치고 1922년 서울의 徽文高等普通學校 5학년에 편입해 1923년 졸업하였다. 휘문고등보통학교를 졸업한 도정호는 1924년 4월 경성고상에 진학하였으나 3학년으로 진급할 무렵 병으로 인하여 1년간 휴학하고 금강산에 들어가 휴양을 하였고 1928년 3월에 졸업하였다. 경성고상을 졸업한 그 해, 도정호는 일본으로 가서 神戸商業大學 입학시험에 합격하였다. 그렇지만 상업대학에는 뜻이 없어 등록을 하지 않았다. 그는 독일을 거쳐 오스트리아 빈 대학에서 ‘Probleme der koreanischen Geschichte in kulturellem Zusammenhang’(문화적 맥락에서 본 조선사의 문제)라는 논문으로 철학박사 학위를 받았다. 훗날 북한에 남아 고고학의 토대를 닦았다.

2) 제2시기(1930~1937)

1929년 경제대공황이 졸업생은 물론 입학지원자에게 영향을 미쳤다. 무엇보다 1920년대 후반 경제 침체와 경제대공황으로 인해 학생들의 관립전문학교 지원에 적지 않은 영향을 미쳤으리라 추측된다. 특히 본국 일본인 학생의 지원자수가 격감하였고 이에 따른 합격자수도 감소하였다. 반면에 재조 일본인과 조선인의 지원자수가 증가하고 합격

¹¹ 韓昌均, 『하담 도유호 : 한국 고고학 첫 세대』, 혜안, 2017; 全京秀, 「식민지 지식인에 대한 제국 일본의 감시와 착취」, 『近代書誌』 17, 2018.

자도 증가하였다. <표 4>는 이러한 추세를 보여준다.

<표 5> 1930~1937년 경성고등상업학교 졸업자의 민족·거주지별 현황

단위 : 명

민족 졸업 연도	朝鮮人		日本人			其他 (미상 포함)	計
	在朝	在日	在朝	在日	在中		
10회 (1930)	13	0	42	14	3	0	72
11회 (1931)	12	0	44	17	1	2	76
12회 (1932)	16	1	41	21	2	0	81
13회 (1933)	12	0	51	17	0	0	80
14회 (1934)	16	0	44	20	0	0	80
15회 (1935)	15	0	48	18	2	0	83
16회 (1936)	17	0	58	17	2	0	94
17회 (1937)	15	2	58	10	3	0	88
계 (%)	116 (17.8)	3 (0.5)	386 (59.0)	134 (20.5)	13 (2.0)	2 (0.3)	654 (100)

출전 : 京城高等商業學校同窓會 編, 『京城高等商業學校 學籍簿』(1930~1937)

京城高等商業學校同窓會 編, 『會員名簿』, 1944

<표 5>에 따르면 제1시기에 비해 조선인 학생의 증가가 뚜렷하다. 제1시기 8.2%에서 17.8%로 증가하였다. 그것은 무엇보다 제일 일본인의 지원자가 감소한 데서 그 이유를 찾을 수 있다.¹² 제2시기 제일 일본인 졸업생의 비율이 제1시기에 비해 무려 1/2로 감소하였다.

또한 조선인 지원자의 이러한 입학률 증가는 조선인 학생의 입학경쟁률 증가로 나타났다.

<표 6> 1930년대 전반 관립전문학교의 민족별 입학경쟁률 현황

연도/민족 학교	1931		1934	
	조선인	일본인	조선인	일본인
京城法專	4.5	2.5	7.1	2.9
京城醫專	14.3	7.7	7.7	9.1
京城高工	3.3	4.2	5.0	5.9
京城高農	3.3	4.0	7.7	6.3
京城高商	5.3	4.7	9.1	4.5
계	5.5	5.0	7.1	6.3

출전 : 「624명 지원, 114명이 합격」, 『동아일보』, 1931.4.7; 「官立高專合格者狀況比較」, 『동아일보』, 1934.3.29.

<표 6>에 따르면 1931년과 1934년을 기준으로 조선인 학생의 경성고상 입학경쟁률은 여타 관립전문학교에 비해 매우 높은 반면에 일본인 학생의 입학경쟁률이 다소 낮아졌음을 확인할 수 있다.

물론 제일 일본인 지원자의 감소가 특정 학교에 치중된 경향을 완화시키지 못하였다.

<표 7>은 이러한 양상을 잘 보여준다.

<표 7> 1930~1937년 경성고상 입학자 학교 순위와 학생수

¹² 제일 일본인 지원자의 감소 원인에 관해서는 일본 국내의 입시 상황, 진로 문제와 유학에 따른 학비 부담 등을 파악할 필요가 있다. 다만 발표자가 이에 관한 자료를 확보하고 있지 못해 이 문제는 추후 검토하고자 한다.

중등학교	京城中	龍山中	善隣商	京城 商業學校	平壤中	전체 입학자
학생수 (%)	102 (15.6)	80 (12.2)	61 (9.3)	37 (5.7)	26 (4.0)	654 (100)

출전 : 京城高等商業學校同窓會 編, 『경성고등상업학교학적부』

<표 7>에 따르면 일본인 중학교가 1위, 2위, 5위를 차지함에도 전체 비율은 제1시기에 비해 다소 낮아지고 상업학교 비율의 높아졌다. 특히 5순위에 들어가지 못했지만 조선인 학교인 京城第一高普 출신이 17명에 달할 정도였다. 그리고 제2시기 고보 출신의 비율이 제1시기 6.4%보다 훨씬 높아 11%에 달하고 있는 반면에 중학교 출신은 66.1%에서 58.3%로 다소 낮아졌다.¹³ 물론 일본인 학생이 차지하는 비율이 조선인 학생에 비해 압도적이라는 점은 부정할 수 없다. 그러나 일본인 위주의 경성고상에 조금이나마 균열이 나타나고 있음도 눈여겨 볼 필요가 있다.

3) 제3시기(1938~1943)

제3시기는 중일전쟁의 발발로 전쟁에 필요한 병사를 비롯하여 많은 인력이 필요한 시기이다. 따라서 입영과 전사에 따른 재일 일본인 학생의 감소가 보이는 반면에 조선인 학생의 증가를 예측할 수 있다. <표 7>은 1938~1943년 경성고상의 졸업생 추이와 민족·거주지별 현황이다.

<표 8> 1938~1943년 경성고등상업학교 졸업자의 민족·거주지별 현황

단위 : 명

민족 졸업 연도	朝鮮人		日本人			其他 (미상 포함)	計
	在朝	在日	在朝	在日	在中		
18회 (1938)	30	0	67	14	3	0	114

¹³ 『京城高等商業學校學籍簿』(1921~1937)에서 學校及別로 분석하여 추출한 수치이다.

19회 (1939)	20	1	57	12	0	0	90
20회 (1940)	19	0	57	8	0	0	84
21회 (1941)	23	0	68	5	0	0	96
22회 (1941)	32	0	56	10	1	0	99
23회 (1942)	32	0	62	7	0	0	101
24회 (1943)	37	0	56	13	2	0	108
계 (%)	193 (27.9)	1 (0.1)	423 (61.1)	69 (10.0)	6 (0.9)	0 (0)	692 (100)

출전 : 『京城高等商業學校 學籍簿』(1930~1937)

京城高等商業學校同窓會 編, 『會員名簿』, 1944

비고 : 22회(1941.12) 졸업—학기 단축

23회(1942.9.25.) 졸업

24회(1943.9.22.) 졸업

<표 8>에 따르면 무엇보다 제일 일본인 재학생의 감소가 두드러진다. 무엇보다 戰時體制時期에 돌입하면서 제일 일본인의 식민지 조선 유학이 급격히 감소된 반면에 이러한 공백을 조선인 학생이 차지했다.¹⁴ 제2시기에 17.8%에 지나지 않은 조선인 학생의 비율이 제3시기에 들어오면 27.9%에 이르고 있다. 재조 일본인 학생의 비율은 59.0%에서 61.1로 소폭 증가하였다. 특히 1941년 졸업생(1938년 입학생)의 경우, 매우 적다.

¹⁴ 조선인의 공백 충당은 직장의 경우에서도 동일하다. 은행의 경우, 일본인 행원의 입대로 발생한 일력 공백을 메우기 위해 조선인을 채용하였다. 이에 관해서는 鄭炳旭, 「조선식산은행과 한국산업은행의 직원채용: 연속과 차이」, 『한국사학보』 51, 2013, p.233 참조.

그것은 1937년 중일전쟁의 발발과 병력 증가에 따른 입영자의 증가에서 비롯된 듯하다.

<표 9> 1937~1939년 경성고등상업학교 입학지원 현황

민족별 입학연도	조선인			일본인		
	입학지원 자	입학생	입학경쟁 률	입학지원 자	입학생	입학경쟁 률
1937	144	16	9.0	328	83	3.4
1938	194	27	7.2	308	73	4.2
1939	152	40	3.8	292	64	4.6

출전 : 京城高等商業學校同窓會 編, 『京城高等商業學校一覽』(1938~1940)

<표 9>에 따르면 조선인 학생의 입학자가 일본인 학생의 경우와 달리 증가하였음에도 입학경쟁률이 급격히 떨어진 것은 무엇보다 전시체제에 들어와 학자금 부족에 따른 결과로 보인다.¹⁵ 당시 조선인들의 구매력 감소가 일본인들의 경우보다 급격히 두드러진 경향과 비례하고 있었다.¹⁶ 특히 1939년 大旱害로 인한 흉작은 조선인 경제에 큰 타격을 미쳤으며 戰時農業統制에 따른 地主經濟의 악화가 두드러졌다.

한편, 조선인 학생의 증가에도 불구하고 입학생의 출신학교 편중은 좀처럼 개선되지 않았다. <표 10>은 경성고상 입학자가 일본인 위주의 중학교에 편중되어 있음을 보여준다.

<표 10> 1938~1943년 경성고상 입학자 학교 순위와 학생수

출신학교	경성중	용산중	경성상업	선린상	경기중	계(명)
학생수	101(14.6)	97(14.0)	57(8.2)	55(7.9)	29(4.2)	692

비고 : 京畿第一高普는 1938년 4월 京畿公立中學校(경기중)으로 교명을 변경

¹⁵ 전문학교 이전 단계라 할 고등보통학교의 경우, 전문학교나 대학까지 학자금을 지원해줄 수 있을 정도의 경제력이 있어야 했는데 전시체제에 들어와 가정경제가 어려워지면서 전문학교 과정을 포기하는 학생들이 속출했다. 고등보통학교의 학자금과 중도 자퇴에 관해서는 안홍선, 앞의 책, pp.291~301 참조.

¹⁶ 전시체제 생활경제에 관해서는 李松順, 「일제하 1930·40년대 농가경제의 추이와 농민생활」, 『역사문제연구』 8, 2002, pp.110~111; 李松順, 「일제말 전시체제하 '국민생활'의 강제와 그 실태」, 『한국사학보』 44, 2011, pp.313~326 참조.

<표 10>에 따르면 경성고보에 졸업생을 입학시킨 중등학교에서 일본인 위주의 중학교가 1위와 2위를 차지하고 있다. 다만 이전 시기와 달리 조선인 위주의 경기중학교가 5위 권 안에 들었다는 점은 당시 조선인 입학생의 증가와 매우 밀접하였음을 확인할 수 있다. 그러나 조선인 입학생의 증가가 졸업 이후 진로 선택에 긍정적으로 영향을 미쳤는가는 좀더 분석할 필요가 있다. 3장에서는 이런 요인들을 집중 분석할 것이다.

3. 졸업생의 진로와 民族別 層位

1) 제1시기(1921~1929)

경성고등상업학교 출신자들은 사회적 평판에 걸맞게 학력 엘리트로서 여타 전문학교에 비해 취직율이 매우 높았다. <표 11>은 경성고등학교 졸업자 회원 명부 가운데 1943년 근무 직장을 밝혀놓은 졸업생의 취직 현황을 추출한 것이다.¹⁷

<표 11> 1921~1929년 경성고등상업학교 졸업자의 취직 현황

단위 : 명

職群 民族	朝鮮 銀行	殖産 銀行	專賣 局	鐵道 國	滿鐵	一般 銀行	金融 組合	官公 署	敎員	民間 企業
조선인	0	3	0	1	0	10	1	1	5	6
일본인	17	21	9	23	12	31	23	28	33	137

출전 : 경성고등상업학교동창회 편, 『회원명부』, 1944

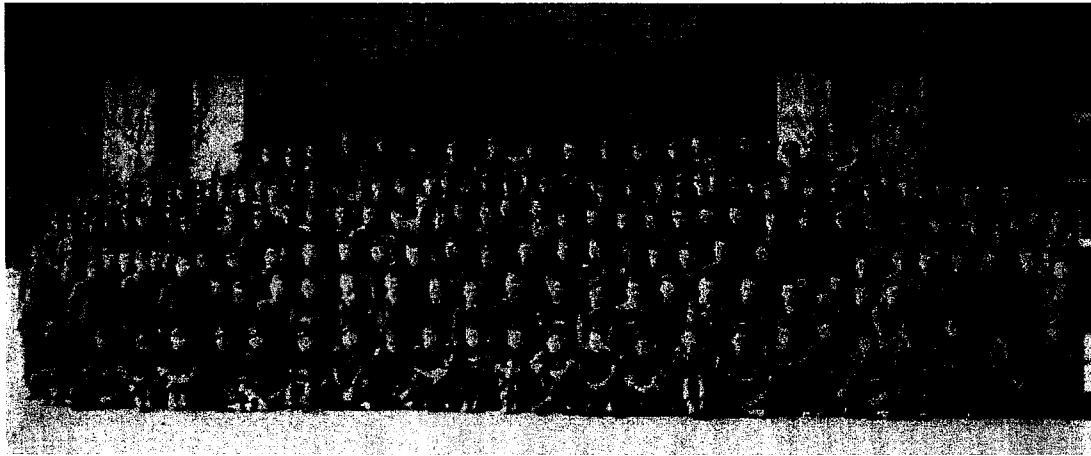
비고 : 조선인 41명, 일본인 457명 가운데 무직과 미상은 제외

<표 11>에 따르면 조선인 졸업생이 매우 적다고 하더라도 가장 선호하는 직장이라 할 조선은행, 식산은행, 전매국, 철도국, 만철 등에 취직한 수치가 매우 적다.¹⁸ 이들 직장의 대부분은 일본인 졸업생이 차지했기 때문이다. 이들 조선인은 일반은행 직원과 학교 교사로 취직한 수치가 매우 많다. 민간기업(상점 포함) 역시 일본인 졸업생에 비해

¹⁷ 학적부 일부에서 졸업 이후 첫직장을 기입하고 있다. 그러나 이런 경우는 극히 드문 사례로 대부분의 직장은 1944년에 발행한 『회원명부』에 의거하였다. 따라서 轉職 狀況은 추적할 수 없었다.

¹⁸ 당시 조선은행을 비롯하여 만철, 일반은행의 초봉이 높았다(前田一, 『サラリマン物語』, 東洋經濟出版部, 1928, pp.70~99. 정병욱, 앞의 논문, p.244 재인용).

절대적으로 적다. 그것은 무엇보다 조선은행을 비롯한 일본계 은행과 관공서가 조선인들을 의도적으로 배제했기 때문이다. 식산은행의 경우, 채용계획 수립 때부터 조선인과 일본인의 채용 비율을 2대 8로 정한 뒤, 해당 학교에 추천을 의뢰하였다.¹⁹ 경성고등상업학교의 경우, 제2시기와 제3시기를 염두에 두고 합산하더라도 그 비율은 2대 8이었다. 또 성적이 우수해도 연구가 없는 경우나 조선인은 불리했다.²⁰



<그림 1> 1925년 3월 경성고등상업학교 제5기생 졸업사진

출전 : <http://www.sdmagazine.kr/gr4d5/8>

이들 졸업생 중에 조선인 高乙會, 鄭秉昊, 裴基烈, 李定宰, 李世基는 1944년 현재 각각 朝鮮土木株式會社, 朝興銀行, 威從金融組合, 永保合名會社, 原州林山株式會社에서 근무하고 있다. 조선인 최초의 졸업생마저 유수의 은행과 관공서에 취직하지 못하고 금융조합과 일반기업에 취직하는 데 그쳤다.

2) 제2시기(1930~1937)

조선인들의 취직 경향은 제2시기에 들어와서도 크게 변하지 않았다. <표 11>은 1930~1937년 경성고상 졸업자의 취직 경향을 보여준다.

¹⁹ 정병욱, 앞의 논문, pp.232~237.

²⁰ 정병욱, 위의 논문, p.240.

<표 12> 1930-1937 경성고등상업학교 졸업자의 취직 현황

단위 : 명

職群 民族	朝鮮 銀行	殖産 銀行	專賣 局	鐵道 國	滿鐵	一般 銀行	金融 組合	官公 署	敎員	民間 企業
朝鮮人	1	6	0	1	0	19	11	13	7	35
日本人	8	12	8	23	4	50	23	67	22	206

출전 : 京城高等商業學校同窓會 編, 『會員名簿』, 1944

비고 : 조선인 119명, 일본인 535명 가운데 무직과 미상은 제외

<표 12>를 <표 11>과 비교하면 제12회(1932) 졸업생 金裕澤이 조선인 최초로 조선은행에 취직하였음을 확인할 수 있다. 그는 1911년 황해도 재령에서 출생하였으며 해주공립고등보통학교를 졸업한 뒤 경성고상을 거쳐 조선은행에 입사하였던 것이다.²¹ 특히 조선인 졸업생 6명이 이 기간에 식산은행에 취직하였는데 金慶鎭(제13회, 1933, 개성고보 출신) 宋甲一(제14회, 1934, 경성공립중 출신), 宋相仁(제15회, 1935, 선린상업학교), 白錦洛(제16회, 1936, 신의주상업학교 출신) 鄭遇昌(제17회, 전주고등보통학교 출신) 南周鎬(제17회, 1937, 원산상업학교 출신)이 그들이다. 이들 6인 가운데 송갑일을 제외하고는 학년 성적 상위 10퍼센트에 들었으며 특히 백금락은 학년 전체에서 1등을 차지하였다. 이들 5인은 우수한 성적으로 민족 차별의 장벽을 뚫은 것이다. 그러나 당시 일본인 직원 가운데 入營者가 많았음을 감안하면 일본인 공백을 채울 목적으로 채용한 것으로 볼 수 있다.

그 밖에 12회(1932) 졸업생으로 朴斗乘(三木邦彦, 創氏改名)을 꼽을 수 있다. 그는 朴承稷商店의 사장 박승직의 아들로 경성공립중학교를 거쳐 경성고상을 졸업한 뒤 아버지 상점에서 근무하였으며 오늘날 斗山그룹의 토대를 구축하였다.

3) 제3시기(1938~1943)

1937년 중일전쟁 후 전쟁이 격화되자 일본인 입영자가 급격하게 증가하면서 경성고

²¹ 金裕澤은 경성고상을 거쳐 九州帝國大學 法文學部를 卒業하였고 1938년에 조선은행에 입사하였다. 이후 1955에는 韓國銀行 총재로 취임하였다.

등상업학교 졸업자들의 진로에도 영향을 미쳤다. <표 13>은 이러한 변화를 잘 보여주고 있다.

<표 13> 1938-1943 경성고등상업학교 졸업자의 취직 현황

단위 : 명

職群 民族	朝鮮 銀行	殖産 銀行	專賣 局	鐵道 國	滿鐵	一般 銀行	金融 組合	官公 署	教員	民間 企業
朝鮮 人	5	21	1	0	0	33	9	6	12	58
日本 人	23	21	0	24	2	28	2	8	6	252

출전 : 京城高等商業學校同窓會 編, 『會員名簿』, 1944

비고 : 조선인 157명, 일본인 535명 가운데 무직과 미상은 제외

<표 13>을 <표 12>와 비교하면 조선인 졸업생이 조선은행에 다수가 취직하였음을 확인할 수 있다. 朴完善(제20회, 1940, 평북 용천, 인천공립상업학교, 密木義雄), 韓興洙(제23회, 1942, 경성부, 경기공립상업학교, 淸原興洙), 陳景得(제24회, 1943, 경성부, 久保景得), 德川榮一(제24회, 1942, 신의주, 신의주상업학교), 德川淸一(제24회, 1943, 충남 아산, 경기공립상업학교) 5명이 그들이다. 그런데 이들 가운데 德川淸一만 성적 상위 2퍼센트에 들 뿐 나머지 학생들은 상위 10퍼센트 바깥이다. 당시 일본인 직원들의 입영과 전사에 따른 공백을 급히 채우는 과정에서 인맥이 작용한 것으로 보인다.

이 기간 학적부에서 제21회(1941)로 졸업한 崔原仁圭(崔原仁圭)를 주목할 필요가 있다. 그는 1919년 경기도 廣州에서 태어났으며 普成高等普通學校를 거쳐 경성고상을 졸업한 뒤 1944년 당시 朝鮮生命保險株式會社에서 근무하였으며 해방후 延禧專門學校 商科를 거쳐 1947년 뉴욕대학교 상과대학에 편입학하고, 1949년 졸업하여 귀국하였다. 1949년 大韓交易公社 업무부장으로 들어가 1950년 대한민국 정부의 동남아시아 무역 사절단 대표로 파견되기도 했으며, 이사장까지 승진하였다. 이후 1954년 대한민국 3대 총선에 자유당 공천으로 경기도 광주에서 입후보하였으나 申翼熙에게 패배하여 낙선하였으나 1955년 李起鵬의 알선으로 국제연합 한국부흥위원회(UNKRA) 뉴욕 주재 한국 대표로 임명되었고, 같은해 제네바회담에 한국업저버로 참석하였으며, 1956년 外資廳長이 되었다. 1958년 대한민국 4대 총선에 다시 광주군에서 자유당 공천으로 입후보하여

당선되고, 9월에 교통부장관에 기용되었다. 1959년 3월에는 이기붕의 추천으로 내무부장관에 임명되었고, 1960년 3·15 부정선거를 총지휘하여 유혈사태를 야기하였다. 1960년 4·19 혁명으로 자유당정권이 무너지자, 3·15 부정선거를 총지휘한 원흉으로 지목받아 같은해 5월 3일 구속된 뒤 12월 21일 서울형무소에서 絞首되었다.

4. 餘言

일제하 식민지 조선의 고등교육은 경성제국대학을 정점으로 삼고 그 하위에 관립전문학교를 배치하고 다시 사립전문학교를 배치하는 구조로 이루어져 있다. 이러한 구조는 형식상으로는 近代 學歷主義와 序列主義를 근간으로 삼고 있지만 내용상으로는 이러한 구조에는 민족 차별의 원리가 작동되고 있었다. 경성고상의 경우에도 여타 관립전문학교와 마찬가지로였다. 특히 경성고상은 설립 당초부터 일본인 학교에서 출발하였다는 점에서 입학부터 졸업 이후 진로에 이르기까지 민족 차별의 원리가 관철되었다. 입학자와 졸업자의 민족별 현황, 일본인 위주의 중학교와 상업학교 출신자의 다수 합격자 배출, 졸업자의 직종 현황 등은 이러한 특징을 단적으로 보여준다.

그러나 이러한 구조에 입각하여 표출되는 민족별 취직 양상은 시기마다 조금씩 상이하였다. 1920년대에는 민족 차별 위주의 이러한 學歷主義가 강고하였으나 식민지 조선의 자본주의화와 함께 전시체제에 따른 상공업 인력에 대한 수요의 증가 속에서 入營과 戰死에 따른 일본인 졸업자의 공백으로 인해 새로운 국면을 맞았다. 극히 일부이기는 하지만 1930년대 말부터 경성고상 조선인 졸업자들이 일본인 졸업생과 마찬가지로 선호하던 조선은행과 식산은행 등에 취직하기 시작하였다. 일제가 원하지 않은 방향이었으나 전쟁의 악화에 따른 불가피한 결과였다. 조선인은 이런 기회를 활용하여 근대 엘리트로서 성장할 수 있는 기반을 구축할 수 있었다. 그러나 그들이 일제하에서 학습하고 경험하면서 體得한 思考 方式과 노하우가 현대 한국의 정치와 경제에 어떤 영향을 미쳤는지는 좀더 窮究할 필요가 있다. 朴斗秉은 훗날 한국의 대표적인 기업인 두산 그룹의 토대를 구축하는 하는 데 공헌하였지만 崔仁圭는 한국의 민주주의를 압살하는 데 앞장섰다.

끝으로 이번 발표는 분량의 제한으로 인해 경성고상 재학생의 성적을 미처 분석하지 못하였던 까닭에 이들 재학생의 성적과 졸업 이후 채용된 직장의 相關 關係를 해명하는 데는 이르지 못했다. 추후 별도의 원고를 통해 검토하고자 한다.

시가 대학교 경제경영연구소의 객원연구원인 이마이 아야노 입니다. 잘 부탁드립니다.

들어가며

구제 관립 고등상업학교, 약칭 ‘고상(高商)’은 19세기 후반부터 20세기 전반에 걸쳐 설치된 ‘식민지 제국 일본의 그리고 그 제국을 지탱한 교육기관’¹ 입니다. 고상을 분석할 때의 한 가지 관점으로 아베 야스나리(阿部安成) 교수는 각 학교의 동아시아에 대한 지향성을 파악할 필요성을 지적하고 있습니다.

이러한 지향성을 검토하기 위한 전제로 본 보고에서는 고상이 전개한 수업(修業)연한 3년의 ‘지나과(支那科)’와 ‘동아과(東亞科)’에 주목합니다. 1942년 11월 문부성 전문교육국이 편집·발행한 『전문학교 일람』에 따르면 지나과 또는 동아과를 설치한 고상은 야마구치(山口), 히코네(彦根), 오이타(大分), 다카오카(高岡), 타이베이(台北) 고상의 5개교라는 것을 알 수 있습니다. 야마구치와 히코네는 1939년에 지나과를 신설했으며 히코네만이 1941년에 이를 동아과로 개칭했습니다. 오이타와 다카오카는 1940년에 동아과를 같은 해 타이베이는 지나과를 신설했습니다. 이 5개교 모두 제2차 세계대전 동일한 시기에 창립 시부터 전개하던 본과를 제1부로 두고 지나와 동아과를 제2부로 마련하였습니다.

고상의 지나과와 동아과는 지금까지 주된 연구 대상으로 여겨지지 않았습니 다. 이에 저자는 아베 교수와 함께 문부성 소관의 야마구치, 히코네, 오이타, 다카오카 고상의 지나과와 동아과의 개요를 포함한 4개교 및 그 후계 교육 연구 기관이 편집 발행한 학교사를 통해 추적하였습니다. 각 학교사에는 각각 설치 경위와 개설 당시의 교육제도가 기재되어 있습니다. 반면 학과과정의 변천이나 학생들의 진로는 기록되어 있지 않습니다. 타이베이 고상을 살펴보면 지나과를 설치하기 이전인 1929년에 이미 학교사를 편집·발행하였습니다. 고상과 그 후계 교육 연구기관이 편집·발행한 학교사에서는 지나과나 동아과의 특색을 학과과정의 변천이나 각 학교와의 비교를 통해 검토되지 않았습니 다.

아베 교수는 이전부터 고상에 관한 자료의 남은 정도가 학교마다 다르기 때문에 개별 고상의 자료군을 상세히 분석하고 그것을 비교하여 고상의 전체를 생각할 필요가 있다고 지적해 왔습니 다. 이러한 방법을 바탕으로 본 보고에서는 먼저 학교사에 기재된 교육제도를 바탕으로 학과과정의 변천을 살펴보고 이를 비교한 뒤 5개교의 지나과와 동아과가 시대와 함께 어떠한 지역을 지향했는지를 검토합니다. 학과과정은 각 고상이 대략 연 1회 발행하던 『학교 일람』의 각 연도를 국립국회도서관 디지털 컬렉션을 통해 참조했습니다. 학과과정뿐 아니라 지나과나 동아과를 주도한 교관이나 설치된 조사 연구 기관도 함께 다룹니 다. 타이베이 고상을 둘러싼 문부성 직할 4개교 고상에서의 지나과와 동아과를 비교합니다. 마지막으로 히코네 고상을 대상으로 전 졸업생의 진로를 약 50년에 걸쳐 추적하고 그들의 동향을 제시하고자 합니다. 이 작업을 통해 5개교의 지나과와 동아과의 교육제도를 설치 순으로 상세히 검토하고 각각 동아시아를 향한 지향성을 검토하고자 합

¹ 아베 야스나리, 이마이 아야노 「연구노트 구제관립고등상업학교와 동아시아에 대한 소묘: 학과과정으로서의 중국과와 동아과」 『히코네논집』 제444호, 2025년7월, 2쪽.

니다. 또한 상세한 보고 내용은 디스커션 페이지를 참고해 주시기 바랍니다.

야마구치 고상

그럼 야마구치 고상의 지나과에 대해 알아 보도록 하겠습니다.

야마구치 고상이 1940년에 발행한 『야마구치 고등 상업학교 연혁사』 줄여서 『연혁사』에 의하면 야마구치 고상이 지나과의 설치를 신청하고 나서 인가될 때까지 약 7년이 걸렸습니다. 그 이유는 신청을 한 1932년은 ‘만주사변’에 의한 긴급 정책하에 있어 문부성이 신설을 허가하지 않았기 때문입니다. ‘지나사변’이 발발해 ‘현지에 활약해야 할 다수의 상업 전사’의 양성이 급선무가 되자 문부성은 지나과의 설치를 인정했습니다. 이러한 점에서 『연혁사』에서는 야마구치 고상 지나과에 관한 신청과 실패 양측의 교육 제도를 파악할 수 있어 다른 학교보다 지나과의 양상을 상세히 검토할 수 있습니다.

야마구치 고상이 지나과의 설치를 신청한 배경의 하나로 학교의 ‘사명’인 ‘동아의 경영’의 달성이 있었다고 생각됩니다. 『연혁사』에 의하면 야마구치 고상은 본과의 학과 과정에 제2외국어로서 지나어를 개설하거나 대륙 연구회를 결성하였습니다. 1916년에는 지나무역강습과를 개설하고 동아경제연구회도 설치하였습니다. 야마구치 고상은 창립 이래 ‘사명’에 근거해 동아시아에 대해 배우는 환경을 정비해 나가는 가운데 지나과의 설치도 목표로 했습니다.

그 환경을 만든 교관 중 한 명으로 기무라 마사타로(木村増太郎)를 들 수 있습니다. 『연혁사』에 의하면 기무라는 교토 제국대학 대학원을 나온 후에 대만 총독부에 촉탁으로서 근무해 야마구치 고상이 지나 무역 강습과를 신설함에 따라 초빙되었습니다. 기무라는 야마구치 고상을 잠시 떠나지만 다시 촉탁으로서 근무해 동아 경제 연구회나 지나 경제 연구회를 주도했습니다. 기무라는 지나과가 설치되기 전에 야마구치 고상에서 다시 물러나지만 그 신청을 추천하는 환경 조성에 기여한 한 사람이라고 할 수 있습니다.

『연혁사』를 읽는 한 야마구치 고상은 신청과 실패에 약간 의미가 다른 교육 방침을 내건 것을 알 수 있습니다. 신청시에 내건 교육 방침은 만주 사변과 ‘본교의 사명’을 감안해 ‘대지(對支) 상업상 중요한 교육을 실시해 지나 및 만몽에 활약하려고 하는 인재’를 양성하는 것입니다. 그 교육 방침에 정합한 학과 과정을 작성하고 있습니다. 한편, 지나과 개설 후에 야마구치 고상이 내건 교육 방침은 현지에 가지 않아도 ‘지나만몽’에 관련되는 업무를 수행하는 인재 양성이었습니다.

『연혁사』에 기재된 개강 학과목을 보면 ‘동양’이라는 이름을 단 학과목이 눈에 띕니다.² 야마구치 고상은 신청시에 응시한 ‘지나 만몽’보다 넓은 범위의 지역에 대해서 학생에게 학습시키고자 했다고 볼 수 있습니다. 다만 야마구치 고상이 동아시아로 눈을 돌리면서도 왜 학과명을 지나과로 했는지 또 동아과로 개칭하지 않았는지는 불분명합니다.

야마구치 고상의 『학교 일람』을 보면 1942년도에 학과 과정의 개정을 확인할 수 있습니다. 반노 테츠야(坂野鉄也) 교수에 의하면, 각 고상이 1942년도에 일제히 학과 과정

² 이하, ‘동양’, ‘대동아공영권’, ‘남양’의 범위는 다음 자료를 참고하였다. 『동양사연구문헌유목』 쇼와17-18년도, 동양학문헌센터(교토대학 인문과학연구소 부속), 남양단체연합회, 1949년, 히로세 조케이 『대동아경국지』 일본출판사, 1943년, 이들 자료는 모두 국립국회도서관 디지털 컬렉션을 참고하였으며 최종 열람일은 2025년 10월 24일이다.

을 개정했습니다.³ 그것은 고등 상업 학교 교수 요강 조사 위원회가 전시 체제하의 교육 방침으로서 책정한 ‘고등 상업 학교 표준 교수 요강 편성 요지’ 줄여서 ‘요지’에 준거하기 위해서입니다. 위원회는 지나과와 동아과에 대해 ‘요지’에 근거한 개정을 요구했습니다.

야마구치 고상은 ‘동양’이 아닌 ‘동아’를 붙인 학과목을 학과 과정에 마련해 ‘요지’에 입각한 개정을 실시했습니다. ‘동아’를 붙인 학과목은 야마구치 고상이 지나과나 동아과에서 유일하게 개정에 의해 도입한 ‘분과제’의 ‘특수 학과목’에서도 볼 수 있습니다. ‘분과제’란 각 고상이 사정에 따라 적당한 ‘특수 학과목’을 정하는 제도입니다. 마찬가지로 ‘분과제’를 도입한 본과와 달리 지나과는 ‘동아’를 붙이는 ‘특수학 과목’을 배정했습니다. 야마구치 고상의 지나과는 ‘요지’를 근거로 하여 ‘대동아 공영권’ 지역을 의식하게 되었다고 할 수 있습니다.

개정에 의해 외국어 학과목에도 ‘요지’에 입각한 변화를 볼 수 있었습니다. 야마구치 고상은 전 과정에서 지나어와 영어를 필수 학과목으로서 개강했습니다만 개정 후에는 제1외국어로서 지나어를, 제2외국어로서 영어, 또한 서반아어(西班牙語, 스페인어) 및 마래어로부터 선택할 수 있도록 고쳤습니다. 서반아어는 ‘지나사변’ 이후 더욱 고조되어 온 중남미 시장에 대한 사회의 관심을 받아⁴ 마래어는 ‘대동아공영권’ 지역에 대한 의식에서 마련된 것으로 생각됩니다.

그 중에서도 서반아어를 외국어 학과목으로서 준비한 지나과와 동아과는 야마구치 고상 뿐이었습니다. 그 배경에는 야마구치 고상이 본과에 대해 이미 서반아어를 개강해 담당 교관이 재직하고 있던 것을 들 수 있습니다. 지나과는 학교의 교육 자원과 사회의 수요에 응해 새로운 어학을 준비했다고 생각됩니다.

지금까지 야마구치 고상에 있어서의 지나과의 교육 제도에 대해서 『연혁사』에 기재된 신청과 실태와의 비교, 개설전의 조사 연구에 관계된 교관이나 학과 과정의 변천으로부터 검토했습니다. 야마구치 고상의 지나과가 스스로의 교육 자원을 근거로 하면서 사회의 수요에 따라 중시하는 지역을 변화시킴으로써 ‘동아의 경영’이라고 하는 사명의 달성을 강화하기 위한 교육을 실시하려고 한 것이 밝혀졌습니다.

히코네 고상

히코네 고상의 학과 과정에는 교육 방침이 철저하지 않은 일면이 있었습니다. 그 내용을 설명하기에 앞서 학교사의 기술을 살펴보도록 하겠습니다.

히코네 고상은 자체적으로 학교사를 편찬하지 않았습니다. 이에 후계 시가대학 경제학부가 편찬한 『능수(陵水)35년』을 읽으면 지나과의 교육 방침이나 학과 과정이 뒤에 개칭되는 동아과의 것으로서 기재되어 있음을 알게 됩니다. 한편으로 그 다음에 편찬된 『능수60년사』 약칭 『60년사』에는 지나과 자체의 교육제도가 기재되었습니다.

『60년사』에 의하면 지나과의 교육 방침은 ‘동아를 정확하게 인식해 그 땅에 발견되어야 할 동양인의 새로운 발전 방향에 대해 정확한 판단력을 기른다’였습니다. 히코네 고상의 지나과는 학생의 인식력과 판단력의 향상도 중시했습니다. 야마구치 고상과 히코

³ 반노 테츠야 「관립고등상업학교학과과정의 변천:오이타 고등상업학교를 사례로」 『시가대학경제학부Working Paper Series』 No.306, 2021년 8월, 34-39쪽.

⁴ 반노 테츠야 「구제고등상업학교의 스페인어 교육: 야마구치 고등상업학교의 사례」 『시가대학경제학부Working Paper Series』 No.148, 2011년 3월.

네 고상은 같은 지나과를 설치하면서도 독자적인 방침을 내걸고 있었다는 것을 알 수 있습니다.

히코네 고상에 있어서 지나과의 개설을 추진한 교관의 한 사람으로 2대째 교장인 야노 쓰라키(矢野貫城)을 들 수 있습니다. 야노는 1927년 8월에 교장으로 히코네 고상에 부임했습니다. 지나과 개설시에 교장을 맡고 있던 야노는 '동아의 경영' 이라고 하는 사명을 가지는 야마구치 고상에서 학생으로서 배웠습니다. 1908년 3월에 졸업하면 그는 모교에서 상업 지리와 식민 정책을 가르치기 시작합니다. 동료로는 앞서 등장한 기무라 마사타로가 있습니다. 야마구치 고상에서 배우고 가르친 야노가 교장을 맡고 있었기 때문에 히코네 고상은 지나과를 개설했을 가능성이 있습니다.

『60년사』에는 지나과가 개강한 학과목명으로서 '지나', '동아', '만몽' 외 '소비에트' 나 '남양'이라는 이름을 붙인 여러 분야의 과목들이 열거되어 있습니다. 히코네 고상은 동아시아 외에 '소비에트' 나 '남양' 까지도 시야에 넣어 그러한 지역에 관한 여러 분야의 지식을 품에 익힘으로써 인식력과 판단력을 높이려 했다고 생각됩니다.

『학교 일람』에서 학과 과정을 보면 『60년사』에서 소개된 학과목에 선택 학과목이 포함되는 것을 알 수 있습니다. 앞서 제시한 '소비에트' 나 '남양' 이 붙은 학과목은 선택 학과목이었습니다. 학생은 3학년 다음 2학기에 주 4시간 분량의 수업을 선택할 수 있었습니다. 선택 과목 제도를 도입한 지나과나 동아과는 히코네 고상 뿐입니다. 학과 과정에서 보이는 광역성은 지나과나 동아과에서 유일하게 히코네 고상에만 도입된 선택 과목 제도에 의해서 보완되었다고 할 수 있습니다.

그 광역성에는 상업 지리를 전문으로 하는 교관 다나카 슈사쿠(田中秀作)의 존재가 영향을 주었을 가능성이 있습니다. 다나카는 교토제국대학 문학부 사학과를 졸업하고 남만주철도주식회사에 입사했습니다.⁵ 그 후 1923년 히코네 고상에 부임하여 상업지리, 상업정책, 해외경제사정 등을 가르쳤습니다. 강의 외 학생이나 졸업생으로 조직된 해외사정연구회도 지도했습니다. 다나카는 그 회지의 『해외사정연구』에 동아시아 외에 '남양', 동아프리카, 터키, 브라질에 관한 연구 발표를 하고 있습니다. 또한 지나과 학생 전원이 가입하도록 요구 받은 동아사정연구회도 지도했습니다.⁶ 다양한 지역에 대해 연구하고 있는 다나카가 재직하고 있던 것으로 히코네 고상은 동아시아를 중심으로 여러 지역을 배치한 학과 과정을 마련할 수 있었던 가능성이 있습니다.

그러나 히코네 고상은 지나과 제1회 학생들이 제3학년이 되는 1941년도에 동아과로의 개칭에 맞춰 학과과정을 개정하면서 선택 과목 제도도 폐지하였습니다. 결국 히코네 고상은 선택 과목 제도는 실제로 실시되지 못했습니다.

새로운 과정에서는 이전 과정에 비해 '동아'를 붙인 과목이 다수를 차지했습니다. 히코네 고상은 다른 학교들과 마찬가지로 다음 해인 1942년도에도 학과 과정을 개정했지만 전년도와 거의 동일한 과목 구성을 보였습니다. 이를 통해 히코네 고상이 다른 학교 보다 앞서 '요지'를 반영하여 주로 '동아'를 전면에 내세우는 학과 과정을 실시하고 있었음을 알 수 있습니다. 또한 '요지'에는 선택 과목 제도의 폐지가 명기되어 있습니다. 히코

⁵ 다나카 슈사쿠 교수 교회 축하회편 『지리학 논문집:다나카 슈사쿠 교수 교회 기념』 야나기하라 서점, 1956년, 3-4쪽, 시바타 요이치(柴田陽一) 「『만주국』에 있어서 지리학자와 그 활동의 특징」 이시카와 요시히로(石川禎浩)편 『중국사회주의문화연구』 교토대학인문학연구소, 2010년5월, 299-301쪽.

⁶ 『히코네 고등 상업학교 조사과 요람』 히코네 고등 상업학교 조사과, 1940년 3월, 16쪽, 시가대학 경제 경영 연구소 디지털 아카이브 참조, 2025년 8월 8일 최종 열람.

네 고상이 1941년도에 선택 과목 제도를 폐지한 배경에는 ‘요지’에 따른 개정이 있었다고 생각됩니다.

1941년도의 새로운 과정에 있어서 주목해야 할 점은 남양 경제 사정이 학과목으로서 마련되어 있지 않음에도 불구하고, 제3 학년의 필수 학과목으로서 그 개강이 계획되었다는 것입니다. 강의 계획이 기록된 『교수요목』 1941년도판을 보면 다나카에 의한 남양 경제 사정이 학과목으로서 개재되고 있었습니다.

그 강의 계획은 다나카가 1941년도부터 동아과 제2학년 제2학기에 담당하던 동아지리와 동일했습니다. 이로써 지나과와 동아과의 학생 전원이 다나카가 실시하는 남양 경제 사정에 관한 강의를 듣도록 하는 체제가 마련되었습니다.

『60년사』의 기술과 학과 과정을 대조해 그 변천을 타교와 비교하면 히코네 고상의 지나과는 당초 내건 교육 방침을 학과 과정에 반영하면서도 동아과로의 개칭에 수반하는 ‘요지’에 입각한 개정에 의해 그 실시에 이르러서는 불철저한 일면이 있었다고 말할 수 있습니다. 1941년도 새로운 과정에서 히코네 고상은 타교에 앞서 ‘동아’를 단 학과목을 주로 준비했습니다. 『교수요목』이나 『해외 사정 연구』를 전망하는 것으로 상업 지리를 전문으로 해 동아시아에서의 근무 경험을 가진 다나카가 학생 전원에게 새로운 과정에는 없던 남양 경제 사정을 가르쳤다는 사실을 알 수 있습니다. 이를 통해 히코네 고상의 지나과는 학생들의 의식을 ‘대동아공영권’ 지역 가운데서도 특히 ‘남양’으로 향하게 하려 했음이 밝혀졌습니다.

오이타 고상

다음으로 살펴볼 오이타 고상의 동아과는 4교와 다른 특징을 가지는 학과과정을 전개했습니다.

오이타 고상이 1942년에 편집 발행한 『오이타 고등 상업학교 20년사』 줄여서 『20년사』에 의하면 동아과의 교육 방침은 ‘주로 동아에서 활동하는 인사’ 양성이며 본과와 같이 ‘상업상 수요의 교육을 실시한다’는 것이기도 했습니다. 『20년사』에는 오이타 고상의 동아과가 본과와 같은 학과목과 ‘동아’, ‘지나’, ‘만주’를 의식한 학과목을 전개한 것이 강조되고 있습니다.

『학교 일람』을 보면 『20년사』에는 지적되지 않은 학과 과정의 특징을 알 수 있습니다. 그것은 동아시아 사정을 의식한 학과목과 짝을 이루는 국제 사정을 의식한 학과목이 복수 준비된 것입니다. 예를 들면 동아 근세사와 세계 근세사, 동아 경제 사정과 세계 경제 사정, 동아법제와 국제법을 들 수 있습니다. 타교의 지나과나 동아과에서도 이들 가운데 어느 한 학과목이 개설되기는 했으나 두 과목을 한 쌍으로 의식한 학교는 오이타 고상에 한정됩니다. 앞서 제시한 바와 같이 오이타 고상의 동아과는 ‘상업상 필요한 교육을 실시한다’는 점도 교육 방침으로서 내세우고 있었습니다. 같은 분야에서 동아시아 사정과 국제 사정이라는 양측의 지식을 모두 중시했다고 할 수 있습니다. 이것이 오이타 고상 동아과의 특징입니다.

동아시아만을 지향하지 않는 모습은 동아과 개설 이후 마련된 경제연구실 업무에서도 찾아볼 수 있습니다. 연구실은 기존의 각 조사 연구 업무를 계승했지만 새롭게 동아시아를 대상으로 하는 부문을 두거나 중시하는 일은 없었습니다.

1942년도 개정에서는 ‘요지’에 입각해 ‘동아’라고 붙는 학과목이 전과정보다 정리·통합되면서도 마련되었습니다. 그 새로운 과정의 특징으로는 제2외국어의 종류가 많다는

것을 들 수 있습니다. 이전 과정에서는 제1외국어가 지나어, 제2외국어가 영어였지만 개정 후에는 ‘요지’로 꼽힌 외국어학 과목 중 영어, 불란서어, 러시아어, 몽고어, 화란어 및 마래어가 중 하나를 제2외국어로 선택할 수 있게 되었습니다.

오이타 고상의 동창회가 1943년에 발행한 『개교 20주년 동아과 완성 기념지(동창회지 제36호(특집호))』에서는 모리 분자부로(森文三郎) 교장이 ‘북시베리아’나 ‘남양’을 의식한 교육의 필요성을 말하고 있습니다. 담당 교관이 정해지지 않은 언어는 있습니다만 오이타 고상의 동아과는 제2외국어를 준비함으로써 그러한 지역에 주목하도록 학생들에게 제시했다고 할 수 있습니다.

오이타 고상의 동창회가 1942년에 발행한 『오이타 고등 상업학교 본과 제2부(동아과) 개설지』에 의하면 모리가 오이타 고상의 동아과 개설을 기획하고 학과 과정을 책정한 인물이었습니다. 모리는 도쿄제국대학 법과대학 경제학과를 졸업하고 ‘청(淸)·한(韓) 방면에 활동해야 할 인재’⁷ 양성을 목적으로 한 나가사키 고상에서 상업지리나 경제학을 담당했습니다. 1922년에 오이타 고상에 착임한 이후 다른 곳으로 옮기지 않고 동아과의 신설을 맞이했습니다. 이 책에서는 오이타 고상이 지리적으로 봐도 중국 대륙에 가깝기 때문에 동아과 설치를 목표로 삼았다고 기록되어 있습니다. 나가사키 고상을 거쳐 오이타 고상에서 오래 재직하며 학교의 특징을 아는 모리가 동아과를 만들어 발전시켜 나갔다고 할 수 있습니다.

학과 과정을 검토해보면 오이타 고상의 동아과가 같은 분야에서 동아시아 사정과 국제사정을 모두 초기부터 중시하고 있었다는 특징을 알 수 있었습니다. 그것은 고상인 이상 상업과 관련된 인재를 양성하기 위함 이었다고 짐작할 수 있습니다. 동창회의 간행물과 학과과정의 변천을 합해 보면 오이타 고상의 동아과는 ‘요지’에 입각해 ‘동아’에 관한 학과목을 주로 전개하는 동시에 제2외국어에 복수 언어를 설치하는 것으로 학생의 의식을 동아시아와 함께 ‘북시베리아’나 ‘남양’에도 향하게 하려고 했다고 생각됩니다.

다카오카 고상

다음으로 살펴볼 다카오카 고상의 동아과는 일관된 교육을 전개했다는 특징이 있습니다. 다카오카 고상은 자체의 학교사를 편찬하지 않았기 때문에 후계인 도야마 대학 경제학부가 편찬한 『도야마 대학 경제학부 50년사』 줄여서 『50년사』를 통해 동아과의 교육 제도를 살펴보고자 합니다.

『50년사』에 따르면 다카오카 고상은 학교의 지리적 특수성과 러시아어를 지도할 수 있는 환경에 있었기 때문에 “‘만주’나 중국은 물론 맞은편의 러시아까지 포함해 연구대상”으로 삼는다고 하며 ‘국가 및 지역사회에 공헌’한다는 점을 교육 방침으로 내세웠습니다. 다카오카 고상은 창립 이래 일본해 연안에 위치한 고상으로서 본과에서 제2외국어의 하나로 러시아어를 개설했습니다. 『50년사』를 읽어보면 이 학교는 동아과에 대해서도 동아시아 뿐만 아니라 러시아까지 염두에 둔 교육방침을 마련했음을 알 수 있습니다.

그 방침을 동아과가 교육제도에 어떻게 반영했는지는 『50년사』만으로는 파악할 수

⁷ 나가사키 고등 상업 학교편 『나가사키 고등 상업 학교 30년사』 나가사키 고등 상업 학교, 1935년, 국립 국회 도서관 디지털 컬렉션 참조, 2025년 10월 31일 최종 열람.

없습니다. 그래서 『학교일람』에서 학과 과정을 보면 다른 지나과나 동아과와는 다른 특징을 발견하게 됩니다. 그것은 필수 학과목으로서 만주 사정과 소비에트 연방 사정을 지나과나 동아과에서 유일하게 준비하고 있는 점입니다. 다카오카 고상의 동아과는 교육방침대로의 학과과정을 책정했다고 할 수 있습니다.

만주 사정과 소비에트연방 사정 가운데 후자의 담당 교관은 확인됩니다. 그 인물은 동아과의 개설과 학과 과정 작성에 관여한 다카타 겐세이(高田源清)입니다. 『50년사』에 따르면 다카다는 1930년 3월 다카오카 고상을 졸업하고 규슈제국대학 법문학부 법과로 진학한 뒤 법학자로서 동 대학 조수를 거쳐 1935년에 모교인 다카오카 고상에 부임하였습니다. 다카다가 발표한 연구 논문의 제목을 살펴보면, 1938년부터 ‘만주’나 ‘지나’라는 지역명이 들어있다는 것을 알 수 있습니다.⁸ 소비에트연방에 관한 연구 논문을 발표한 바는 없지만 다카오카 고상을 졸업해 모교의 교관이 된 다카다는 자신의 관심을 동아시아로 확장해 가면서 동아과의 개설을 추진하였고 소비에트연방 사정도 담당하였습니다.

본과와 마찬가지로 제2외국어로 러시아어를 개설한 점 또한 다카오카 고상 동아과의 특징입니다. 제2외국어로 러시아어를 설정한 오이타 고상의 경우 그 담당 교관을 자료에서 확인할 수 없습니다. 그러나 다카오카 고상은 『학교일람』에 해당 담당 교관이 기재되어 있어 러시아어를 개설하였다고 판단할 수 있습니다.

1942년도 개정을 거친 이후에도 다카오카 고상은 지금까지의 동아과 교육체제를 유지한 것으로 보입니다. 동교는 ‘요지’에 따라 학과목을 정리하면서도 만주 사정의 교과를 계속 개설하고 제1외국어로 지나어와 함께 러시아어를 개설하였습니다. 또한 ‘요지’에서 개설 교과목으로 명기되지 않은 소비에트 연방 정세를 동아경제지리 및 소비에트연방 사정으로 남겨두었습니다. 다카오카 고상의 동아과는 ‘요지’를 따르면서도 스스로 설정할 수 있었던 여지 속에서 기존과 동일한 특징을 학과과정 속에 유지한 것입니다.⁹

다카오카 고상은 동아시아뿐 아니라 ‘러시아’와 ‘만주’까지도 의식한 교육을 일관되게 동아과에서 전개하였습니다. 이러한 교육체제를 구축하고 유지해 온 교원 가운데 한 명이 다카오카 고상을 졸업한 뒤 모교에 부임한 다카다였던 것으로 보입니다. 타교의 지나과와 동아과의 학과과정과 비교해 보면 동교는 1942년도 개정 이후에도 ‘요지’에서 벗어나지 않는 범위에서 교육체제를 유지하였습니다. 즉, 다카오카 고상의 동아과는 ‘러시아’와 ‘만주’를 포함하는 지역을 시야에 둔 교육을 계속 이어갔다고 할 수 있습니다.

타이베이 고상

다음으로 타이베이 고상의 지나과를 살펴보기에 앞서 본과에 관한 연구에 수록되어 있던 지나과의 학과과정을 문부성 직할 4개교와 비교·검토하고자 합니다.

타이베이 고상은 1919년 대만총독부 고등상업학교라는 명칭으로 설립되었습니다. 1926년 타이난시에 타이난 고상이 신설되면서 타이베이 고상으로 개칭되었습니다. 대만

⁸ 「다카타 겐세이(高田源清)교수 환력 축하 논문집」 『법정연구』 제36권 제2호, 규슈대학교 법정학회, 1970년 12월, 1-15쪽을 참고.

⁹ 오타루 고상은 지나과나 동아과를 신설하지는 않았지만 블라디보스토크를 염두에 둔 교육을 지향하며 일관되게 선택 외국어로 러시아어를 개설하고 조사연구를 진행하였다. 한편, 다카오카 고상의 동아과에서 준비한 소비에트 연방 사정은 학과 과정을 살펴보는 한 오타루 고상의 본과에서는 교과목으로 설정되지 않았다.

섬 내와 '남지남양(南支南洋)'에서 활약할 인재를 양성한다는 목적 하에 '지나에서 상업에 종사할 남자에게 필요한 고등교육을 실시한다'¹⁰는 취지로, 타이베이 고상은 '지나'에 초점을 맞춘 지나과를 신설하였습니다. 1941년에는 동아경제전수과도 개설하였으며 1942년에는 남양과 설치도 계획되었습니다.¹¹

요코이 카오리(横井香織) 준교수의 저서에 따르면 지나과에서는 중국 대륙의 여러 정세에 대해 중점적으로 교육했다고 합니다. 저서에 게재된 1940년도 본과와 지나과의 학과과정을 비교하면 지적된 대로 '남방 지역 진출을 전제'로한 본과보다도 지나과에는 '지나'라는 이름이 붙은 학과목이 많음을 알 수 있습니다.

한편, '지나' 외에도 '남양', '동아', '동양'을 붙인 학과목도 설치되어 있음을 확인할 수 있습니다. 타이베이 고상의 지나과는 동아시아에 대한 넓은 시야를 갖췄다고 할 수 있습니다. 특히, 필수 교과목으로 '남양'을 붙인 학과목을 개설한 지나과나 동아과는 타이베이 고상 뿐이었습니다.

요코이 준교수에 따르면 타이베이 고상은 창립 시점부터 남진(南進) 교육을 전개하였습니다. 지나과는 '지나에서 상업에 종사'하기 위한 교육을 내세우면서도 자신들의 목적을 달성하기 위해 필수 교과목으로 모든 학생이 '남양'에 대해 학습했다고 볼 수 있습니다.

타이베이 고상의 지나과에서 지역명을 붙인 학과목의 개설 수는 문부성 직할 4개교의 지나과나 동아과와 거의 동일합니다. 또한, 타이베이 고상의 본과는 문부성 직할 4개교의 학과과정과 다르다고 요코이 준교수는 언급하고 있지만 학과목명을 살펴보는 한 지나과에 대해서는 유사성을 확인할 수 있습니다. 학과과정 비교를 통해 타이베이 고상 지나과는 '남양'을 중시하면서도 동아시아에 대해 넓은 시야를 가지며 문부성 직할 지나과나 동아과와 유사한 교육을 실시하고 있었음을 알 수 있습니다.

맺음말: 히코네 고상 동아과 학생의 진로 추적

마지막으로 진로 동향을 제시하고자 합니다. 지나과와 동아과 학생의 진로 동향은 학교사에 거의 기록되어 있지 않습니다. 따라서 히코네 고상 동아과를 졸업한 전체 학생의 약 50년간의 동향을 본과생과 비교하며 대략적인 경향을 서술하고자 합니다. 이 진로 추적 조사는 매우 많은 시간과 노력이 드는 작업으로 현 시점에서는 히코네 고상만을 대상으로 하고 있습니다.

히코네 고상의 동아과 졸업생은 제1회생부터 제5회생까지 262명입니다.¹² 학년별로 대략 50~55명이 졸업하였습니다.

¹⁰ 관보 1940년 2월 28일, 국립국회도서관 디지털 컬렉션 참조, 2025년 11월 26일 최종 열람.

¹¹ 요코이 카오리 『제국 일본의 아시아 인식: 통치하 대만의 조사와 인재육성』 이와타. 서원, 2018년, 129-131쪽. 이하, 타이베이 고상에 대해서는 동서를 참조.

¹² 졸업 인원과 그 시기는 제1회생이 1941년 12월, 제2회생이 1942년 9월, 제3회생이 1943년 9월, 제4회생이 1944년 9월, 제5회생이 1945년 9월이다. 후술한 바와 같이 1944년 3월 28일 칙령 제 165호(관보 3월 29일 게재, 4월 1일 시행)와 1944년 4월 5일 문부성령 제18호(관보 동일 날짜, 같은 달 1일 적용)에 따라 고등상업학교는 폐지되어 이들은 경제전문학교로 설치되었다. 히코네 고상도 폐지되고 히코네 경제전문학교로 본과와 동아과를 설치하였다. 제4,5회생은 히코네 경제전문학교체제에서 졸업한 것이지만 본 보고에서는 대상에 포함한다.

활용한 자료는 히코네 고상의 동창회인 능수회(陵水會)가 1926년부터 1942년까지 연 1회 이상, 또한 1946년 이후에는 불정기적으로 발행한 『능수회원 명부』와 능수회가 히코네 고상 때 발행한 회보 『능수(陵水)』입니다. 그리고 학생이 졸업한 뒤 약 50년이 지난 1993년 까지 발행 당시의 근무처 기업명과 주소, 현주소, 직위 정보를 수집하였습니다. 또한 자료에 기재되지 않은 기업의 업종도 조사하였습니다. 다만, 자료 사정상 제3회생부터 제5회생까지 졸업 직후 진로와 그들의 1944년부터 45년까지의 동향은 파악하지 못했습니다.

먼저, 졸업 직후 진로가 확인 가능한 제1, 2회생을 살펴보겠습니다. 이들이 취업한 기업의 업종은 제조업이 가장 많았고 다음으로 도매·소매업이 뒤를 이었습니다. 같은 시기 졸업한 본과생의 취업 기업도 유사한 경향을 보여 모두 전시(戰時)의 영향을 받았음을 알 수 있습니다. 이들 대부분은 학교에 채용 신청을 해온 기업에 취업하였습니다. 동아과 학생들은 교육과정의 구분 없이 고상을 졸업하는 자로서 히코네 고상을 거쳐 전시 체제에서 필요한 산업에 편입되었다고 볼 수 있습니다.

학생 중 일부는 동아시아와 밀접히 관련된 기업에 취직한 자가 일정 수 있습니다. 기업명에 동아시아 지역명이 포함된 기업에 취업한 사람은 제1회생이 10명, 제2회생이 15명입니다. 같은 시기에 졸업한 본과생보다 많은 인원입니다. 졸업 직후 현주소가 신경(新京)나 봉천(奉天)인 사람도 5명이 있었습니다. 동아과는 본과에 비해 동아시아 관련 업무를 수행할 인재를 양성했다고 할 수 있습니다.

그들이 취업한 기업에는 국책 회사도 포함되어 있습니다. 같은 시기 졸업한 본과생 보다도 많은 인원입니다. 관립 실업전문학교에 생긴 동아과 중 하나로 히코네 고상은 동아시아를 전문으로 배운 학생 일부를 국가 방침에 따라 식민지 개발을 수행하는 기업으로 진출시키고 있었습니다.

제1, 2회생이 세월이 흐르면서 어떻게 이동했는지를 보면 동아시아와 밀접하게 관련된 기업에 취업한 사람들은 1946년 이후 일본으로 돌아와 2직, 3직으로 전환하는 경향이 있었습니다. 반면, 초기에 일본 국내 기업에 취업한 사람은 동일 기업에 머물렀습니다.

다음으로 제3회생부터 제5회생까지의 진로 동향을 살펴보겠습니다. 이들의 동향은 1946년 이후 정보만 확인 가능합니다. 1946년 근무처를 보면 동아시아와 밀접한 기업은 없으며 각자 다양한 업종의 기업에 근무하고 있음을 알 수 있습니다. 이는 제1, 2회생의 졸업 직후 상황과는 확연히 다릅니다. 시간이 흘러도 전직을 반복하는 경우는 거의 없었습니다. 사회적으로 이름이 알려진 폭넓은 업종의 기업에 계속 근무하는 모습은 본과생 전체의 경향과 유사합니다.

동아과 학생 전체를 보면 시간이 지나면서 외국과 교섭하는 부서로 이동하거나 미국, 캐나다 등에서 근무하는 사람도 있습니다. 일본 사회의 국제화와 함께 동아과 졸업생 다수가 무역 업무를 수행하게 된 것으로 보입니다. 또한 고등상업학교를 졸업한 사람으로서 기업이나 조직을 총괄하는 직위에 오른 졸업생도 있었습니다.

히코네 고상 동아과 학생들은 동아시아를 중심으로 한 '동아'를 공부하며 졸업할 무렵에는 전시체제하 사회가 필요로 하는 곳에 편입되었 겠습니다. 그들 가운데 일부는 식민지에서 국책을 수행하는 기업이나 그 지역과 밀접하게 관련된 업무에 종사한 이들도 있습니다. 그러나 동아과 학생이 히코네 고상을 졸업한 직후에는 전시 체제가 종료되어 자연스럽게 직업을 바꿔야 하는 경우도 있었습니다.

각자가 일정한 장소에서 근속하게 되면 고상 출신으로서 해외에 부임하거나 무역 업무를 담당하고 또한 조직이나 기업을 이끄는 졸업생들도 있었습니다. 히코네 고상의 동아

과의 동향이 다른 졸업생들과 공통되는지를 검토하기 위해서는 각 학교가 가진 교육 자원과 지리적 조건에 따라 지향한 지역이 달랐기 때문에 각 학교별로 졸업생을 추적할 필요가 있습니다.

모든 고상은 1944년 4월에 폐지되고 경제전문학교가 설치되었습니다. 5개교의 지나과와 동아과는 경제전문학교의 동아과로 통일되었습니다. 문부성 직할의 경제전문학교는 전문학교 규정에 따라 운영되었음이 확인됩니다. 동아과의 학과과정은 모두 동일 해졌고 고상 시절에 존재하던 각 학교의 특색은 소멸되었습니다.

1946년 4월에는 히코네, 오이타 경제전문학교의 동아과가 폐지되었으며 다카오카는 경제전문학교 자체가 없어졌습니다. 야마구치 경제전문학교만이 동아과를 동양경제과로 개칭하여 지나과나 동아과의 계보를 이어갑니다.

아베 교수가 지적하듯이 그 후신인 야마구치 대학교 경제학부에서는 ‘동아’를 명칭으로 한 동아경제연구소나 야마구치 대학교 동아경제학회가 현재도 기능하고 있으며 『동아경제연구』와 『동아경제연구총서』를 발행하고 있습니다. 또한, 시가대학교 경제학부를 보면 『히코네 고등상업학교 도서과 지나관계 도서 목록』과 같은 지나과와 동아과에 관한 자료가 남아 있습니다. 각각 ‘동아’라는 명칭을 계승하거나 관련 자료가 남아있는 하지만 학교사에서는 고상의 지나과와 동아과가 충분히 기재되거나 평가되지 않고 있습니다.

지나과와 동아과가 규정에서 사라졌더라도 그러한 교육을 받은 학생들은 각자 취업처를 정하고 고등상업학교 출신으로서 경력을 쌓아갔습니다. 고상을 고찰하는 데 있어서는 각 후계 교육연구기관에 현재 어떤 자료가 남아 있는지 조사하고 이를 바탕으로 가능한 한의 기간에 걸쳐 개별 학교를 상세하게 비교하여 고상 전체의 모습을 파악하는 작업이 요구됩니다.

번역-이승현

식민지 조선인 여성 엘리트의 해방 이후

-여자고등사범학교 유학생을 중심으로-

金廣珪(韓國教育課程評價院)

I. 序言

여자고등사범학교(이하 여고사)란 근대 일본 정부가 여성 중등교원을 양성할 목적으로 설립·운영한 관립 고등교육기관으로서, 東京女子高等師範學校(이하 도쿄여고사), 奈良女子高等師範學校(이하 나라여고사) 2교가 있었다. 도쿄여고사의 역사는 1886년 문부성이 도쿄사범학교를 도쿄고등사범학교로 변경할 때, 여자부를 '고등사범학교 여자부'로 변경하면서부터 시작된다. '고등사범학교 여자부'는 1890년 '여자고등사범학교'로 독립했다. 1908년 나라여고사가 개교했고, 이에 따라 既設 여고사는 도쿄여고사로 교명을 개칭했다. 이후 도쿄와 나라 두 여고사는 戰後 신학제에 따라 대학으로 개편되어 현재에 이르고 있다. 주지하듯이, 현재 일본의 お茶の水女子大学, 奈良女子大学이 각각 도쿄여고사, 나라여고사의 후신이다.

근대 일본의 학제 상 여자대학이 없었기 때문에 여고사는 전문학교에 해당했지만 여성에게는 사실상 최고학부였고, 관립으로는 유일한 여성고등교육기관이었다. 근대 일본에는 여고사 외에도 중등교원 자격을 얻을 수 있는 사립학교가 다수 있었지만, 당시 조선인에게는 관립 여고사야말로 "일본에서 제일이라는 학교,"¹⁾ "동양에서 제일 좋은 학교"라고²⁾ 인식되었다. 또한 교육 기회만큼이나 취업 기회도, 선택 가능한 직업도 극히 제한되어 있던 식민지 조선에서 중등교원은 고등교육을 받은 자에게 가장 좋은 직업 중 하나였고, 여성에게는 더욱 그러했다. 중등 이상 학교의 교원을 敎諭라고 칭했는데, 조선에서 교유는 고등교육기관인 전문학교에도 임용될 수 있었고, "외국의 차관, 지사 격"이라³⁾ 할 정도로 사회적 지위도 상당했다. 즉 여고사 유학생들은 식민지 조선의 교육피라미드에서 정점에 해당하는 학벌을 갖추고 여학교·여자전문학교의 교유로,⁴⁾ 여성운동계·여성교육계의 중추로 활동할 수 있는 존재였다.

본 발표문의 제목은 이들이 8·15 해방 이후 한국 사회에서 어떤 위치를 점하고 어떤 활

1) 趙圻烘, 『芝蘭의 딸에서: 又崇 趙圻烘 自敘傳』, 誠信女子師範大學出版部, 1979, 74쪽.

2) 朴宣美, 『여성, 제국을 거쳐 조선으로 회유하다』, 창비, 2007, 73쪽.

3) 『朝鮮女性이 가진 여러 職業 2- 敎諭』, 『朝鮮日報』 1926.5.10.

4) 이하 본문에서 여학교는 여자고등보통학교(이하 여고보), 고등여학교(이하 고녀), 중등 수준의 미인가 여자학교 등 여자 중등학교를 통칭하는 용어로, 남학교는 남자 중등학교를 통칭하는 용어로 사용했다.

등을 전개했는지를 부각하고자 한 것이다. 그러나 해방 이후의 삶을 이해하기 위해서는 그들이 어떤 사회·가족적 배경 속에서 고등교육 기회를 획득했고, 일본 유학 과정에서 어떤 제도적·문화적 경험을 축적했으며, 귀국 후 조선에서 어떻게 엘리트로 자리 잡았는지를 연속적으로 살필 필요가 있다. 따라서 본 발표에서는 식민지 시기 도쿄·나라 두 여고사 유학생의 삶의 궤적을 여고사 입학, 유학을 마치고 귀국한 이후, 8·15 해방 이후의 순으로 살펴 보고자 한다.

II. 여자고등사범학교의 조선인 여학생들

1. 여자고등사범학교의 유학생 정책

문부성은 1901년 제국대학 등에 외국인 유학생을 수용하기 위한 「문부성직할제학교외국인특별입학규정」(1901.11.11. 문부성령 제15호)을 제정했다. 규정의 주요 내용은 문부성 직할 학교에서 수학하려는 외국인은 외무성 재외공관이나 일본 주재 외국공관에서 소개서를 받아 입학할 희망하는 학교에 제출해야 한다는 것, 그중에서 상당의 학력이 있다고 인정되는 자에 한하여 해당 학교의 장이 입학할 수 있다는 것, 각 학교에서는 문부대신의 인가를 받아 외국인특별입학에 필요한 세칙을 둘 수 있다는 것 등이다. 1911년 이후부터 일본의 식민지인 조선과 대만 출신 유학생에게도 이 규정이 준용되게 되었고,⁵⁾ 그에 따라 문부성 직할 각 학교는 「외국인특별입학규정세칙」을 제정하고 유학생을 수용하기 시작했다. 도쿄여고사는 1909년, 나라여고사는 1년 뒤인 1910년 각각 「외국인특별입학규정세칙」을 제정하였다. 다음은 도쿄여고사의 「외국인특별입학규정세칙」(1909.4.15.)이다.

- 제1조 외국인으로서 「문부성직할학교외국인특별입학규정」에 의해 입학할 지망하는 자가 있을 때는 설비상 지장이 없는 경우에는 본교 각과 및 부속고등여학교 전공과 청강생으로서 이를 허가할 것
- 제2조 제1조에 의해 입학할 인원은 매년 3월 말에 정한다.
- 제3조 입학지망자에 대해서는 시험으로써 상당의 학력을 인정할 자로 한다.
- 제4조 입학지원자는 입학검정료로 3원을 납부할 것. 단 기납 검정료는 어떤 사유로도 이를 환부하지 않는다.
- 제5조 청강생은 수업료로서 본교 각과, 부속 고등여학교 전공과 각 부 모두 한 학년 40원을 매학년 4월 15일(휴일이면 다음날)에 납부할 것
- 제6조 중도퇴학 또는 기타 어떤 사정이 있어도 기납 수업료는 반환하지 않는다. 단 1학년 간 휴학을 명한 경우에는 이를 징수하지 않는다.
- 제7조 청강생 재학 중에는 특별히 정한 본교 교관의 지휘감독을 받아야 하는 것으로 한다.
- 제8조 청강생으로서 정해진 교육과정을 수료하고 성적 加良하다고 인정되는 자에게는 수료증서를 수여할 것
- 제9조 본교 諸규칙으로서 본칙에 저촉되지 않는 것은 청강생에게 적용한다.⁶⁾

5) 1911.4.4. 문부성령 제6호.

6) 『東京女子高等師範學校一覽: 自大正14年至大正15年』, 東京: 東京女子高等師範學校, 1925, p.92.

이와 같이 도쿄여고사의 「외국인특별입학규정세칙」은 외국인 유학생을 청강생으로 수용하
 되 학력시험을 시행한다는 것, 입학검정료, 수업료, 재학 중 학교규칙과 교관의 지휘감독에
 따를 것 등을 규정하고 있다. 이 세칙은 이후 세 차례 부분 개정되었는데, 입학검정료와 수
 업료에 변동이 있었을 뿐 1945년까지 그대로 유지되었다.

나라여고사의 「외국인특별입학규정세칙」 내용은 도쿄여고사의 그것과 대체로 유사한데,
 외국인을 청강생으로 허가한다고만 했을 뿐 선발 과정에 대한 구체적인 규정은 없었다. 나
 라여고사의 조선인·대만인 유학생 선발은 대체로 출신학교에서 보낸 서류와 총독부 소개장
 에 기초해서 심사하는 방식으로 이루어졌다.⁷⁾ 나라여고사는 도쿄여고사와 달리 일본인 입
 학생 선발에서도 학과시험을 시행하지 않고 지방관 천거에 의한 선발 방식을 1926년까지
 유지했는데, 유학생 선발도 마찬가지였던 것이다. 나라여고사의 조선인 유학생 입학에는 大
 阪의 사업가 柳原吉兵衛라는 개인의 추천·알선이 큰 영향을 미쳤는데, 이러한 선발 방식
 때문에 가능한 일이었다.

나라여고사는 1929년 「朝鮮人及台湾人ノ聽講生入学ニ關スル取扱方」(1929.10.30.)을 제정
 하여, “입학원서, 이력서, 호적등본, 출신학교장이 작성한 학업성적 및 인물고정서, 学校醫가
 작성한 신체검사서, 총독부 소개서 등의 서류를 조사해서 우선 선발하고, 해당 선발자에게
 다시 국어, 영어, 수학 3개 교과에 대해 간단한 시문 및 신체검사를 시행한 후 입학을 허가
 한다”라고 입학자 선발방법을 구체적으로 규정하였다. 1930년에는 다시 이를 개정하여 조선
 인, 대만인 청강생 선발을 위한 학과시험을 본과생 입학자 선발시험과 동시에 시행하고, 학
 과시험에 대해서도 “국어(해석, 작문), 영어(해석, 간단한 국문 영역), 수학(산술, 대수, 기
 하)”으로 보다 상세하게 제시하였다. 그리고 학과시험은 입학지원자의 편의를 위해 조선과
 대만에서 각각 시행하도록 규정하였다.⁸⁾ 이에 따라 1931년도 입학생부터 학과시험을 치르
 게 되었다.

2. 여자고등사범학교 유학생의 면면

여고사 입학이 확인되는 조선인 유학생은 아래의 표와 같이 도쿄여고사 48명(<표 1>),
 나라여고사 55명(<표 2>)이다.⁹⁾

<표 1> 도쿄여고사 조선인 유학생 명단 (도쿄여고사 입학 연도 순, 동일 연도 내 가나다 순)

연번	이름	출신학교	전공	입학	졸업
1	김덕성 (金德性)	진명여고보 메이지여학원	가사과	1914.4.	1918.3.
2	성의경 (成義敬)	숙명여고보	문과→이과	1916.4.	1920.3.

7) 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター編, 『奈良女子大学百年史』, 奈良女子大学, 2010, p.113.

8) 上同

9) 단, 1941~1945년 도쿄여고사 유학생은 <표 1>에 제시된 강성희 외에도 다른 인물이 있을 가능성이 높지만,
 자료의 한계로 미처 파악하지 못했다.

3	김중기(金宗祺)	경성여고보 사범과	이과	1918.4.	病死
4	김순영(金順英)	진명여고보 경성여고보 사범과	문과	1921.4.	1925.3.
5	박성환(朴聖煥)	경성여고보 사범과	도화전수과	1921.4.	1924.3.
6	손정규(孫貞圭)	경성여고보 도쿄여고사 부설 제6임시교원양성소	가사과	1921.4.	1922.3.
7	송금선(宋今璇)	숙명여고보 가시와자키고등여학교	가사과	1921.4.	1925.3.
8	임숙재(任淑宰)	숙명여고보 도쿄여자사범학교	가사과	1921.4.	1924.3.
9	조경희(趙慶喜)	숙명여고보 가시와자키고등여학교	문과 (역사)	1921.4.	1925.3.
10	최태선(崔泰嬋)	평양여고보 사범과	가사과	1921.4.	1925.3.
11	박정진(朴貞珍)	경성여고보 경성고등여학교	문과	1922.4.	1926.3.
12	방순경(方順卿)	경성여고보 사범과	가사과	1923.4.	1927.3.
13	최의순(崔義順)	숙명여고보 ウ井ルミナ여학교	이과	1923.4.	1927.3.
14	이진옥(李眞玉)	평양여고보	이과	1924.4.	1929.3.
15	김준희(金俊熙)	숙명여고보	가사과	1925.4.	중퇴
16	손희순(孫喜順)	진명여고보	문과	1925.4.	중퇴
17	윤성상(尹聖相)	숙명여고보	문과	1925.4.	중퇴
18	조기홍(趙圻烘)	경성여고보 경성제일고등여학교	가사과	1925.4.	1929.3.
19	김분옥(金粉玉)	경성여고보	가사과	1926.4.	1930.3.
20	윤경훈(尹京勳)	경성여고보	문과	1926.4.	1930.3.
21	윤여백(尹如柏)	경성여고보	문과	1926.4.	1931.3.
22	최기중(崔己曾)	경성여고보	문과	1926.4.	1930.3.
23	최복동(崔福同)	경성여고보	이과	1926.4.	1930.3.
24	최은경(崔恩卿)	경성제일고등여학교	가사과	1926.4.	1931.3.
25	현중순(玄曾順)	숙명여고보	보육실습과	1926.4.	1927.3.
26	김남줄(金南茁)	경성제이고등여학교	문과	1927.4.	
27	김종순(金鍾順)	동덕여고보 경성제이고등여학교	가사과	1927.4.	1931.3.
28	윤완경(尹完敬)	숙명여고보 경성제이고등여학교	가사과	1927.4.	1931.3.
29	김삼순(金三純)	경성여고보	이과	1928.4.	1933.3.
30	백정진(白貞鎭)	경성여고보	보육실습과	1928.4.	1929.3.
31	장애희(張愛希)	조우고등여학교	가사과	1928.4.	1933.3.
32	장희순(張和順)	배화여고보 숙명여고보 사범강습과	문과	1928.4.	1932.3.
33	고정애(高貞愛)	히노데고등여학교	문과	1929.4.	
34	김동주(金東珠)	평양여고보	가사과	1929.4.	1934.3.
35	이보비(李寶妣)	숙명여고보	이과	1931.4.	1936.3.
36	김지한(金志閑)	평양여고보	이과	1933.4.	1937.3.
37	현병진(玄丙辰)	경성여고보	가사과	1933.4.	1937.3.
38	장명숙(張明郁)	평양여고보	가사과	1934.4.	1938.3.
39	송은선(宋銀璇)	경성제일고등여학교	문과	1935.4.	1939.3.

40	옥인선(玉仁善)	평양여고보	가사과	1935.4.	1939.3.
41	김영옥(金英玉)	경성여고보	가사과	1937.4.	
42	신춘자(辛春子)	경성여고보	이과	1937.4.	
43	윤서석(尹瑞石)	경성여고보	가사과	1939.4.	1942.9.
44	이순이(李順伊)		보육실습과	1939.4.	1940.3.
45	최혜숙(崔惠淑)	숙명여고보	문과	1940.4.	1943.9.
46	송인봉(宋仁鳳)	경성여고보	이과	1940.4.	1943.9.
47	이순길(李順吉)		보육실습과	1940.4.	
48	강성희(姜誠姬)		문과	1941.4.	1944

출처: 연번 1~42번, 44번은 「조선총독부관보」와 「동경여자고등사범학교일람」, 43번은 太田孝子, 「海峡を越えて」, 春風社, 2008, 45~46번은 崔惠淑, 「역사의 파도를 헤치고」, 천지성지사, 1999,¹⁰⁾ 47번은 일본 「관보」(1940.5.4), 48번은 박선미, 앞의 책, 242쪽.

비고: 빈 칸은 확인되지 않는 경우임.

<표 2> 나라여고사 조선인 유학생 명단 (나라여고사 입학 연도 순, 동일 연도 내 가나다 순)

연번	이름	출신학교	전공	입학	졸업
1	김무희(金武熙)	진명여고보	가사과(청강생)	1922.4	1926.3
2	김영희(金英熙)	진명여고보	가사과	1922.4	*1924.2
3	김숙애(金淑培)	숙명여고보	가사과	1923.4	1927.3
4	김영수(金永洙)	평양여고보	문과	1923.4	*1923.9
5	박소제(朴小娣)	숙명여고보	이과	1923.4	1927.3
6	문남식(文南植)	숙명여고보	이과	1924.4	1928.3
7	이예행(李礼行)	숙명여고보	문과	1923.4	1927.3
8	김복희(金福熙)	경성여고보	문과	1925.4	*1928.9
9	문남아(文南雅)	숙명여고보	문과	1925.4.	*1926.9
10	윤덕희(尹德喜)	숙명여고보	문과	1925.4	*1928.3
11	표경조(表景祚)	경성여고보	가사과	1925.4	1929.3
12	김동옥(金東玉)	경성여고보	가사과	1926.4	1930.3
13	박정숙(朴貞淑)	평양여고보	문과	1926.4	1930.3
14	손정순(孫貞順)	숙명여고보	문과 → 이과	1926.4	1930.3
15	최경진(崔景珍)	평양여고보	문과	1926.4	1930.3
16	김성철(金聖哲)	평양여고보	가사과 → 문과	1927.4	1931.3
17	김인수(金仁洙)	숙명여고보	문과	1927.4	1931.3
18	송옥선(宋玉璇)	숙명여고보	가사과	1927.4	1931.3
19	김낙신(金樂信)	진명여고보	가사과(선과)	1928.4	1932.3
20	정관숙(鄭寬淑)	진명여고보	가사과(선과)	1928.4	1932.3
21	한순길(韓順吉)	경성여고보	문과	1928.4	1932.3
22	허하백(許河伯)	숙명여고보	이과	1928.4	1933.3
23	김 선(金 善)	정의여고보	이과	1929.4	1933.3
24	박봉호(朴奉浩)	평양 승의여학교 고등과 히로시마여학교 고등과	문과	1929.4	1933.3
25	오정아(吳正雅)	숙명여고보	문과	1929.4	1933.3
26	최귀란(崔貴蘭)	대구여고보	가사과	1929.4	1933.3
27	김염숙(金廉淑)	평양여고보	가사과	1930.4	1934.3

10) 崔惠淑의 책은 일본에서도 간행되었다. 崔惠淑, 「限の彼方に-歴史の荒波を超えて」, 右文書院, 1999.

28	변 주(卞 珠)	도쿄 堀越고등여학교	가사과	1930.4	1934.3
29	서경남(徐敬男)	숙명여고보	문과	1930.4	1934.3
30	주월경(朱月瓊)	대구여고보	가사과	1930.4	1934.3
31	김복분(金福分)	대구여고보	이과	1931.4	1936.3
32	박용경(朴容卿)	진명여고보	가사과	1931.4	1935.3
33	유기주(柳奇珠)	전주여고보	문과	1931.4	1935.3
34	임옥인(林玉仁)	영생여고보	문과	1931.4	1935.3
35	임영길(林英吉)	숙명여고보	문과	1932.4	1936.3
36	최문희(崔文姬)	호수돈여고보	가사과	1932.4	1936.3
37	김혜영(金惠英)	일신여고보	문과	1933.4	1937.3
38	마귀선(馬貴善)	호수돈여고보	가사과	1933.4	1937.3
39	최경주(崔景珠)	대구여고보	가사과	1933.4	1937.3
40	김복녀(金福女)	평양여고보	가사과	1934.4	1938.3
41	김영주(金榮主)	대구여고보	이과	1934.4	1939.3
42	김주원(金周媛)	숙명여고보	문과	1935.4	1939.3
43	최성률(崔成律)	龍谷고등여학교	문과	1935.4	1939.3
44	김정순(金貞順)	숙명여고보	가사과	1936.4	1940.3
45	최선경(崔仙卿)	대구여고보	가사과	1936.4	1940.3
46	홍임식(洪妊植)	경성여고보	이과	1936.4	1940.3
47	홍경희(洪慶姬)	대구여고보	문과	1937.4	1941.3
48	정재인(鄭在仁)	경성여고보	문과	1938.4	1941.12
49	최신덕(崔信德)	평양 송의여고보 배화여고보	가사과	1938.4	*1938.10
50	강신주(姜信珠)	대구여고보	가사과	1939.4	1942.9
51	박영자(朴英子)	서문고등여학교 (구 평양여고보)	문과	1939.4	1942.9
52	윤혜원(尹惠媛)	경기고등여학교 (구 경성여고보)	문과	1941.4	1944.9
53	동효미(東曉美)	숙명여고보	문과	1942.4	*1945.3
54	진본절자 (津本節子)	숙명여고보	가사과	1942.4	*1946.3
55	김연옥(金蓮玉)	경성고녀	문과	1943.4	*1946.3

출처: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター編, 앞의 책, p.179 <표 15> 재구성.
비고: 졸업연월의 *표시는 중도퇴학 연월임.

먼저 유학생의 출신학교를 보면, 도쿄여고사의 경우 공립여고보인 경성·평양여고보 출신이 가장 많고, 나라여고사도 입학시험제도를 시행하기 전인 1930년까지의 입학생 30명 중 28명이 공립여고보와 사립숙명·진명여고보 출신이었다. 즉 조선인이 일본의 관립학교인 여고사에 입학하는 것은 공립여고보 졸업생이거나, 사립학교는 舊皇室 관련 학교인 淑明·進明女高普 출신이 아니면 어려웠던 것으로 보인다. 일례로, 1938년 나라여고사 입학생 崔信德은 사립학교인 培花女高普 4학년 여름방학 때 학교로부터 “개교 이래로 응시자가 없었던 배화학교의 명예를 위해 나라여고사에 응시하도록 준비하는 것이 어떠냐”라는 권유를 받고 수험 준비를 했는데, 일본어, 영어, 수학 과목 담당 교유들이 특별 지도도 해주었고, 합격하자 “개교 이래 처음이라면서 학교가 떠들썩”했다고11) 한다.

林玉仁은 “어느 학교 졸업생이든 최우등생이 아니면 응시할 수도 없었고, 일본땅을 통틀어 소위 수재소녀들이 모여드는 학교라 일컬어져 있던 만큼 합격은 ‘하늘의 별따기’나 다름이 없었다”라고¹²⁾ 술회했는데, 이는 과장이 아니었다. <표 2> 나라여고사 유학생 55명 중 18명이 여고보를 우등으로 졸업했다.¹³⁾ 앞의 사례의 주인공 崔信德은 崇義여학교를 다니다 3학년 2학기에 배화여고보로 편입했는데, 첫 학기부터 “100점짜리 과목이 수두룩”할 정도로 성적이 좋아서 “선생님들이나 학생들 사이에서 ‘秀才’ ‘八方美人’ 등으로 불리기까지”¹⁴⁾ 한 우등생이었다. 1921년 도쿄여고사 입학생 趙慶喜는 숙명여고보 시절 “반에서 1, 2등을 맡아 놓고 하는 수재”, “몹시 영리한 머리를 가진 무서운 재주덩이,” “천재, 신동이란 말까지 들을” 정도로 이름을 날렸다.¹⁵⁾ 워낙 정원이 한정되어 있으니 학교 간 경쟁의식도 있었던 것 같다. 경성여고보 출신인 玄丙辰은 도쿄여고사와 도쿄여자의학전문학교에 모두 합격하고 후자 쪽으로 마음이 기울었지만, “3년 동안 경기에서 한 사람도 진학을 못했으니 모처럼 합격한 네가 포기하고 여의전으로 가면 모교로서는 고등사범에 대가 끊어지는 격이 아니냐는 선생님들의 간곡한 타이름과 꾸지람이 이만저만이 아니어서 …… 내간에 눈물을 머금고 모교의 명예를 앞세워”¹⁶⁾ 도쿄여고사에 진학했다. 숙명여고보 출신 崔惠淑의 경우, 당시 숙명여고보 교장이 “동경여고사에 진학한 졸업생이 입학한 지 1년 만에 결혼문제로 퇴학하게 되어 지금 숙명여고의 이미지가 좋지 않아 명예회복을 위해 금년에 문과에 한 사람 보내고 싶은데, 내가 가장 적합한 후보자”라고¹⁷⁾ 아버지를 설득했다고 한다.

여고사 유학생은 대개 부유한 집안 출신이었다. 실례로, <표 1>의 도쿄여고사 유학생 중 金德性의 아버지는 자신의 남동생과 金德性을 같이 도쿄에 유학 보내고, 金德性 아래 6명 자녀들도 유치원, 在朝鮮 일본인 소학교와 중학교에 보내는 등 충분한 교육을 시키고 있었다.¹⁸⁾ 金順英의 아버지는 부산의 巨富로 三南의 王이라는 별명을 들을 정도의 선박회사 사장이었다. 金順英은 도쿄여고사 졸업 후 서울에서 여고보 교유 생활을 하던 중, 1929년 경도쿄여고사 입학 동기인 宋今璇과 미국유학을 가자고 약속하고, 비용을 마련하기 위해 本家에 전셋집을 얻고 싶으니 2천원을 보내달라고 거짓말을 했다. 그랬더니 본가에서는 “미혼 처녀가 남의 집에 아무리 전세라도 세를 들어있는 것은 수치이니 아주 집 한 채를 사라”라고 4천원을 보내주었다고 한다.¹⁹⁾ 당시 교유 봉급이 70원 정도였으니, 그 재력을 짐작할 만하다. 孫貞圭는 “가정이 상당한 집에서 컸다”라고 하며,²⁰⁾ 宋今璇도 “필요할 때 경제적인 부족을 느낀 적 없고, 언제나 상당한 저축을 갖고 있는”²¹⁾ 부유한 집안에서 자랐다. 趙

11) 崔信德, 『그 은총 속의 나의 인생』, 생각하는 백성, 2009, 62쪽.

12) 林玉仁, 『나의 이력서』, 正宇社, 1985, 54쪽.

13) 55명의 여고보 졸업식을 보도한 신문기사를 통해 확인한 수치이다.

14) 崔信德, 앞의 책, 58~59쪽.

15) 『東亞日報』 1981.1.17.; 『한때 話題의 女性들의 後日譚』, 『女性』 1937.7.

16) 玄丙辰, 『메마른 언덕에 꽃밭을』, 培英社, 1981, 20쪽. 인용문에서 ‘경기’는 경성여고보를 가리킨다.

17) 崔惠淑, 앞의 책, 35쪽. 실제로 <표 1>에서 1940년 崔惠淑 입학 전 숙명여고보 출신은 1931년 35번 李寶妣 입학이 마지막이다.

18) 『每日申報』 1916.7.16.

19) 金順英, 『한 빛을 따라: 김순영자서전』, 益文社, 1976, 63쪽.

20) 『경성 각 여학교 평판 좋은 여선생님들』, 『別乾坤』 2, 1926.12.

21) 南海宋今璇博士回顧錄編纂委員會, 『去華就實: 南海宋今璇博士回顧錄』, 德成女子大學出版部, 1978, 197쪽.

慶喜는 “경성 樂園洞의 名家”²²⁾ 출신이고, 朴貞珍은 中樞院 參議 朴齋獻의 딸이었다. 趙圻烘의 아버지는 대한제국기 관직에 있다가 강점 후 낙향했는데, 서울에도 집을 두고 본처(趙圻烘의 어머니)와 세 아들, 趙圻烘이 머물며 공부하게 했다. 두 집 살림을 꾸려가기에 충분한 경제력이 있었던 것이다. 玄會順은 경성여고보 교유, 朝鮮總督府視學官을 거쳐 고등관인 參與官을 역임하고 中樞院 參議에 임명되었던 玄穗의 딸이다. 金三純의 아버지는 “수천석 집안의 부농”이었고,²³⁾ 金東珠의 아버지는 平安南道 江西郡 城巖面에서 “面內 有數의 大地主”였으며,²⁴⁾ 尹瑞石은 은행원 아버지의 외동딸이었고, 최혜숙의 아버지는 지주이자 공장을 경영하는 사업가였다.²⁵⁾ <표 2> 나라여고사 유학생 중 金英熙와 金武熙는 자매로, 中樞院 參議 金濟明의 딸이었다. 李礼行과 朴容卿은 부친이 사립학교를 운영했다. 林玉仁의 아버지는 거둬진 사업 실패로 넉넉한 경제력을 갖추진 못했지만, 林玉仁의 학교공부를 지지하며 학비를 조달하기 위해 애써주었다. 林玉仁이 진학을 앞두고 전공을 상의하자, 임옥인의 오빠는 가정과를 권했지만 아버지는 “여자란 평생 가사에 묻혀 살게 되는 것인데, 무엇 때문에 이중으로 시달리겠느냐”라며 문과를 가라고 권했다고 한다.²⁶⁾ 崔信德의 아버지는 平安北道 厚昌에서 크게 성공한 사업가였다.

식민지 조선에서 여성이 중등학교를 졸업하고 여고사에 입학하기까지의 과정에는 그 비용을 부담할 수 있는 집안의 경제력이 전제되어 있다. 물론 이는 남성에게도 동일하게 적용되는 것이다. 초등교육조차 무상·의무교육이 아니었던 조선에서 중등학교는 남성에게도 좁은 문이었다. 그러나 남성 중심적 성차별주의가 엄연한 사회에서 한정된 교육 기회는 집안의 아들에게 우선 돌아가기 마련이었으니, 상대적으로 여성에게는 더욱 좁은 문이 될 수밖에 없었다. 따라서 여학교 졸업생들은 딸도 아들과 같은 수준까지 공부시킬 수 있는, 상당한 재력을 가진 중상류층 출신이라고 보아도 좋다. 물론 모든 부유한 집안의 딸들이 중등 이상의 교육을 받거나 일본 유학을 할 수 있던 것은 아니었다. 아래는 1939년 도쿄여고사 입학생 尹瑞石의 언급이다.

(“경기를 나와서 여고사에 들어갔다는 것은, 선생님은 top 학생이셨네요.”라는 질문에 대한 대답) 아니, 나는 150명 중 1등은 아니었습니다. 클래스에서 2등 정도는 했다고 생각되는데 …… 1등을 한 적은 없습니다. 거의 2등. (“1등이었던 분은 어디로 갔습니까?”라는 질문에 대한 대답) 아무 데도 가지 않았습니까. 정숙한 가정부인이 되었습니다. 그 때는 공부를 잘해서 유학을 가는 게 아니었습니다. 공부를 못하면 물론 유학을 할 수 없지만, 공부를 잘하기 때문에 유학을 가야한다는 것은 아니었습니다. 대부분은 여학교를 졸업하면 다음해까지 결혼을 했지요.²⁷⁾

당시 조선인 여성의 결혼 연령은 대체로 15~19세, 그다음이 20~24세였으므로,²⁸⁾ 대개

22) 『京城日報』 1925.3.15.

23) 「원로와의 대담-우리나라 여성농학박사 1호 김삼순 박사」, 『과학과 기술』 26-5, 1993, 80쪽.

24) 「나의 이력서-원로과학기술자가 걸어온 한평생 '金東一박사」, 『과학과 기술』 29-5, 1996. 28쪽. 金東一은 金東珠의 오빠이다.

25) 崔惠淑, 앞의 책, 35쪽.

26) 林玉仁, 앞의 책, 19~20쪽.

27) 太田孝子, 앞의 책, 117~118쪽.

28) 「昭和6年の結婚, 離婚及配偶數」, 『朝鮮總督府調査月報』 1932-7 ; 『東亞日報』 1935.9.10 ; 『朝鮮總督府統計年報』

여고보를 졸업하면 17, 8세 전후의 이른바 결혼 적령기의 “과년한 처녀”가 된다. 즉 여고보 졸업 후, 고등교육기관으로 진학하려면 우선 결혼이라는 벽을 넘어야 했다. “공부를 잘해서 유학을 가는 게 아니었던” 시절, 집안의 재력 외 또 무엇이 이들의 일본 유학을 가능하게 했을까? 한 가지 특징적인 것은 여고사 유학생 대다수에게는 딸을 지극히 사랑하고 아들과 딸을 차별하지 않는, ‘開明’한 아버지가 있었다는 사실이다. 아버지의 존재를 강조하는 것은 어머니는 집안의 경제권과 의사결정권을 동시에 장악한 가부장이 되기 어려웠기 때문이다. 여기서 아버지의 ‘의지’는 딸이 원하는 것은 무엇이든 들어주려는 단순한 ‘父情’일 수도 있고, 재래의 남성 중심적 성별분업 의식에서 불충분하게나마 벗어난, 여성의 교육과 사회활동을 인정하는 ‘개명’된 신념일 수도 있다. 요컨대 여고사 조선인 유학생은 대체로 ‘부유하고 개명한 가부장의 사랑스럽고 소중한 딸’이었다.

III. 여자고등사범학교 유학생의 귀국 후의 삶 - ‘결혼 또는 직업’이거나 ‘결혼과 직업’이거나-

대부분의 여고사 유학생은 규정된 교육 기간을 마치고 졸업했다. <표 1>, <표 2> 여고사 유학생의 졸업율은 80% 이상이다. 중도퇴학 사유로는 질병, 우환, 경제적 어려움, 결혼이나 임신 등을 생각해 볼 수 있는데, 대개 부유한 집안 출신인데다 장학금을 받는 경우도²⁹⁾ 있었기 때문에 경제적 이유로 중도 퇴학할 가능성은 낮다고 보아도 좋다. 기혼자는 입학이 금지되어 있었기 때문에 재학 중 결혼하거나 질병으로 면학을 감당할 수 없으면 자퇴하거나 퇴학 처분을 받았다.

유학생들이 얻은 졸업장과 중등교원 자격증은 어려운 학업과 일본의 의식주 생활 문화에 적응해야 하는 고충을 이겨내고, 자유연애나 집안의 강요 어느 쪽이든 결혼을 미룬 결과물이었다. 유학생들은 그 결과물을 가지고 무엇을 했을까. 도쿄여고사 유학생은 <표 1>의 48명 중 27명(<표 3>), 나라여고사 유학생은 졸업생 46명 중 38명(<표 4>)의 졸업 후 해방 이전까지의 사회활동 경력이 확인된다.

<표 3> 도쿄여고사 조선인 유학생의 졸업 후 1945년 8·15 해방까지 사회활동 경력(<표 1> 연번 순)

이름	졸업 후 8·15 해방까지 주요 사회활동 경력
金德性	경성여고보 교유(1919~1920)
成義敬	숙명여고보 교유(1920~1928), 조선여자청년회 발기인(1921), 숙명여자전문 창립위원(1937)

1938년도 판.

29) 1910년대 공립여고보 졸업생은 조선총독부 관비유학생이 될 수 있었다. 1922년 4월 1일 「在內地給費生規程」(조선총독부령 제44호)의 공포·시행으로 관비생을 관공립학교 졸업생으로 제한하는 규정은 폐지되었다. <표 1>에서 1922년 4월에 입학한 朴貞珍이 「朝鮮總督府留學生規程」에 따른 마지막 관비유학생이었다. 淑明崇義永生여고보 등 사립학교에서는 미래의 교원을 양성한다는 취지로 졸업생 중 장학생을 선발하여 일본 유학을 시키고, 졸업 후 모교에서 교편을 잡도록 하는 제도를 운영했다. 나라여고사 유학생 중 朴容卿은 柳原吉兵衛가 설립한 李王家御慶事紀念會 장학금을 받았다.

金順英	貞信여학교 교유(1925~1926), 同德여고보 교유(1926~1929), 好壽敦여고보 교유(1929~1933)
朴聖煥	同德여고보 교유(1924~1935)
孫貞圭	경성여고보 교유(1922~1941) *친일반민족행위자·친일인명사전 등재자
宋今璇	숙명여고보 교유(1925~1926), 晋州 一新여고보 교유(1926~1929), 동덕여고보 교유(1930~1933), 이화여자전문 교수(1934~1940), 덕성여자실업학교 교장(1940~) *친일반민족행위자·친일인명사전 등재자
任淑幸	숙명여고보 교유(1923~1926), 대구여고보 교유(1926~1937), 숙명여자전문 교수(1939~) *친일반민족행위자·친일인명사전 등재자
趙慶喜	숙명여고보 교유(1925~1927) 도쿄여고사 연구과 입학(1928), 도쿄문리과대학(1929~1932) 일본 實踐여학교 교유(1933)
崔泰嬋	평양여고보 교유(1925~1930), 광주여고보 교유(1933~1935)
方順卿	부산여고보 교유(1928~1944), 진명여고보 교유(1944~)
崔義順	東亞日報 기자(1928~1933)
尹聖相	朝鮮日報 기자(1928~), 中央日報 기자(1933)
趙圻拱	광주여고보 교유(1929), 진명여학교 교유(1930~1940), 誠信가정여학교 교유(1940~) *친일반민족행위자·친일인명사전 등재자
金粉玉	경성사범·경성여자사범 교유(1935~1939), 숙명여고보 교유(1941~1945)
崔恩卿	海州여고보 교유(1932~1939)
玄曾順	숙명여고보 보통과 교원
金鍾順	元山 樓氏여고보 교유, 동덕여고보 교유
金三純	진명여고보 교유, 경성여고보 교유(1935~1938), 홋카이도제국대학(1941~1943)
白貞鎭	경성보육학교 교유(1929~1934)
張和順	해주여고보 교유(1933~1934), 경성사범 교유(1936~1940)
金東珠	이화여전 교유(1937~1940)
金志閑	평양 西門고등여학교(舊평양여고보) 교유(1938)
玄丙辰	大田여고보, 경성여고보, 진명여고보 교유
張明郁	여고보 교유(1938~1940)
尹瑞石	경기고등여학교(舊경성여고보) 교유(1942~1944)
崔惠淑	숙명여고보 교유(1943~)
姜誠姬	방송인

비고: 여고보는 1938년 고등여학교(이하 고녀)로 개칭되었고, 공립여고보는 경성여고보는 경기고녀, 평양여고보는 서문고녀 등으로 교명도 변경되었음.
 *친일반민족행위자는 친일반민족행위진상규명위원회, 『친일반민족행위진상규명 보고서』, 2011에 수록된 자를 가리킴.³⁰⁾
 친일인명사전 등재자는 민족문제연구소, 『친일인명사전』, 2009에 등재된 자를 가리킴.³¹⁾

30) 2005년 5월 31일 「일제강점하 親日反民族行爲 진상규명에 관한 특별법」(2004.3.22 공포) 및 同 시행령(2004.10.29 공포, 대통령령 제18571호)에 의거하여 親日反民族行爲真相糾明委員會가 설립되었다. 위원회는 '親日反民族行爲'를 일본제국주의의 국권 침탈이 시작된 러일전쟁 개시 때부터 1945년 8월 15일까지 행한 20가지 범주의 행위로 규정하고, 친일반민족행위 대상자를 선정·조사하는 한편, 관련 자료를 수집하였다. 2009년 11월 「친일반민족행위진상규명 보고서」를 발간하여 1,006명의 친일반민족행위자를 공표한 후 해체되었다.

31) 『친일인명사전』에는 친일반민족행위와 附日協力行爲를 한 인물 중 친일인명사전편찬위원회에서 선정한 4,389

〈표 4〉 나라여고사 조선인 유학생의 졸업 후 직장생활 경력(〈표 2〉 연번 순)

이름	졸업 후 8·15 해방까지 주요 사회활동 경력
金淑培	숙명여고보 교유(1927~1928), 정신여학교 교유
文南植	광주여고보 교유(1928~1929), 一新여학교 교유(1931~1935), 진명여고보 교유(1935~)
李礼行	호수돈여고보 교유(1927~1928), 정신여학교 교유(1931), 沙里院고등여학교 교유(1932~1933), 朝陽農事學院 교원(1933~1935)
表景祚	대구여고보 교유(1929~1930), 이화여고보 교유(1931~)
金東玉	정신여학교 교유(1930~1932), 權花여학교 교유(1933~)
朴貞淑	京城實踐女學校 교유(1930), 日新여학교 교유(1932)
孫貞順	숙명여고보 교유(1930~1931), 동덕여고보 교유(1932~)
崔貞珍	배화여고보 교유(1931~1932)
金聖哲	배화여고보 교유(1932~1933), 光州 須皮亞여학교 교유
金仁洙	경성여자상업학교 교유(1931), 숙명여고보 교유(1931~1933)
宋玉璇	경성여자상업학교 교유, 이화여고보 교유
金樂信	일본 育英高等女學校 교유(1932), 정신여학교 교유(1933), 춘천고등여학교 교유(1934), 함남고녀(舊함흥여고보) 교유(1938~)
鄭寬淑	日新여학교 교유(1932~1933)
韓順吉	正義여고보 교유(1932)
許河伯	배화여고보 교유(1935~1940), 숙명여고보 교유(1941~1945)
金 善	正進여학교 교유, 龍谷고녀 교유(1937)
朴奉浩	승의여학교 교유
吳正雅	호수돈여고보 교유(1933~1935)
崔貴蘭	대구여고보 교유(1933~1935)
金康淑	영생여고보 교유(1935), 함흥여고보 교유(1936~1937), 평양여고보 교유(1938~)
卞 珠	日新여학교 교유(1935)
徐敬男	누씨여고보 교유(1935~1936), 숙명여고보 교유(1937~)
朱月瓊	대구여고보 교유(194~1937), 경기고녀 교유(1938~)
金福分	대구 曉星국민학교(1941)
朴容卿	춘천고등여학교 교유(1935), 진명여고보 교유(1936~)
林玉仁	영생여고보 교유(1935~1942), 누씨여고보 교유(1942~)
林英吉	누씨여고보 교유, 숙명여고보 교유(1936~)
崔文姬	호수돈여고보 교유(1936~)
金惠英	경성사범학교 훈도(1938~1939)
馬貴善	羅南여고보 교유(1937~1938)
崔景珠	대구여고보 교유(1938~1940)
金福女	동나남고녀(舊나남여고보) 교유(1938)
金周媛	誠信家政女學校(1941)
崔成律	평양 서문고녀(舊평양여고보) 교유(1940)
金貞順	숙명여고보 교유(1941)
崔仙卿	전북고녀(舊전주여고보) 교유(1940)
洪姪植	경성제대 이학부 조수

명이 수록되어 있다.

洪慶姬	경북고녀(舊대구여고보) 교유
출처: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター編, 앞의 책, p.51 <표 5 朝鮮留學生の戰前赴任先>를 기본으로 하여, 『내량여자고등사범학교일람』, 신문과 잡지 기사, 출신학교에서 발간한 학교사, 개인 회고록 등에 의해 보강하였음.	
비고: 연도 표기가 없는 것은 시기를 특정할 수 없는 경우임.	

<표 3>, <표 4>에서 보듯이, 여고사 유학생 대다수는 여학교 교유로 취직했다. <표 3>, <표 4>에서 중등교원이 아닌 직업은 신문기자(최의순, 윤성상), 경성제대 조수(홍임식)뿐이다. 여고사가 본래 여성 중등교원을 양성하는 목적형 학교이기도 하고, 관비나 교비 유학생은 복무 의무가 있었다. 또한 당시 여학교 교유는 전공이 의약계열이 아닌 한, 고등교육을 받은 여성이 선택할 수 있는 가장 좋은 직업이었다. 1931년 도쿄여고사 가사과를 졸업하고 동덕여고보 교유로 근무한 金鍾順은 조선 여성들이 “전문이나 하나 마치면 더 향상하려는 마음도 없이 그저 교편생활만 요구한다. 그것은 교직을 제일 고상하게 보고 적절하다고 생각하는 까닭이고, 第二는 여성의 활동할 기관이 적은 까닭이다. 그러니 항상 교사 자리만 만원이 되니, 결국은 놀지 할 수 있나 하고 자칭 고등룸펜이라고 외치고 다닌다”³²⁾라고 비판했지만, 金鍾順 스스로도 인정하고 있듯이 교직 외엔 고학력 여성이 딱히 취직할 곳도 마땅치 않았다. 교직도 남학교는 여성 교유를 임용하지 않았고, 여학교는 수 자체가 적었을뿐더러 일본인 여성과도 자리를 다투어야 했으므로 선택지는 제한되어 있었다.

근속 기간이 짧은 경우는 대개 결혼이나 임신, 출산을 계기로 사직한 경우일 가능성이 높다. 이들은 대부분 자신과 비슷한 학력과 사회경제적 지위를 가진 남성과 결혼했다. 전문학교 이상의 고등교육을 받은, 근대적 직업을 가진 남성과 결혼하면서 학교를 그만두고 가정부인이 되는 경향은 두 여고사 유학생에게서 공통적으로 나타난 모습이다. 성별분업 의식이 완고한 사회에서 기혼여성이 직장생활을 지속하는 것은 힘든 일이다. 배우자가 직장생활을 계속하는 데 동의한다는 것이 가사 분담을 의미하는 것은 전혀 아니었고, 이른바 현모양처 역할도 직업을 갖지 않은 가정부인과 똑같이 요구받기 때문이다.

한편, 일부 유학생은 여성을 가정으로 한정하는 성별분업을 적극적으로 받아들였다. 다음은 1931년 나라여고사를 졸업하고 모교인 숙명여고보에서 가르치다 2년 만에 결혼을 계기로 사직했던 金仁洙의 “가정생활의 분업”이라는 제목의 기고이다.

여기에서 또한 유의해야 할 것이 있으니, 언제든지 남녀는 유별하다는 것을 인식하고 나는 그 중에 여자라는 것을 정당히 자인해야 할 것이다. 이것은 결코 남자는 잘나고 여자는 떨어지고 못하다는 것을 말함이 아니라 각기 존재가 다르고 천성이나 천직이 다르니만큼, 철저히 각각 개성 발휘를 시키기 위함이니 여자가 아니고는 도저히 불가능하다는 美點을 완전히 발휘한다면, 그때에는 재래와 같은 남자의 구속이나 심하면 확대같은 것은 자연히 소멸되고 원만해결되어 서로 돕고 서로 존경하는 아름다운 낙원이 성립될 것이다. …… 남편의 직업이나 성격이나 기호 등을 잘 이해하고 또 남편은 항상 나에게 무엇을 요구하고 바라나 하는 것을 심리적으로 납득해서 無言 중 그 모든 점을 흡족히 해줄 때에 그는 마음껏 힘껏 사회 사업에 몇 사람 분의 능력을 발휘할 수 있을 것이니, 그때에는 반드시 남녀 협동의 아름다운 사업과 생산

32) 『東亞日報』 1935.7.27.

이 있을 것이다. 어찌 하필 나 자신이 거리에 나서서 외치고 사회 운운 해야만 될 필요가 있으랴. 이것이 소위 숨어서 짝트는 여자의 美術이라고 할까, 내조의 공이라고 할까, 비록 말은 시대를 따라 다물지라도 이러한 견지에 선다고 하면 언제든지 같은 만족과 훌륭한 결과를 맺어서 스스로 사회공헌이 될 것을 믿는 바이다.³³⁾

‘남녀유별’과 여성의 ‘남편 내조’를 강조하며, 이러한 역할을 “서슴지 않고 잘하려면” 여성도 교육을 받아야 하고, 교양을 많이 쌓아야 한다는 주장이다. 경제력을 갖춘 전문직 남성을 배우자로 둔, 고학력 가정부인이 가질 만한 성별분업 의식의 전형이라고 할 수 있겠다.

결혼과 출산 후에도 직장생활을 계속한 것이 확인되는 사례는 도쿄여고사 유학생 중에는 7명, 나라여고사 유학생 중에는 8명뿐이었다. 다음은 그중 1명인 表景祚의 교유 생활 3년째, 아직 미혼이던 시기에 “결혼과 여성의 직업” 관계를 묻는 기자의 질문에 대한 대답이다.³⁴⁾

나는 직업과 결혼이 그렇게 밀접한 관계가 있다고 보지 않습니다. …… 결혼을 생활문제 해결로 생각하는 이가 있다면 큰 오해인 줄 압니다. …… 아무리 상대편에 거대한 재산이 있다 하더라도 여자 자신의 경제적 보장이 있어야 하겠고, 또 자기의 직업이 반드시 경제문제 만이 아니고 사회적으로 어떤 도움이 된다든지 또는 그 직업으로 자기가 향상할 길이 있는 것이라면 더욱이 결혼으로 인해서 이것을 중지하게 된다면 문제는 더 커질 것입니다. …… 사실 조선여자들은 미혼 시대에는 여러 가지로 포부도 크고 성공을 하려고 노력하지마는, 가정으로 들어만 가면 모두 매장해버리고 마는 것은 꼭 유감입니다. 들은 바에 의하면 선진국의 여자들은 처녀시대의 활동은 그리 팔목할만하지 못하나 결혼을 한 뒤에야 그들의 사회적 활동도 본 무대로 들어간다고 합니다. 물론 그네들의 가정조직이라든지 생활양식이 간편하여 시간 여유가 있고 주위의 이해가 있는 것도 사실이지마는 우리는 그 여자들의 근본 사상에 배울 점이 없지는 않나 합니다.³⁵⁾

表景祚의 대답은 이른바 ‘배운 여성’-고학력 엘리트 여성이 갖고 있는 공적 책임감과 사회적 욕망, 이 두 가지를 모두 보여준다. 전자가 결혼 여부와 관계없이 여성도 집 밖에서 공적 역할을 할 수 있다는 것, 여성도 직장생활을 할 수 있다는 것을 보여주어야 한다는, 배운 여성으로서의 사회적 책임감이라고 한다면, 후자는 직장생활을 통해 경제력을 갖추고 자기 발전을 꾀하고자 하는 개인적인 성취욕과 경제문제 즉 생활문제 해결이라는 사정을 포함한다. 양자는 본래 선후관계나 인과관계에 있는 것이 아니므로 결혼생활과 직장생활을 병행하는 이유가 양자 중 어느 것인가를 분별하기는 어려운 일이다. 보다 중요한 것은 이들의 삶이 갖는 사회적·역사적 의미일 것이다. 이러한 점에서 ‘결혼 또는 직업’이 아니라 ‘결혼과 직업’ 생활을 이어간 이들의 삶이 성별분업 의식에 균열을 일으키는 데 기여한 바 있다고 평가해도 과언은 아닐 것이다.

33) 『東亞日報』 1935.7.19.

34) 위의 대답을 한 지 2년 뒤, 表景祚는 당시로선 늦은 나이인 27세에 경성제대 출신의 변호사 裴廷鉉과 결혼하여 교유생활을 계속하면서 5남매를 낳아 키웠다. 裴廷鉉은 8·15 해방 후 대법관, 대한변호사협회 회장을 역임했다.

35) 『每日申報』 1931.9.29.

IV. 여자고등사범학교 유학생의 8·15 해방 이후

- 8·15 해방이 열어준 기회와 한계 -

8·15 해방은 현직 교유로 해방을 맞은 이들, 1940년대 여고사를 입학 또는 졸업하여 미처 사회적 경력을 쌓을 시간이 없었던 이들, 결혼·출산 후 가정부인으로 살아갔던 이들 모두에게 삶의 전기가 되었다. 여고사 유학생 중 해방 후 南韓에서 사회활동 경력이 확인되는 자는 도쿄여고사 유학생은 16명(<표 5>), 나라여고사 유학생은 25명(<표 6>)이다.

<표 5> 도쿄여고사 조선인 유학생의 해방 후 사회활동 경력(<표 1> 연번 순)

이름	해방 후 주요 사회활동 경력
成義敬	숙명학원 이사장(1960~1962)
金順英	大韓女學士協會 간부, 大韓赤十字社 婦女諮問委員會 위원장(1960~1972)
孫貞圭	경성여자사범학교 교장, 조선교육심의회 위원(1945~1946) 서울師大 가정과 교수(1947~) 6·25전쟁 중 남북
宋今璇	德成여중 교장(1945) 德成여대 설립(1950). 德成학원 이사장, 德成여고 교장, 德成여자대학장 등 역임 세계여성단체협의회에 한국대표로 참가(1971) 훌륭한 어머니상, 대한민국 국민훈장 冬柏章(1974)
任淑幸	숙명여대 초대 총장(1946~1958)
方順卿	중등학교장(首都여중고, 서울여중고, 舞鶴여중고 등) 대한체육회 임원 역임
趙圻烘	중등학교장(誠信여중, 昌德여중, 京畿여중고) 성신학원 이사장(1961), 성신여자사범대학장, 성신여대총장 등 역임 '여성문제연구회' 발기인, 대한가정학회 회장 대한민국 국민훈장 冬柏章(1972)
金粉玉	서울대 가정학과 교수
金鍾順	동덕여중고등학교장(1961~1964)
金三純	서울사대 교수(1946~1948), 서울여대 교수(1966~1978) 한국군학회 설립(1972)
張和順	'여성문제연구회' 발기인
玄丙辰	문교부 장학관 중등학교장(서울여중고, 창덕여중고, 경기여고 등) 역임
張明郁	서울대 가정학과 교수
玉仁善	서울教大 교수
尹瑞石	中央大 가정학과 교수 서울시 교육위원(1978~1982). 대한가정학회장
崔惠淑	숙명여고 교사(1953~1960) 檀國大, 弘益大 교수(1960~1978), 홍익대 부속 초등학교장(1978~1982)

<표 6> 나라여고사 조선인 유학생의 해방 후 사회활동 경력(<표 2> 연번 순).

이름	해방 후 사회 활동 경력
金淑培	숙명여전 교수, 朝鮮大 교수
文南植	숙명여중고 교장(1947~1961) 중앙교육위원회 위원(1954)

李礼行	사회부 부녀국 보호과장(1948.12.~1949.4.) 대한부인회 총본부 부회장(1949.2.~1952) 서울시 교육위원(1956~1958) 전국여성단체총협의회 부회장(1957) 여성문제연구원 총무(1958) 덕성여대 강사(1956~1960) 숙명여자중고등학교 전임 강사(1958~1960) 보건사회부 부녀국장(1960.5.~1961.9.) 숙명여자고등학교장(1961.10.~1974)
表景祚	서울대 강사, 숙명여대 강사 대한가정학회 회장(1953-1958) 문교부 교과용도서 편찬위원(1953~) 숙명여대 교수(1960.5.~). 숙명여대 가정대학 초대 학장, 아세아여성문제 연구소장 역임 중고등학교 가정 교과서 다수 집필
孫貞順	문교부 교수요목제정심의회 위원 장학관, 중등학교장(서울사대부속중, 창덕여중, 경기여고, 동덕여중고 등) 서울시 여교장회 회장(1971)
宋玉璇	덕성여대 교수
金樂信	문교부 편수관, 영등포여고 교장 대한가정학회 회장(13대)
許河伯	明星여자중학교장 (1946~), 국학대학 교수 건국부녀동맹 집행위원, 조선부녀총동맹 부위원장
朴奉浩	재건 승의여학교(승의여중) 초대 교장(1950)
卞珠	동아대 교수(~1977)
徐敬男	숙명여중고 교사(~1947)
朱月瓊	경기여고 교사(~1947) 숙명여대 교수, 서울대학교 사범대학 강사, 효성여대 교수, 이화여대 강사 등(1946~1956) 문교부 편수관(1956~1960) 중등학교장(영등포여고, 경기여고, 수도여고) (1961~1974) 문교부 교육정책위원회 위원(1972) 1982년 3월 미국 Union 대학 교육철학 및 교육행정 명예박사학위 1982년 9월 사설 가정과교육연구소 설립 소장 취임 중고등학교 가정 교과서 다수 집필
金福分	샬트르 성 바오로 수녀회 대구 수녀원 수녀
朴容卿	진명여중고 교사, 교감(~1961), 교장(1961~1982) 문교부 교수요목 제정심의회 위원 대한가정학회 부회장(1950) 대한여성교육同志會長(1972)
林玉仁	소설가 창덕여고 교사(1946) 『부인신보』 편집차장, 미국공보원 번역관, 월간 『부인경향』 편집장 등(1948~1950) 건국대 교수(1966~정년퇴임) 한국여류문학인회 회장(1972), 서울 YWCA 회장(1975), 대한민국 예술원 회원(1978~)
林英吉	博文여중 교장
金惠英	東萊여중 교사, 진주여중 교감
崔景珠	嶺南大 교수(~1982)
洪姪植	일본 도쿄대 유학, 수학박사학위 취득. 니혼대학 교수(1964~정년퇴임)
洪慶姬	獎學士 경북대 지리교육과 교수(~1984 정년퇴임)
鄭在仁	무학여고, 경기여고 교사 이화여대, 성균관무역대학원 강사 한국의대 일문과 교수
崔信德	부녀국 주사, 사무관(1951~1953) 중앙여고 교사(1955) 미국 유학, 사회학 석사학위 취득(1956~1958)

	단국대 교수(1961~1963), 이화여대 사회학과 교수(1963~정년퇴임) 한국사회학회 회장(1980~1981)
姜信珠	경북대 가정교육과 교수(~정년퇴임)
尹惠嫻	서울대 사학과 졸업 숙명여대 교수
金蓮玉	숙명여중고 교사 서울대 졸업(지리 전공), 서울대학교 사범대학 부속고등학교 교수(1952) 이화여대 사회교육과 교수

<표 5>, <표 6>에 등장하는 직업은 거의 모두 중고등학교³⁶⁾ 교사·교장, 대학 교수 등 교직이다. 해방이 여성에게 중등학교장, 대학교수, 학무관료, 공무원이 될 수 있는 기회를 열어준 것이다. 일본인이 차지하고 있던 교유·교장 자리가 공석이 되었고, 학제 개편에 따라 중고등학교와 4년제 대학이 증설되었다. 정부 수립 후에는 여성 부문 정책을 전담하는 부서도 신설되었다. 중등·고등교육기관의 교육자가 될 만한 학력을 갖춘 자가 극히 부족한 상황에서, 학력과 교직 경험, 그에 따른 학연과 인맥을 갖춘 여교사 유학생들은 그 수혜자가 될 수 있었다.

<표 5>, <표 6>의 중등학교 교사·교장 경력자는 일찍 轉職한 경우 외에는 모두 교감·교장을 역임했다. 여학교에는 여교장을 임명한다는 것이 미군정의 방침이기도 했다.³⁷⁾ 공립 학교 교장을 역임한 사례는 方順卿, 玄丙辰, 孫貞順, 金樂信, 朱月瓊 등이다. 孫貞順은 미군정 하에서 여성 최초로 문교부 장학관을 역임하기도 했다. 다른 3명도 모두 문교부 장학관·편수관을 지냈다. 사립 여학교에서도 모교 출신 여성 교장이 탄생했다. 숙명여중은 해방 직후부터 교장직을 맡고 있던 崔三植 측과 모교 출신 교장 임명을 요구하는 동창회 간 극심한 분규³⁸⁾ 끝에 숙명여고보 15회 졸업생이자 나라여교사 유학생 文南植이 1947년 4월 교장에 취임하여 1961년까지 재직했다. 그 뒤를 이은 교장은 文南植과 동기인 李礼行이었다. 朴奉浩와 朴容卿은 해방 전부터 모교에 재직하다 해방 후 모교의 교장이 되었다.

해방 후 고등교육기관 개편에 따라 전문학교들이 대학으로 승격·인가를 받기 시작하³⁹⁾ 공립대학이 증설되면서 여성 대학교수도 등장하게 되었다. 중등학교 교유였던 이들이 대학교수가 된 데에는 대학교육을 담당할 자격자, 즉 학사학위자커녕 전문학교 졸업자도 부족했던 시대의 혜택이 있었다. 대학교수 역임자에는 趙圻烘, 張明郁, 尹瑞石, 表景祚, 宋玉璇, 卞珠, 崔景珠, 姜信珠 등 여교사 가사과 출신의 가정학과, 가정교육과 교수가 다수인 것이 특징이다. 이들은 1947년 5월 대한가정학회 창립 및 활동에 참여하고 다수의 중고등학교 가정 교과서와 전공서를 집필하는 등 해방 후 한국 가정학 발전에 일익을 담당했다. 중등학교 교장으로 정년퇴직한 朱月瓊, 朴容卿도 여기서 빼놓을 수 없다. 朱月瓊은 대한가정

36) 1945년 12월 14일 고보·여고보가 중학교(초급·고급 각 3년)로 개편되었다. 중학교는 1949년 제정 교육법(1949.12.31. 법률 제86호)에 따라 중학교와 고등학교로 나뉘게 된다.

37) 『自由新聞』 1945.10.7. 1945년 10월 재개교한 경기고등여학교와 무학고등여학교 교장으로 각각 高鳳京과 車士伯이 임명되었다.

38) 『京鄉新聞』 1946.12.7.; 『경향신문』 1947.2.1.; 『경향신문』 1927.2.6.; 『동아일보』 1947.2.1.; 『동아일보』 1947.5.30.; 숙명 70년사 편찬위원회, 앞의 책, 205쪽

39) 예를 들면, 숙명여자전문은 1948년 숙명여대로, 덕성고등여학교는 1950년 덕성여자초급대학으로, 1952년 다시 4년제 덕성여대로 개편되었다.

학회 7~9대 회장이었고, 朴容卿은 대한가정학회 창립 당시 부회장이었다.⁴⁰⁾

가사과 출신 외, 해방 후 대학에서 연구와 교육 활동을 이어간 사례로는 金三純, 崔惠淑(이상 도쿄여고사), 林玉仁, 洪姪植, 洪慶姬, 鄭在仁, 尹惠嫻, 金蓮玉(이사 나라여고사) 등을 들 수 있다. 金三純은 도쿄여고사 재학 시절, 同校 출신이자 일본 최초의 여성 농학박사 加藤七チコ가 모교를 방문하여 전교생 앞에서 한 논문 발표를 듣고 큰 감명을 받고, 자신도 박사가 되겠다는 결심을 했다고 한다. 여고사 졸업 후 모교인 경성여고보 교유가 되었고, 집안에서 계속 결혼하라는 압박을 받았지만 공부를 계속해서 박사가 되겠다는 결의를 굽히지 않았다. 2년 의무복무만 마치고 떠나려 했던 유학길이 모교인 경성여고보에서 불들기도 했고 건강 문제 등으로 미뤄졌지만, 도쿄여고사 연구과를 거쳐 마침내 1943년 9월 홋카이도 제국대학을 졸업하고 식물학 이학사가 되었다. 이어서 동 대학원 농학부에 입학했지만 전쟁으로 학업을 이어가기 어려웠다. 1943년 10월 관부연락선 곤론마루(崑崙丸) 침몰 사건 당시,⁴¹⁾ 金三純도 그 배를 예약했다가 급한 일로 도쿄에 다녀오느라 배편을 놓친 덕분에 목숨을 건질 수 있었다. 金三純은 귀국 후 결혼했지만 일찍 사별했고, 해방 후 대학에서 가르치다 다시 일본 유학길에 올라 1966년 12월 규슈대학에서 생물물리학 전공으로 농학박사 학위를 받았다. 한국 여성 농학박사 1호가 되었으니, 도쿄여고사에서 일본인 여성 농학박사 1호를 보고 키웠던 꿈을 30여 년 만에 이룬 것이다.⁴²⁾ 이후 金三純은 평생 존경받는 과학자로 살다 2001년 향년 92세로 별세했다.

洪姪植은 1940년 3월 나라여고사를 졸업하고 히로시마문리과대학 수학과에 진학했다. 洪姪植은 1944년 졸업하고 귀국하여 경성제대 이공학부 교수 우노 토시오(宇野 利雄)의 조수로 일하다 해방을 맞았다. 해방 후 홍임식은 잠시 모교인 경기고녀에서 학생을 가르치다, 다시 일본 유학길에 올랐다. 이때는 아직 한국과 일본이 국교를 맺기 전으로, 유학을 위해 밀항을 한 것이다. 洪姪植은 1959년 도쿄대학에서 수학박사 학위를 취득하여 한국인 여성 최초의 수학박사가 되었다. 이후 洪姪植은 평생 교육과 연구에 몰두하며 지내다 2009년 향년 93세로 일본에서 별세했다.⁴³⁾

林玉仁은 해방 전에 이미 「봉선화」, 「孤影」, 「後妻記」 등의 소설을 발표한, 주목받는 작가였다. 해방 후 월남한 임옥인은 <표 6>에서 보듯이 여러 직장을 옮겨 다니며 작품활동을 계속했는데, 1966년 건국대 교수로 자리를 잡았다. 해방 전까지 경북고녀(구 대구여고보)에서 교편을 잡았던 洪慶姬는 미군정기에 잠시 경상북도 학무국 장학사로 재직했다. 당시 한 여성신문은 洪慶姬에 대해 “도청 직원 중에서도 제일 有識階級이라고 자랑하는 학무과 관리들의 수많은 남성에 섞여서도 조금도 손색이 없을 뿐만 아니라, 남녀공학의 교수법에 대한 권위자”이며 “경북 여성교육계의 자랑거리”라고⁴⁴⁾ 소개하고 있다. 洪慶姬는 1948년 대구사범대학 교수가 되어 1984년 경북대 지리교육과 교수로 정년퇴임하기까지 교육과 연구에 매

40) 대한가정학회 편, 『대한가정학회 50년사』, 1997, 25~80쪽 참조.

41) <표 1>에서 46번 송인봉은 졸업 후 귀국길에 곤론마루에 승선했다가 목숨을 잃었다. 송인봉은 김삼순의 경성여고보 제자였다.

42) 「원로와의 대담-우리나라 여성농학박사 1호 김삼순 박사」, 『과학과 기술』 26-5, 1993, 80-82쪽.

43) 이상구, 「한국 최초의 여성 수학박사 홍임식」, 『한국 근대수학의 개척자들』, 사람의 무늬, 2013, 135~137쪽.

44) 『婦女日報』 1947.6.7.

진하여, “한국의 도시지리학은 그녀로부터 출발했다고 해도 과언은 아닐 것”⁴⁵⁾ 이라는 찬사를 받았다. 나라여고사에서 일본문학을 전공한 鄭在仁은 한국의국어대학교 일본어과 교수가 되었고, 尹惠嫻과 金蓮玉은 해방 후 서울대학교에서 학업을 계속하여 각각 서양사, 지리를 전공하고 尹惠嫻은 숙명여대 사학과, 金蓮玉은 이화여대 사회생활학과(지리 전공) 교수를 역임했다.

崔信德은 나라여고사를 한 학기만에 중퇴했다. 전공인 가사과 공부가 적성에 맞지 않고 자신을 “식민지 학생으로 제도적으로 별도 취급”⁴⁶⁾을 하는 데 대한 괴로움이 이유였다. 崔信德은 재봉 수업에 대해 “생전 구경도 못해 보았던 일본 옷을 밤을 새워가며 한뼘 한뼘 애를 써서 완성시키고 나면 아무리 애써서 하지만 나에게는 아무 소용없는 것이라는 느낌이 항상 나를 괴롭히고 있었다”⁴⁷⁾ 라고 회고했다. 첫 여름방학때 귀향한 후 다시 나라여고사로 돌아가지 않았고, 이후 이화여전 영문과에 입학했다. 장학금으로 유학한 것이 아니므로 반드시 졸업해야 한다는 부담도 없었고, 조선 내에서도 일본으로든 다른 고등교육기관으로 진학할 수 있도록 집에서 충분한 지원을 받을 수 있었기 때문에 가능했다. 1941년 9월 이화여전을 졸업하자마자 咸興 출신의, 熊本의과대학에 재학 중이던 유학생과 결혼했고, 시댁에 들어가 가정부인으로 살다 1947년 월남했다. 해방 후 崔信德의 남편은 서울대 의대 세균학교실에서 연구하며 善隣상업학교 야간부에서 생물학을 강의했다고 하는데, 6·25전쟁 발발 직후 납북되었다. 4남매와 함께 홀로 남겨진 崔信德은 생계를 위해 일을 해야 했다. 전쟁 중에 처음 가진 직업이 부녀국 공무원이었고, 이후 YWCA 총무직으로 옮겼다가 중앙여고 영어교사가 되었다. 이화여전 영문과 졸업이라는 학력이 있었기에 가능한 일이었다. 이후 崔信德의 이력은 <표 6>과 같다.

교직 외 다른 일에도 종사했던 인물은 李礼行과 許河伯이다. <표 4>, <표 6>에서 보듯이, 李礼行은 매우 다양한 경력을 갖고 있다. 해방을 맞은 李礼行은 “아이들을 팽개치고, 밤낮없이, 때와 장소를 가리지 않고 무엇이든 해야 되겠다는 의욕”을 불태우며, “남성들보다 여성들이 앞장서서 일을 하면 나라가 잘될 것이라는 생각에서 열심히 뛰었다.”⁴⁸⁾ 마침 朴順天, 黃信德과 아주 가까운 집안 사람이 있었는데, 그를 따라다니며 심부름을 하면서 자연 여성지도자들과 접촉하게 되었다고 한다.⁴⁹⁾ 즉 李礼行은 해방을 계기로 교육이 아닌 새로운 영역의 사회활동에 뛰어 들 수 있었다. 1947년 월남한⁵⁰⁾ 李礼行은 朴順天, 朴承浩 등의

45) 成俊鏞, 「단보: 흥경희와 도시지리학」, 『한국도시지리학회지』 5권 2호, 2002.12.

46) 崔信德, 앞의 책, 68~69쪽. 나라여고사에서는 과목마다 교실을 옮겨서 수업을 하는데 일본인 학생들은 원하는 자리 어디든 앉아도 되지만, 자신과 중국학생 2명만 모든 수업에서 맨 앞줄에 앉도록 했다고 한다. 崔信德은 “이러한 제도적인 좌석의 차별”이 큰 상처가 되어 자주 울었다고 회고했다.

47) 崔信德, 앞의 책, 66~67쪽. 崔信德의 회고와 같이 조선인 유학생에게 일본옷 재봉은 민족감정을 자극하는 소재였다. 일본옷 재봉을 학습하지 않으면 본과생에 편입할 수 없다는 학교측의 설득에도 불구하고, 일본옷 재봉 시간에 조선옷 재봉을 자습한 유학생도 있었다(奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター編, 앞의 책, pp.369~370). <표 2>에서 金樂信, 鄭寬淑이 그들이다. 실제로 이 둘은 『일람』의 졸업생 명단에 본과가 아닌 선과수료로 기록되어 있다. 도쿄여고사 가사과 유학생 宋今璇도 “재단과 재봉이라고 하면 일본옷 기모노를 짓는 것이 주”였는데 상당한 비용이 들었기 때문에 조선인 학생들은 하기도 어려웠을 뿐 아니라 “일본 옷 짓는 것을 배워서 뭇 하느냐는 반감이 있었다”라고 회고한 바 있다(남해송금선박사회고록편찬위원회, 앞의 책, 159쪽).

48) 한국부인회, 『한국여성운동약사 - 1945~1963년까지 인물 중심』, 1986, 164쪽.

49) 상동.

50) 李礼行은 黃海道 鳳山 출신이다. <표 4>에서 이예행이 1933~1935년 재직한 朝陽農事學院은 고향에서 李礼行의

추천으로 대한민국 정부의 부녀국 공무원이 되었다. 처음엔 부녀국 과장이었고, 초대 부녀국장 朴承浩가 6·25전쟁 중 납북되자 부녀국장이 되어 1950년대 부녀행정을 책임졌다. 李礼行은 우익 여성단체의 열혈 활동가이기도 했다. 大韓愛國婦人會⁵¹⁾ 발족하자, 여성단체가 관변단체라는 비난도 아랑곳하지 않고 부녀국 공무원으로서 동원 가능한 자원과 정부 각계 인사와의 연줄을 충분히 활용하며 조직 확대를 위해 뛰었고,⁵²⁾ 여성문제연구원⁵³⁾ 창립 시에도 발기인으로 참여했다. 5·16 쿠데타가 발발하자 부녀국장을 사직하고 숙명여고 교장으로 취임하여 1974년까지 재직했으나, 해방 후 약 30년 간 고위공무원으로, 여성단체 임원으로, 교육자로, 다방면에 걸쳐 왕성한 사회활동을 펼친 것이다.

許河伯은 숙명여고보 재학 시절 “일인선생 배척 스트라이크를 한 번 했고”, 나라여고사 유학 중에는 “교토제대 공산당 사건에 관계해서 독서회를 하다가 모두 체포되었는데, 증거물을 인멸시키기 위하여 신문지 석장을 다 뜯어먹어버리느라고 아주 혼이 난 일”도 있었다고⁵⁴⁾ 한다. 또한 許河伯의 배우자 金復鎭은 조선프롤레타리아예술가동맹(KAPF)에 참여했고, 高麗共產靑年會 간부로 활동하다 5년 반 동안 감옥살이까지 한 인물이었다. 그러나 許河伯은 1940년대 전후부터 각종 동원조직의 간부를 맡고, 여성의 전쟁 협력을 독려하는 강연과 기고 활동을 적극적으로 전개했다. 해방 후 그녀는 사립 明星여학교 교장직을 맡은 동시에, 식민잔재를 통렬하게 비난하는 좌익 여성운동가로 다시 한번 변모했다. 許河伯이 좌익 여성단체 조선부녀총동맹의 간부로서 내놓은 언설을 일제 말의 그것과 비교해 보면 동명이인이 아닌가 싶을 정도이다. 許河伯은 6·25 전쟁 중에 사망했지만, 짧게나마 여성단체 간부로 활동할 수 있었던 것도 해방이 준 선물이라고 볼 수도 있겠다.

이와 같이 해방은 여성에게 그동안 철저히 남성의 자리였던 교장, 교수, 관료, 諸단체의 간부가 될 수 있는 기회를 열어주었다. 그러나 이들의 활동 범위는 ‘여성 전용’ 분야를 벗어나기 어려웠다. 재직했던 학교는 거의 모두 여학교였고, 대학교수 역임자는 가정학 전공이 많았다. 또한 그 안에서 견제와 무시도 피할 수 없었다. 孫貞順은 6·25전쟁 중 대구에서 ‘서울피난연합중학교’ 운영을 담당했는데, 당시 문교부 장관이 이 학교를 위해 10개 교실분의 건축자재를 배정하도록 경상북도 학무과에 지시했지만, 당국은 손정순에게 장관의 지시 자체를 알려주지도 않고 해당 자재를 대구사범학교 교실 건축에 배정해 버렸다고 한다. 손정순은 이 일에 대해 “여교장이라 하여 만만히 보고 한 짓이 아닌가 하고 혼자서 곰곰 생각해보니 매우 섭섭했다”라고⁵⁵⁾ 회고했다. 李礼行은 부녀국장을 지내는 동안 정부의 조직개편이 있을 때마다 부녀국의 존속 여부가 거론되어 하룻밤 사이에 부녀국이 없어졌다 살아났다 하는 우여곡절을 겪었고, 부녀국은 가장 약한 국이어서 항상 타 부처에 비해 예산도 가장 적을뿐더러 간신히 확보해놓은 예산을 다른 국에서 가져가기도 하는 등 예사로 무시를 당했

부친이 설립·운영한 학교였다.

51) 해방 후 조직된 우익 여성단체 중 韓國愛國婦人會와 獨立促成中央婦人團이 1946년 4월 ‘獨立促成愛國婦人會’로 통합했고, 1948년 ‘大韓愛國婦人會’로 개칭했다.

52) 한국부인회, 앞의 책, 165~166쪽.

53) 여성문제연구원은 1952년 11월 黃信德을 원장으로, 표경조, 이례행, 李姬鎬, 李兌榮 등이 발기인으로 참여하여 출범했다. 1959년 12월 16일 여성문제연구회로 개칭했다.

54) 『獨立新報』 1946.11.17.

55) 『朝鮮日報』 1975.6.15.

다고 회고했다.⁵⁶⁾ 여성 부문 정책을 전담하는 부서가 신설되고 고위직 여성공무원이 탄생했지만 존재감 미약한 비주류였다.

이러한 한계에도 불구하고 <표 5>, <표 6>의 인물들은 해방이 가져온 기회를 놓치지 않고 자신이 가진 학력과 인맥, 교직경험 등의 자산을 충분 활용하여 사회활동의 범위를 확장하고 지위를 향상시켜 갔다고 할 수 있다. <표 5>, <표 6>에 이름이 없는 유학생들 중 일부는 해방 후 법조계, 언론계, 예술계, 의료계, 학계 등 각 전문 분야에서 활약한 남성의 배우자로 이름을 남겼다.

V. 結語

여고사 유학생들의 경험과 성취는 식민지 조선에서는 남성에게도 어려운 것이었다. 미처 졸업까지 하지 못한 경우라도 여고사에 입학원서를 낼 수 있는 자격을 갖추는 것도 극소수의 여성에게만 가능한 일이었다. 이들의 성취에 개인의 학업능력이나 의지에 앞서, 타고난 가정환경이 작용했다는 것은 부정할 수 없다. 딸도 아들과 같은 정도로 교육시킬 수 있는 경제력, 여고보를 졸업한 딸을 시집이 아니라 유학을 보내겠다는 가부장의 의지가 뒷받침되지 않는 한, 여고사 유학은 거의 불가능한 일이었다. 따라서 이들의 경험과 성취는 다분히 특권적인 것이라고 할 수 있다.

여고사 유학생들은 중상층 계층의 남성조차도 쉽게 갖기 어려웠던 기회를 누린, 극소수의 혜택을 받은 여성이었다. 이들은 대부분 자신과 비슷한 사회경제적 배경을 가진 여학생들이 모여 있는 여학교에 취직했고, 자신과 마찬가지로 고등교육을 받고 전문직을 가진 배우자와 결혼하여 근대적인 가정을 꾸림으로써 계층 내 이동과 유지에 성공했다. 다수가 졸업 후 바로 결혼하거나, 직업생활을 하다가도 결혼·출산을 계기로 사직하고 가정으로 들어갔다는 사실을 볼 때, 이들의 가정생활과 직업생활에 성별분업적 젠더규범이 영향을 미친 것은 분명하다. 이는 조선에서 극소수인 고학력의 여성 교유라도 여성에게 불리한 성별분업적 인식과 부담에서 자유로울 수 없었다는 것을 보여준다. 그럼에도 본인과 친정, 배우자의 사회경제적 지위를 고려할 때, 이들 대부분은 경제적 어려움이나 식민지배의 폭력과 억압을 직접 경험할 일이 거의 없는 삶을 살았을 가능성이 높다. 여고사 유학생들이 귀국 후 학교가 아닌 공간에서 교육운동이나 여타 사회단체 활동을 했거나 민족운동에 참여한 사실이 확인되지 않는 것은 이러한 계급적 특성에도 관련이 있는 것으로 이해된다. '부유하고 개명한 아버지의 사랑스럽고 소중한 딸'이라는 배경은 이들에게 여고사 졸업이라는 학벌과 상당한 사회경제적 지위를 갖게 했지만, 동시에 이들의 삶을 일정한 유형으로 한정하는 요인이기도 했다. 한국에서 친일반민족행위자로 규정된 4명의 삶은 동시대 대다수의 조선인 여성과 거리가 먼 삶을 살아온, 자기 내부로부터도 외부로부터도 스스로를 탈바꿈할 수 있는 각성의 기회를 갖지 못했던, 탈민족적이고 자기중심적인 고학력 여성 교유의 민낯을 대표한다고 할

56) 한국부인회, 앞의 책, 173쪽.

수 있다.

참고문헌

『京城日報』, 『東亞日報』, 『朝鮮日報』, 『每日申報』, 『京鄉新聞』, 『自由新聞』, 『婦女日報』, 『獨立新報』

『別乾坤』, 『女性』, 『과학과 기술』

『官報』, 『朝鮮總督府調査月報』, 『朝鮮總督府統計年報』

『東京女子高等師範學校一覽』

奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター編, 『奈良女子大学百年史』, 奈良女子大学, 2010.

太田孝子, 『海峽を越えて』, 春風社, 2008.

金順英, 『한 빛을 따라: 김순영자서전』, 益文社, 1976.

南海宋今璇博士回顧錄編纂委員會, 『去華就實: 南海宋今璇博士回顧錄』, 德成女子大学出版部, 1978.

대한가정학회 편, 『대한가정학회 50년사』, 1997.

朴宣美, 『여성, 제국을 거쳐 조선으로 회유하다』, 창비, 2007.

이상구, 『한국 근대수학의 개척자들』, 사람의 무늬, 2013.

林玉仁, 『나의 이력서』, 正宇社, 1985.

趙圻烘, 『芝蘭의 뜰에서: 又棠 趙圻烘 自敘傳』, 誠信女子師範大學出版部, 1979.

崔信德, 『그 은총 속의 나의 인생』, 생각하는 백성, 2009.

崔惠淑, 『역사의 파도를 헤치고』, 천지성지사, 1999.

한국부인회, 『한국여성운동약사-1945~1963년까지 인물 중심』, 1986.

玄丙辰, 『메마른 언덕에 꽃밭을』, 培英社, 1981.

成俊鏞, 「단보: 홍경희와 도시지리학」, 『한국도시지리학회지』 5권 2호, 2002.12.